平成21年12月2日発行 第20巻第18号通巻256号 平成12年7月4日第3種郵便物認可 定価680yen

H

10th ANNIVERSARY SPECIAL

嵐 NOW AND FOREVER

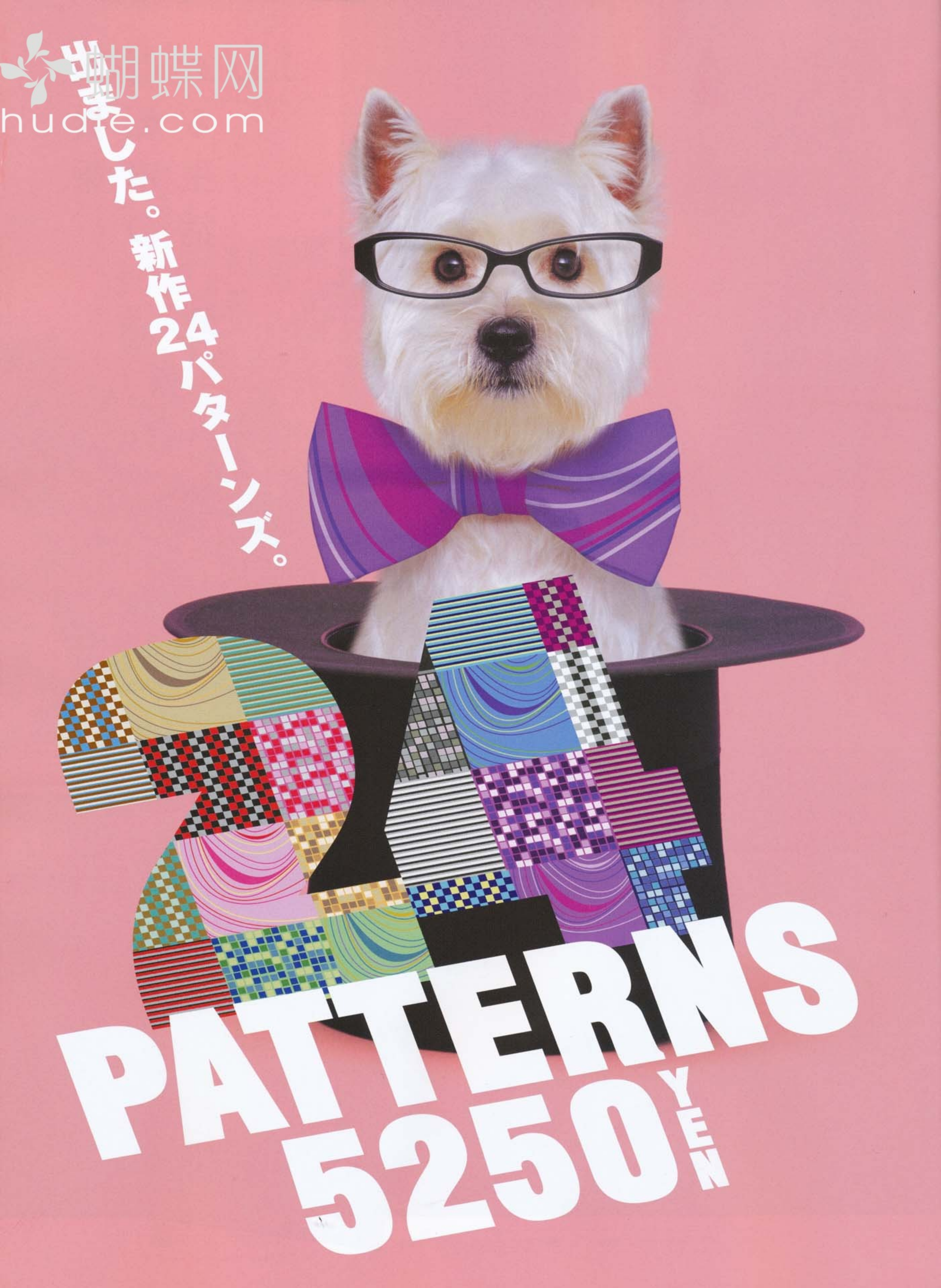


宮﨑あおい

阿部サダヲ×皆川猿時×宮藤官九郎

『のだめカンタービレ』上野樹里×玉木宏 in パリ

DECEMBER 12


出ました。新作24パターンズ。
24
PATTERNS
5250 YEN


目元に、秋の到来です。ゾフの新作フレームは、モザイクやストライプなど4種類の柄を、各6色のトレンドカラーで表現した"24 PATTERNS"。デイリーユースからパーティシーンまで幅広い時間にベストマッチ。メンズとレディースで展開します。
Zoff
www.zoff.co.jp
蝴蝶网
hudie.com
映画タイアップキャンペーン
12月31日(木)まで
わたし"メガネ"出すわ
10月31日公開映画「わたし出すわ」のタイアップとして「わたし"メガネ"出すわ」キャンペーンを実施。不要なメガネをもってゾフショップへ行くと¥1,000ギフトカードがもらえます。
＊詳しくはHPまたはモバイルサイトへ
ZH91034 D-2B
ZH91034 C-1B
ZH91034 B-1B
ZH91034 E-1B
ZH91034 H-1B
ZH91034 A-1B
ZH91034 D-2A
ZH91034 C-2A
ZH91034 B-1A
ZH91034 E-1A
ZH91034 H-2A
ZH91034 A-2A
ZH91035 D-2A
ZH91035 C-1A
ZH91035 B-1A
ZH91035 E-3A
ZH91035 H-2A
ZH91035 A-2A
ZH91035 C-2B
ZH91035 C-1B
ZH91035 B-1B
ZH91035 E-2B
ZH91035 H-2B
ZH91035 A-2B


衣食乗、
自転車の
ある生活。
http://www.be-all.co.jp

BE・ALL

feeling bike × feeling life

BE・ALLとは、《すべての》、《ありのまま》、《自然体》。
例えば、自然の恵みに感謝してごはんをおいしく食べること。
例えば、お気に入りの服を着て1日を過ごすしあわせ。
そんなふうなあたりまえの感覚で、
"自転車に乗ること"があってもいいのではないでしょうか。
目指したのは、自転車の一生モノです。
何気ない日常の中に、"BE・ALL"を感じて下さい。





AKI CORPORATION LIMITED
有限会社アキコーポレーション
〒570-0039 大阪府守口市橋波西之町1-10-2
TEL 06-6995-7880

カタログご希望の方は切手480円分（80円×6枚）を同封の上、上記までお申し込みください。


TOPPER
BRASIL TU ÉS O MAIOR BARATO
maracaju
TOPPER
maracaju CHOCO
maracaju BLK. GRY. \9,240(税込)
roncador BGE. GRN. RED. NVY \10,290(税込)

010 **嵐 10周年アニバーサリー・スペシャル**
1999年11月3日のデビューから、今年で丸10年を迎えた嵐。
彼らの放つ唯一無二な魅力を追いかけてきたHだからこそ実現した特別企画!!
5人のスペシャル・フォト・セッションはもちろん、
それぞれの思いに迫るソロ・インタビューで、走り続ける彼らの現在地を紐解きます!!

028 **宮﨑あおい『ソラニン』**
浅野いにおの原作コミック『ソラニン』が、宮﨑あおい主演で映画化。
Hではいち早く、この話題作の現場に潜入しました!!
ギターを抱えるあおいちゃんのレアなフォト＆最速インタビューで、舞台裏に迫ります。

042 **上野樹里×玉木宏『のだめカンタービレ 最終楽章』**
『のだめカンタービレ 最終楽章』の撮影現場を追いかけて実現した、
H独占、初秋のパリに佇むのだめと千秋のフォト・ストーリー。
気合十分の上野樹里×玉木宏の対談もあわせてお楽しみください!!

064 **阿部サダヲ×皆川猿時×宮藤官九郎『なくもんか』**
阿部サダヲ主演作『なくもんか』がいよいよ公開!
脚本を手がけた宮藤官九郎と、商店街の幼なじみを演じた皆川猿時を加えた
3人で繰り広げられる裏話＆マニアックネタ満載の大爆笑鼎談をどうぞ!!

074 **『パーマネント野ばら』**
菅野美穂／池脇千鶴／小池栄子
西原理恵子の原作コミックを、菅野美穂主演で映画化した『パーマネント野ばら』。
高知県で撮りおろしたノスタルジー溢れる現場フォトやキャストへのインタビューで、
女たちのしなやかな強さを描いた本作の魅力に迫ります。

086 坂本真綾
092 NICO Touches the Walls
098 AYUSE KOZUE
104 のあのわ
108 HI LOCKATION MARKETS
112 『恋時雨』
コトリンゴ インタビュー



今月の表紙＝嵐
Photograph by Hiroshi Nomura

DECEMBER 2009 H12月号
定価680円(本体648円)
発行人＝渋谷陽一 編集人＝内田 亮
編集＝上田智子／小柳大輔／上田佳菜／小島麻未／清水大輔／川又朋恵
編集協力＝岩沢朋子／小野寺佐登美／小口早苗／
松身恵／久冨芳恵／石井彩子／佐藤久理子
アートディレクション＆デザイン＝関万葉
デザイン＝河中るりか
プリンティングディレクション＝冨岡隆(凸版印刷株式会社)
発行＝(株)ロッキング・オン
〒150-8569 東京都渋谷区桜丘町20-1
渋谷インフォスタワー19F TEL 03-5458-3031
http://www.rock-net.jp hhm@rock-net.co.jp

ARTICLE

007 アンテナH(臼田あさ美)
008 カンバラクニエ「すりばち眼鏡」
110 「ポラ日記」: Aira Mitsuki
119 編集後記
122 H memo

CONTENTS

VOL.103 DECEMBER 2009



アンテナエイチ
antenna H
vol.24

今夏公開の『色即ぜねれいしょん』で、その無邪気な魅力をふりまいた臼田あさ美さんが「アンテナH」に登場！ 何を持っていこうか考えていたという彼女が、取材日の朝に「これだっ！」とひらめいた、お気に入りの品々です。

Text by Asami Ojima





①「ぼーっとするのに集中させてもらってます（笑）」



②「沖縄の木で、がじゅまるには妖精がとまるって言われてるんです」



③「加賀さんの若い頃の映画を観るのもすごく好きですね」



④「ブログもこれで書くんですけど、文章を書くのは楽しいですね。勉強にもなります」

「（①）このキャンドルは、最近、JUNEさんっていうキャンドルアーティストの方にお会いする機会があって、誕生日が近かったのでいただいたんです。その時に妙に『あ、キャンドルっていい！』って思って。最近ひとり暮らしを始めたのもあって、ハマってますね。お風呂に持っていくんですけど、一酸化炭素中毒が怖いので、ドアを開けて入ってます（笑）」

「（②）これはがじゅまるの木です。でも、3日間仕事で海外に行ってたら枯れていて……なにをやっても復活しないので、お花屋さんに持って行って、病院みたいに（笑）。で、とにかくたくさん水をあげて太陽を浴びさせてって言われて、最近ようやく復活してきたんです。最近は毎日この子のことを考えてます（笑）。何かの世話がしたかったんですよね。生き物があると、ちゃんとしなきゃって思うし。Coccoさんの"がじゅまるの樹"って曲も好きですし」

「（③）加賀まりこさんが好きなんです。まだ読んでる途中なんですけど、最初から結構衝撃的でした。20歳で思い立ってひとり旅でカンヌに行って、知り合いのツテで映画祭に出て、運よく自分の映画もカンヌで上映されていて……。そういうパンチの効いた人生を読むのは楽しいです。女優さんとしてはもちろんですが、生き様にも憧れます。もし会ってみたら……？　恥ずかしい（笑）」

「（④）必ずパソコン持って外出するんですよ。家や移動中でもずっと音楽を聞いたりしているし。ブログを書いたり、ニュースを見たり、情報源でもあります」

臼田あさ美さん近況！

フジテレビ系列で放映中の月曜９時ドラマ『東京DOGS』に出演中の臼田さん。役どころは、小栗旬さん＆水嶋ヒロさんと同じく刑事役で出演中の、勝地涼さん演じる堀川の恋人とのことですが、この役、臼田さんいわく「ちょっとストーカー気味の女の子」だそう。また、2010年１月には待望の初主演映画『ランブリングハート』の公開も控えています。スペースシャワーTV『スペチャ！』や、日本テレビ系列『メレンゲの気持ち』でもレギュラー出演中。あらゆるファッション誌でもひっぱりだこの彼女に、これからもますます注目です!!　オフィシャルブログはhttp://ameblo.jp/usuda-asami/。



なないろの夏が過ぎていきました。
あっという間が盛り沢山の夏でした。
暑い中、たくさんの方に展覧会へと
足を運んでいただきまして、
ほんとうにありがとうございました。
毎日暮らしているところで
展覧会を開催していて、
開催しながら普通に暮らしていて
なんとも不思議なことでした。
そんな風に晴れがましいハレの日も、
何という訳でない普通のケの日も、
(普通の日なんてない気もするけれど…)
ともかくお寺がお家の日々が
足下に過ぎて広がっていっています。
特に修学旅行生が座禅体験に
ぞろぞろと来ている秋な今日この頃。
座布団を並べてはしまうのでした。
そんなところで展覧会もしていたけれど、
8月には友人たちが集まってそこで、
にぎやかな結婚パーティーをしてもらい、
10月つい先日には
親族に集まってもらって
あらためましてあらためての
仏前式をそこで挙げました。
あらためますとあらたまり、
ほんとうにごく普通京都的な
うなぎの寝床な家庭にいた私が、
なにがどうしてどうなったのか
どこからどこまでが家かよく分からない
とびきり京都的な祇園がすぐ隣で
それなのにとびきり静かで空が大きい
お寺の寺庭に暮らしています。



ひきもの

引き出物は、杉本しさんの風呂敷でひとつづついろんな柄で包んだ。

主人側の親族のみなさんには私の作品集、自己紹介がわりに。

↑パーティのお土産には友人の清水志郎くんが、100枚も小さいお皿を焼いてくれた。何枚かに主人と絵を描いた。

↑みなさんに老師様の書の色紙。

寿

はきもの

雨の日にスニーカーで、走って傘さしつつ、ぞうり屋さんに足袋持参でぞうりを買いに行った。職人さんが足にあわせ花緒をしめてくれはったので、おかげさまにてピッタシ。

私はやたら足のゆびが長いのです。

でも、今はブーツが欲しい。

よそゆきのハレなぞうり
普段使いなおでかけぞうり
おしゃれ遊び用のぞうり
夏に大活躍したぞうり
ゆかた用のげた
毎日のようにペタンコのバレエシューズ
雨の日も大丈夫エナメルのバレエシューズ
どこまでも歩いて走れる安心のスニーカー
あっちへこっちへと家にいてもうろうろ靴をぬぎはきするので、活躍の機会がへったヒールとブーツ、パンプス。

↗きものパスポート。これを持ってきもので京都観光するとお得らしいです。

すりばち眼鏡

カンバラクニエ

7月、8月の間主人は毎日かねつきに出かけていった。

つきもの

おまんじゅうには黒文字がつきもので、それから、お抹茶がつきもので、それからその後にはすぐ普通のお茶がつきものです。

いただきもの

いろいろ和菓子。おまんじゅう。

いっぱいパン。

いただきものあれこれ絶えずありがたし。

バケツにいっぱいのタマゴ。

いろいろ洋菓子。

どうやら憑き物な存在にはまだお寺で会ったことがない。

かきもの

送りそびれているお手紙、書きそびれている日記、描きかけの猫の絵

こちで暮らすカメが、大雨のたび流されていたけど、近くで卵を産んでいた。

←友人からおきものなカメが送ってきたのに、手紙をかきかけたままだ。

主人の着物は、いや衣なんですが着がえるのに約3分。1日に何回も作務着、お洋服、衣と、くるくる衣装がかわる。

着物もたもた。

ごちゃごちゃ。

見た目平常どおりなのですが、つい先日は鼻の中にびっくりサイズのできものが!!! 痛くて大変でした。

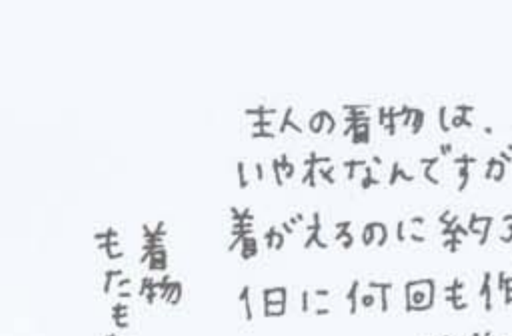
よきもの

自分のおなべができた。一生物の名前入り。お玉にまで名前入り。ほってもらった。

あきもの

のお洋服にまだちっとも手が出ず。実家からの移動もおわらず、まだ少し夏のにおいファッションの日々。。





お坊さんのお嫁さんのことをここでは「寺庭さん」と呼び、正式には「寺庭婦人」といいます。深く考えないままに普通に一緒に暮らしておりましたがそうなんです、主人はお坊さんでした。イラストレーターは11年目にして、寺庭婦人という肩書きが加わり、毎日はますます自然なようで、お天気のように予想外となり、私はますますの未熟者です。それはますます面白いのですが、とにもかくにもバタバタバタバタと今に追われてしまう最近でして、今はいつでも先の明日につながって、これまでが今日を支えているから、もっと明日やその先まで楽しみになる末広がりの今を重ねられるように、ますます足下を大事にはげまねばと実感しておるすりばち眼鏡で、寺庭婦人画報なのでした。

ますますどうぞよろしくどうぞ。

クニエ☺


AND FOREVER

ARASHI NOW

PHOTOGRAPHS BY HIROSHI NOMURA
STYLING BY DAISUKE IGA [KiKi inc.]
HAIR & MAKE UP BY YUKIO HATTORI, YOSHINORI TAKEUCHI [MAKE-UP ROOM]
TEXT BY TOMOKO UEDA












蝴蝶网
hudie.com



1999年11月3日、

自らのグループ名をタイトルにした楽曲でデビューした嵐。あれから10年、自ら発信するコンサートでは毎年その濃さと感動が更新され、バラエティ番組ではとぼけた魅力をおりまぜ、音楽的にも様々な挑戦をし……テレビ、ラジオ、雑誌、CMなどなど、求められた仕事を嵐らしいものに昇華して表現してしまうしなやかなタフネスが、どんどん強くなっていったと思います。

しかし嵐が一番特異なのは、ひとりひとりが強烈な個性とアイドルの枠を超えた才能を持っているのに、5人が集まった途端にあったかくてセンチメンタルな磁場が生まれてしまうこと。そして、バカバカしいことを言って笑ってるのを見るだけで甘酸っぱい気持ちになってしまう「青春」や「幸福感」を体現しているグループであり、さらに、その姿が永遠に続くのではないかと思わせてしまうところなのではないでしょうか。彼らがガチで仲良しで、互いに信頼しあっていることが透けて見える関係性は「人としてこうありたい」と憧れてしまうところでもあり、だからこそ、その魅力が大勢の人に気づかれ、広く受け入れられたのは当然のことだったと言えるでしょう。

でも、当の本人たちの根本は、まったく変わらぬまま。『H』初登場の号のインタビューを読み返してみても、5人の考え方や仕事に対する姿勢、取材するこちら側の彼らに対する印象がほとんど今と同じだということに驚きます。まっすぐでクレバーな人間性を武器に、飾らず、焦らず、ありのままの姿で、新しいアイドルの価値観を作ってしまったのです。

この『H』が発売される11月3日から11年目に突入する嵐ですが、嵐が嵐である限り、彼らに裏切られることはないでしょう。だって、誰よりも嵐のことを愛し、理解しているのは、他でもないこの“5人”なのですから。

祝・デビュー10周年！といっても、5人が言うようにそれはあくまで通過点。そこで今回のアニバーサリー特集では、「今」彼らが何を思い、「今」自分と嵐をどう捉えているのか？という、それぞれの現在地を訊くことにしました。

撮影＝野村浩司
スタイリング＝伊賀大介（KiKi inc.）
ヘア＆メイク＝服部幸雄、竹内美徳（MAKE-UP ROOM）
テキスト＝上田智子

相葉雅紀

嵐であることのプライドは持ってますよ。"嵐の相葉雅紀"でずっといたいんで。

いきなり跳ね上がるテンションや、常に全力で楽しむ姿勢で、嵐全体の雰囲気を引っ張る相葉雅紀さん。ソロバラエティ『天才!志村どうぶつ園』や舞台での芝居など、経験を重ねるごとにどんどん成長して充実した顔になっていきますが、周りの空気を読んで前に出たり一歩引いたりする勘のよさは変わらぬまま。さらに、「人が好き」と公言できる強くて優しい人柄そのものが彼の大きな武器になっていますが、心からの感情を素直に外に出しているように見える、つまり、表に出している感情に虚飾がないように見える相葉さんが、ずーっと「嵐が大好き」「嵐でよかった」と言い続けていることも、強烈なメッセージになっているように思います。「直感で違うと思ったら、計算で合ってても、ちょっと嫌」と言う相葉さんの現在地はどのようなものなのでしょうか。

――相葉さんは、ずーっと「嵐が大好き」っておっしゃっている方で。

「はい」

――いつ頃から「嵐を好き」って言えるようになったんだと思います？

「いつぐらいから？ そうですねえ……いつからか、です(笑)」

――(笑)ざっくりしてますねえ。

「いつっていうきっかけっていうのはないんですけど。ただやっぱり、いろんなことを5人でやっていく上で、僕らって先が決まってないから、いつまで嵐かなんてわかんないし。それこそねえ、明日誰かが病気になったら、5人で嵐なんだからさ……と思うんだよね。嵐っていうもの自体が、夢のような世界だったりもするし。だからこそ、大事にしたいっつうか。でもね、『嵐ってなに?』って言われると、よくわかんないんですよ。ただ好きっていう(笑)」

――(笑)その「好き」の種類みたいなものって、10年間ずっと同じままですか？ それとも「好き」の種類が変わってきたりしていますか？

「うーん……好きの種類？ どうだろうな。あのねえ、なんで好きなのかなって考えたことがないです。大きく好きなんだろうね(笑)。(『H』の夏休み号(05年10月号)を見ながら)だって超楽しそうでしょ、俺ひとりで。みんなと全然違うもんね(笑)。ほら！ この辺(胸元)、汗でビッチャビチャでさあ(笑)。たまに思うんだけどね。5人の写真見て『あ、俺ひとりで浮いてんな』って(笑)」

――はははは。

「でも、みんなも楽しんでると思うよ。俺ねえ、びっくりしたのが、こないだ5人で話してて、『どうする？ 今年5人で旅行行く？』なんて話が出たの。ほんとにまとまった休みがあったらリアルに5人で行こうか、みたいな話してて。『どこ行く？』『いや待てよ、国内はちょっと厳しいな、5人だけだったら。ちょっとサポートが必要だな』『だったら海外行っちゃおうか？』とかって(笑)。なんか年々仲良くなってる気がするな」

――常に"今"が一番いい状態のグループだという気がしますよね。

「嬉しいですね、そう言っていただけると。(『H』04年4月号を見ながら)これ、覚えてんなあ。学校だよね？」

――この時相葉さん、38度の熱出してて。

「全然覚えてないや(笑)。扁桃腺取る前だね、じゃあ」

――取るとよくなるんですか？

「熱出なくなります。ここ(扁桃腺)で炎症起こして熱出るから。だから俺、体の部分では10年間で結構悩みましたね。もともと体が弱過ぎて、3歳ぐらいから水泳始めたんですよ。で、ちょっと強くなって、体動かすことが好きになったんだけど。でもやっぱ、嵐になってからもずーっと3ヵ月に1回は熱出してましたね。扁桃腺取ってからは、全然大丈夫だけど。肺気胸になったりもしたしね」

――その都度、嵐について考える局面があったっていうことなんですか。

「気胸の時はちょっと、『あ、もうだめかも』と思った。1ヵ月休まなきゃいけないって言われたし、その期間にあったハワイでのファンツアーも行けないって思ったし。こりゃまずいなっていうのは正直あったんだけど、奇跡の5日で退院ていう(笑)」

――(笑)すごいですよね。

「1ヵ月入院が5日で退院っていうねえ、奇跡が起きたんですよ。だからファンツアーも行けて。もし俺、そのまま1ヵ月入院してたら、モチベーションとかもそうだしさ、すごい迷惑かけちゃったなっていう罪悪感とかで、もしかしたら潰れてたかもしれない」

――そのことは自分にとってもターニングポイントだったと思います？

「うん。ターニングポイントっつうか、まあ、考えたよね」

――考え方の変化もありましたか？

「どうだろうなあ。でも、だからこそ、俺、あの病気とかがあってよかったなと思うんです。いや、よかったことはないんだけど(笑)、たぶんあの病気がなかったら、今の自分の考え方にはなってないと思うし。いろんな経験があって、今があるんだな、とは思います」

――やっぱり10周年ということで、振り返ることも多いですか？

「なんかさあ……あっ、一緒だ、このレストランと(取材場所がレストランでした)。"10周年記念"だって」



――ほんとだ(笑)。ボードに書いてありますね。

「ここと同期なんだ(笑)。なんかさあ、こういう特集を組んでくれたり、こういう機会をいっぱいもらえるから振り返るけど、そういう機会がなにもなかったら、僕は振り返んのは全然早いと思う。それこそ、もう終わりっていう時に振り返ればいいかなって思ってるので」

――でも、今までの道のりっていうのは確かにあるわけで。その中で、相葉さんならではのことは、どんなことを築けてきたと思います？

「なんだろうなあ……まあでも、今こうやってここにいれるっていうことが、俺はすごいことだと思うけどなあ。それこそ毎年コンサートやらせてもらってさ、その他にもいろいろやらせてもらって、今ここにいれるっていうことが、僕は"ならでは"だと思います。だって、なんとなくやってたらべつに、ねえ？」

――絶対もうここにいないですよね。

「いないですよね。ひとつひとつやってきた結果だとは思う。じゃあ、ここがなんなんだって話なんだけど(笑)、まだこれからだと思うし」

――大勢の人に求められているこの状況で、全てに嵐クオリティを出していくのは、相当なエネルギーが必要だと思うんですけど、その中で大事にしたいものはなんですか？

「すごい細かいことだけど、『(嵐の)宿題くん』とかで乳首あきTシャツやったりさあ、その辺て、ずーっと昔からの流れだし。俺ら、全然、『もうそれやめようよ』になんないのね」

――(笑)むしろどんどんノリノリになってますよね。

「うん、そう。『Dの嵐!』とかやってた頃の深夜のノリっていうか。それこそ前は5人だけでやってたし、ああいうのもう1本やりたいなあとは思うんですけどね。みんなでロケ行って、身体使ってやるようなのって、俺大好きなんで。今はゲストの方に来てもらって、きれいなスタジオでやる方向が多いから、機会があればやりたいですよ」

――ちょっと寂しさみたいなものもあったりするんですか？

「寂しさはないですけどね。番組のテイストだからね(笑)」

――(笑)そりゃそうか。それぞれのカラーがありますもんね。

「そうそうそう。でも、ああいう感じって、俺は嵐の原点なのかなって気はするし。その辺の学校の5人が集まって"すごろく"しましたみたいなさ(笑)。その感じって、僕は結構強く持ってて、変わりたくないなと思いますけどね。そういう機会がだんだん減ってくるような時期だとは思うんだけど、俺はやっていきたいなと思うし、みんなもそう思ってると思うし……。なんかね、幅だと思うんだよね。それがあるから、かっこつけた時に、より――」

――輝くっていうか？

「うん。かっこいいことだけやってたら、かっこよくないと思うし、俺。そこにはなんにも面白さがないと思うし。それは僕の考え方だからあれだけどさ(笑)。だから、これだって恥ずかし過ぎるよ、っていうのも俺はほんとは使ってほしいの」

――幅という意味で、今はいろんな可能性があるなっていう意識がありますか？

「ありますよ。個人的にも、ドラマとかさ、体操のナビゲーターやらせてもらったりだとかさ。その辺も幅だと思うし。だから年々楽しくなってますよ」

――じゃあ、相葉さんにとって嵐とはどういう存在ですか？

「たぶん30分ぐらい前に、『嵐ってなに？って言われると、よくわかんない』って言ったでしょ？」

――はい。

「でも訊きたいでしょ？」

――(笑)はい。

「(笑)そうだよね。ほんとにねえ、言い表せないんだけど……うーん……好きです。ははははは」

――(笑)それね、「嵐のセルフ・ポートレート」の連載で同じ質問した時も、「嵐？ 好きですよ」って答えてくれたんですよ。

「はははは。だって、なんだろう。『どんな存在』？」

――嵐というグループじゃなくて、人として考えると？

「人として考えると、それこそなんでも当てはまると思うんですけどね。家族以上に一緒にいるしさ。友達的な相談もできるしさ。仕事の仲間っていう解釈の仕方もあるしさ。ライバルっていう捉え方もあるしさ。なんでも当てはまるなあ」

――嵐という概念はどう捉えていま

すか?

「すごい難しいっすねえ……まあ、"嵐"という名前だけが独り歩きしないように、地に足着けていきたいですけど。嵐だけどっか行っちゃってさ。メンバーの気持ちがついていけないみたいになったら嫌じゃん」

──今一番大切にしたいものはなんですか?

「それはたぶん、続けていく以上いっぱいあると思うんだけど……目の前のことをひとつひとつやっていくことが続けていくことだと思うの。だから、あまりおっきい目標まで頭がいかないっていうか」

──目の前のことをどう120%で返していくかが大事っていうことですか。

「そうですねえ。どんなことでもそうだと思う。結果、その先になにが待ってるのかは、その先に行ってからでいいと思うし。と、俺は思います。もういい大人になってきてるんだけど、今頑張ったらこれから先どんなことが待ってんのかっていうのは楽しみではありますね」

──ところで相葉さんはよく「人が好き」っておっしゃっていますけど、なんでそんなに人が好きでいられるんだろうなって思うんですよね。

「ふふっ。あんまりね、俺、嫌いな人っていないんですよ。なんでだろうね? なんでかって考えたことないからなあ(笑)」

──(笑)本人としてはそうですよね。

「うん。この先、ひとりでいたいなあみたいな時がくるかもしれないし、あんまり人が好きじゃないみたいなことを思う時がくるかもしれないけど(笑)。まあ自然に、流れるままですね。川の流れのように、です」

──はははは。

「あの歌すげえ好きで、俺。なるほどなって思ったんですよ、昔」

──「流れないと」って思うような出来事があったんですか?

「なんかさあ、くだらないプライドは捨てないといけないと思うの、こうやっていろいろやらせてもらう以上。でも自分の中になにかを持ってないといけないし、そのバランスってすごい難しいと思うのね。で、20代前半ぐらいで、裏のことだとかさ、大人の事情とかさ、そういうのが見え隠れしてきて、ほんとに気にしてたら精神的にやられちゃうかも、と思って。くだらないプライドを捨てていかないと、自分が潰れそうな気がしたんだよね。まあ、なんとかなるやって思っちゃう性格なんで(笑)、結果なんとかならなかったとしても、どうにかなるって思えるんだけど」

──そのプライドっていうのは、たとえばどんなことなんですか?

「うーん、なんかいろいろひっくるめて?(笑)。こと細かにはなかなか説明できないんだけど。でも、それこそ今、『マイガール』で村上(信五)くんと一緒でさ。よく話したり、メシ食いに行ったりするの。中学生ぐらいから一緒にずーっとやってきて、『こうやってふたりとも今ここにいて、また一緒に仕事できんのも、たぶん奇跡だよね』っていうかさ。その当時は、(ジュニアが)もっともっといっぱいいたわけだけど、それが今、お互い違うグループで、またひとつの作品を作れてるっていうのを感じるとさあ、呑みながら泣けてきちゃうわけ。ちょっともう涙腺弱くなってるから(笑)。『そうだよね』つって。彼も彼でそんなこと言ってて、『もう、プライドなんて持ってらんないよね』みたいな。『わかるわかる。そうだよね』って」

──それは個人としてのプライドっていうことですよね、きっと。

「うんうん。そうだと思う」

──嵐であることのプライドは持っていませんか?

「持ってますよ。嵐の相葉雅紀でずっといたいんで」

──名前の最後に必ず(嵐)って付くような?

「うん、うん。もう最初でもいいぐらい。"嵐の相葉雅紀"がいいなって思うんですけどね」

──じゃあ最後に。嵐として、相葉雅紀として、どんな未来を見たいですか?

「……今まで通りでいいです。ひとつひとつ一生懸命にやって、楽しいって思えてれば、どんな状況でもいいと思う。欲を言えばこの仕事でね? まあ、おじさんになっていくわけだからわかんないけど(笑)、ずっと嵐の相葉雅紀でいれたらいいよね」 H

nudie 松本潤

年々過ごしやすくなってますよね。家族とか自分の家に近いものだから、なぜ嵐が好きなんですか?と言われても答えられない。

パッと目を惹く華やかなオーラでアイドルらしいルックスを一身に背負いながら、嵐のコンサートの構成は彼を中心にして作られているという裏方の顔も持つ松本潤さん。自分がアイドルであるという自覚を早くから持ち、職人のようなストイックさで仕事に向かうプロ意識は変わらぬままですが、彼が纏う雰囲気は年々穏やかに変化していくような気がします。彼が出演した『花より男子』が一大ムーブメントとなり、嵐の主題歌の爆発的ヒットを牽引してからは、より内側からの目で嵐を見つめ、「嵐であること」を意識した言動が増えたように思いますが、その心中は一体どんなものだったのでしょうか。

──結成記念日の9月15日になった瞬間にみんなで乾杯したとお聞きしたんですけど、どんなことを思いました?

「嬉しいよね、やっぱり。その日はリハーサルだったんだけどさ、日にち変わっちゃうからっつって、無理くりテンポ上げてリハやって(笑)。ぎりぎり23時50分ぐらいに終わらせて、『VS嵐』のスタッフにいただいた99年のシャンパンで、ハッピーバースデーじゃなくて、"A・RA・SHI"歌いながら乾杯したんだけど(笑)」

──(笑)松本さん個人としては、『花より男子』の人気によって嵐を知る層が広がっていったことが、この10年でもすごく大きかったんじゃないかと思うんですが。

「そうですね。その通りだと思います(笑)」

──(笑)以前お話を伺った時に、『花男』の前はコンプレックスがあったとおっしゃってたんですけど、どんなコンプレックスだったんですか?

「いや、それは今でもあるし、今でも渇いてる部分だと思うんだけど。……あのさ、俺やっぱ、見られてなんぼだと思ってるから」

──自分自身が?

「ううん、こういう仕事が。芸術とかでも、映画とかでもそうだと思うんだけどさ。なんか、見られるために作ってんじゃないんだよ、みたいなこと言う人とかいるじゃん。そういうのって違うなって思うの」

──すごくよくわかります。

「自分の自己満足だけでやるんだったら、この世界に立たなくていいと思う。趣味でやればいいし、人に見せるためのものとして発表しなきゃいい、と思うのね。ただ、俺らは発表するわけじゃん。そういう意味で、やっぱ、認めてほしかったんだと思うんだよね。認めてくれてる人たちは、その当時もたくさんいたんだけど、その渇きっていうのがすごくあって。そういう意味で……あれを社会現象って言っていいのかわからないけど、今までより大きな波がそこにあって、その渦中に自分がいれたっていうか。波と渦中じゃちょっとおかしいけど(笑)」

──(笑)目に見える手応えがあったってことですよね。

「うん、そうだねえ。それでこう、物的なものだけじゃなく、メンタル的にも、すごく救われたんだよね」

──それまでの松本さんは、実は自分自身にイライラしてたのかもしれないですよね。

「んー、まあそうでしょうね。今考えるとやっぱり、吹っ切れたりとか、いろんなことが変わってったのっつうのは、そこだったりするかなあっていう気が改めてするからね」

──じゃあ、嵐の周囲の変化はどのように見ていましたか?

「そうだなあ、8年目ぐらいから周りの環境が変わってくっていうか、自分の周りの変化がめまぐるしかったから、敢えて自分たちであんまり動いてない感じっていうのは、自分は実はあって。人から受ける変化がめまぐるしかったから、敢えて自分たちのいるところは変えないようにしてたっていうか。それゆえに、結果論かもしれないけど──パッケージっていうかさ、自分たちがどういうものかっていうのが、周りが認知してくのと同じように、自分たちの中でも固くなったんじゃないかなあ。結束っつうか、チーム感みたいのがより濃くなったところは、ここ何年かはあるのかな、って思う」

──でもデビュー当時は松本さん以外やめようと思ってた人たちもいたわけで。その人たちももちろん不安だったと思うけど、エンターテインメントっていうものをやりたくて、やっとデビューできたのに、一緒にやっていくメンバーがそういう状態だったっていう松本さんの不安もすごかったと思うんですけど。

「うーん……そうだねえ、それは俺だけが言えることじゃなくて、





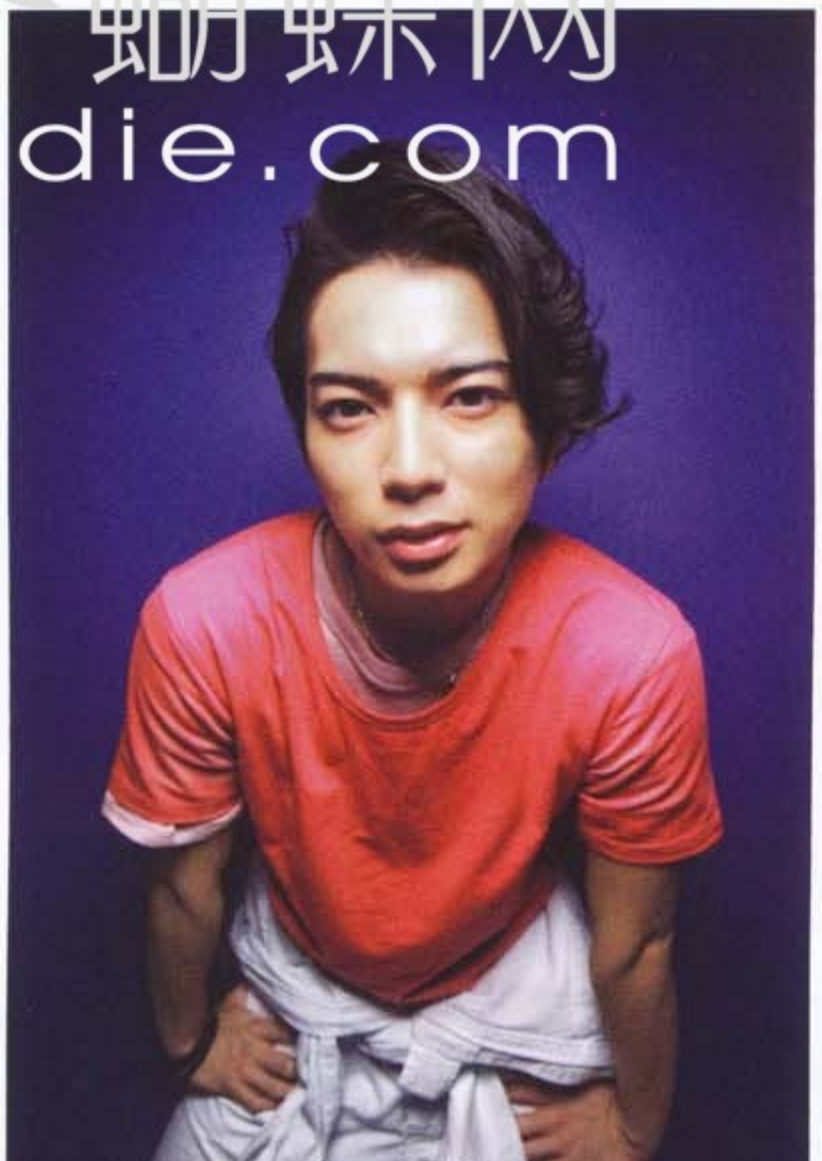


02年12月号(撮影=緒方秀美)

H初登場! 幕張の海で撮影した後、「アイドルとは?」「自分とは?」というテーマで個別インタビュー。メンバー大盛り上がりのじゃんけんでインタヴューの順番が決定しました。

嵐×『H』のコラボレーション・ヒストリー

10年間で嵐が『H』に登場してくれたのは延べ23回。その中から嵐5人の企画をピックアップし、懐かし記事をお蔵出しします!



みんなが恐らくそうだと思うんだけど、やっぱりフィットするのに時間がかかったんだと思うんですよ。自分がその中に入ることも、自分と周りっていうことでも。昔から、できるところはできてたと思うけど、あるようでなくて、ないようである、嵐というグループの形みたいなものに、感覚的にフィットするっつうかさ。それができるようになったのっていうのが、やっぱ後半なんだよね」

——松本さんがそこにフィットしたのって、他のメンバーより遅かったような気がするんですけど。

「うーん、どうだろ。俺個人はわかんないね。だって、他の4人はフィットしてるけど俺だけ浮いてんな、っていう感覚すらもないんだもん(笑)。でも自分が、『あ、ここって、こういうことかな？』って思えるようになって、初めて周りも見えた時に、すごくなんかこう……『意外に居心地いい家だな』みたいな(笑)。ちゃんとそう思えたのは、5年越えて、ちょっとしてからだと思う」

——で、今は嵐のことをすごい大好きですよね、松本さん。

「……うん(笑)。それじゃ今まで好きじゃなかったみたいじゃん(笑)」

——(笑)前から好きだったと思いますけど、明らかに嵐でいる時の顔が違いますよね。

「ですかね？　まあ、そうでしょうね(笑)。なんかこう、年々過ごしやすくなってますよねえ。なんといいますか…………家族とか、自分ちに近いものだと思うから、なぜ好きなんですか？と言われても答えられないんだけど」

——でも、今の松本さんの後ろには「嵐のために」っていう思いがすごく明確に見えますよね。

「うん。だから、ちゃんと家から仕事しに行ってる感じはあるかもね。人んち泊まりに行かないで(笑)。漫画喫茶のナイトパックで泊まり歩いてるわけでもなく、友達んちに居候してるわけでもなく。ちゃんと家から毎日、現場出てる感じかな。うん、反抗期だったんだよ(笑)」

——『いざッ、Now Tour!!』のソロで、「5年後はどうなってる？」って歌っていましたよね。その時5年目だったと思うんですけど。

「うん」

——その時に考えていた10年目と、実際に体験しているこの10年目は、どういうギャップがありますか？

「うーん……まあこれはあくまでも僕の主観であって、あんまり他の人の気持ちとかを気にしないで言うと。悪くないなとは思います」

——(笑)いいとは言わない？

「ベストだとは言わない(笑)。いいとは思うよ、もちろん。やりたいなあと思ってたいろんなことが叶ったし、ほんとにたくさんの人に見てもらえるようになったし。でも、『これもう最高だよ！』って満足するつもりはさらさらないっていうか。正解がないから続けられる仕事だと思うし、あの時こうすればよかったなあとか、これが正解かどうかはわからない道を、常に進み続けるわけじゃん？　だから表現し続けることしかできないし。そういう意味で、悪くないな、とは思います(笑)」

——この10年間を振り返ってみて、こだわってきたことをひとつ挙げるとしたら、なんだと思います？

「……やっぱり、一個一個、ちゃんと向き合うっていうことかなあ。なにに対しても」

——ひとつひとつ覚悟を持ってやってきたっていう誇りもありますか？

「誇りなんてものはないですよ。そんな大それた、仰々しいことは(笑)」

——(笑)じゃあ、「やってきた」っていう事実だけがあるんですか？

「そうだね。それだけありゃ十分じゃない？　でも、なんとなくやってたら、なんとなくにしかならないと思うのね。ちゃんと向き合おうとするから、ちゃんと向き合えるんだと思うんだ。だから、俺はそういうやり方をしてきたのかもしれない」

——今までアイドルという職業にまっすぐに向き合ってこれたのは何故だと思いますか？

「……やっぱりエンターテインメントの可能性を信じてるんだよね、常に。今までエンターテインメントに裏切られなかったからこそそう思ってるし。って、『黄色い涙』みたいになってきたけど(笑)、今まで自分がいろんなエンターテインメントを見て、いろんなことを感じさせてもらってるからさあ。自分もそれと同じようでありたいっていうか。っていうことなんだと思うんだけどね」

——エンターテインメントの可能性は、嵐だからこそ広がったっていうのもありますか？

「もちろんそうでしょうね。今となってはそれ以外に考えられないし。考え方もそうだし、少なくとも今の自分を作った何割かは、やっぱり嵐だと思うから。嵐というグループで10年やってきたことによって、作られたもんだと思うからね」

——じゃあ、今一番大切にしたいことはなんですか？

「今、自分の頭の中にすごくあるものっていうのが、〝伝える〟っていうことと、〝変わることを恐れない〟っていうのと、〝なんでも全力でやる〟っていうことの3つなの。その3つが色濃く自分の生活の中にあるのね」

——〝伝える〟っていうのは、具体的にはどんなことですか？

「やっぱり常になにかを人に伝えたいんですよね。相手がどういうふうに受け取るかとか、全部が全部、計算できるものではまったくないと思うんだけど。その根底に、ちゃんと自分が伝えようという意志を持った状態で、『どうぞ』って人に提示したい。そうすると、その提示の仕方は絶対丁寧になるはずだから。ふんっ、つって渡すことはできないっていうかさ」

——なにがきっかけでそう思うようになったんですか？

「なんかある日、『伝える』っていう言葉が入ってきたんだよね。今これ、すごい大事な言葉だなあと思って。わかりやすい。シンプルだな、って」

——〝変わることを恐れない〟っていうのは、今の嵐のテーマでもありますよね。

「そうだね。変わってくことを恐れないでいたい自分たちと、ちゃんと変わんないで俺らはここにいるよ、変わらないところはちゃんとあるよ、っていう両方の思いがあるんだけど……」

——「変わらない嵐」っていうところで言うと、櫻井さんとか二宮さんは、「ちまちましてる俺らのことが好きなのはわかってる」っていうことを2006年ぐらいから意識的に発言していますけど、そういう見られ方みたいなものも考えてますか？

「…………もちろん考えてる、それは。ただ、それって考えてできることじゃないし。考えてできることぐらいで、それが変わってないんだって思われることっていうのは、俺は違うんじゃないかなと思うんですよ。もっと本質的なというか、根本的に変わんないところっていうのが、一番大事だと思うから。なんかさ、友達に『おまえ、変わんないね』って言われるために、変わんない自分を演じんのやだし。変わることを恐れてたら、先に進めないと思うから。『変わったね』って言われるのって、しょうがないでしょ。それだけの時間過ごしてるわけだからさ」

——なるほどね。それに、これは素晴らしいことなんだけど、嵐って空気読み過ぎるじゃないですか。受け手が欲しいものを敏感に感じ取って、それを見せてくれる人たちだと思うんですよね。

「わかるわかる、言ってることはすごく。みんなそうだもん。優しいんだよ、みんな」

——「変化を恐れない」という意味で、そこを切り崩そうとしているのが松本さんだったりするんですか。

「そうねえ……自分がそういう目線が好きだっていうのが大きいけど。そういう意味では、よくも悪くも山を登ってく時に、一番前を歩くようなタイプだと思うんだよね。で、それが何人もいてもしょうがないだろうし。そういう意味では、みんながそれぞれ自分がやるべきことをやってると思うし」

——うんうん。

「それに、ほんとに根本的なところは変わらないだろうからね。応援してくださってるファンの人たちに対して俺らが思うこともそうだし、ファンの人たちが俺らを見て思うこともそうだけど、『ほんとにこいつら変わんねえんだな』って思える部分ってお互いにあると思うんだよ。だから、作られたものに魅力はないかなと俺は思うんだ」









04年4月号（撮影＝長島有里枝）

「80年代生まれ特集」でそれぞれの生い立ちを語るインタビューを敢行。文化祭真っ最中の某美術大学での撮影は、小道具のカメラで松本さんがメンバーを撮影したり、二宮さんがギターを弾いたり、大野さんが似顔絵を描いたり、相葉さんがオブジェによじ登ったり、サッカーのゴールを決めるたびに櫻井さんのズボンが脱げたり（？）という楽しいものに。

――"なんでも全力でやる"っていうのはいつ頃から考え始めたんですか？

「3日前ぐらい？」

――そんな最近なんですか!?(笑)。

「(笑)なにがきっかけかはわからないんだけどね。でも、それをやるようになってからどっしり構えられるようになったよ。最近は物理的に考える余裕がないから、絞り出すものがなくて、行き詰まってるところがあったから。やっぱりさ、人の話を聞いて、人の言うことを肯定し続けると、自分がやりたいことが見えなくなっちゃうんだよね」

――そのバランスとるのが難しいんですね。

「そう。最近はそっちに偏りがちだったかなあって思ったんだよね。それプラス、なにかを見たり、感じたり、インプットする時間がほんとになかったから。出し続けるとやっぱ人は涸れちゃうからさ。っていうのがたぶん大きいんじゃないかなあと思って。それこそ、結成日でいったらもう11年目は始まってるし、その3つを大事にしながらこれからの嵐を見せていきたいよね」

――では、松本さんにとって嵐とはどんな存在ですか？

「もう、嵐は嵐、としか言いようがないんだよね。自分の中で代わりが利かないから、他に同じジャンルに入るものがなにもないし。だから、他で代用できないもの、かな」

二宮和也

友達がねえ、絶対近くに4人いるでしょ。ずっと一緒にいる人たちが。それはよかったなと思いますね。

感受性の強さと瞬発力を武器にして、メンバーの発言を的確に拾ってつっこみ、誰にパスを出せば一番効果的かを見極めている嵐のバラエティの参謀、二宮和也さん。『硫黄島からの手紙』では俳優として世界的に評価されましたが、「自分はアイドルだから」というスタンスを決して崩さなかった彼。結果、そのポテンシャルの高さと、どフラットな客観性、ユーモアと毒を織り交ぜたシニカルな物言いをする頭のよさが世間に知られ、斜めにアイドルのことを見ていた人たちの先入観を取り払ってしまった部分があると思います。「アイドルの幅を広げたい」という思いを自覚的に発言し、「すべては嵐のため」と常に4人の仲間を意識する二宮さんに嵐の現在地をうかがいます。

――この10年で、個人的に一番大きかった出来事はなんですか？

「デビューしたことじゃない？ 人生変わっちゃったわけだから(笑)」

――舞台の勉強をしたかったのに、いきなり嵐になっちゃったわけですもんね。

「びっくりするよね(笑)。でも、やだやだ言いながら最初からちゃんとやってましたけどね。仕事には真面目な人間だったから」

――じゃあアイドルってどんな仕事をする人だと思います？

「それは教えないよ！ そんなの教えちゃったら、みんなやりたいと思うでしょ？ 知りたいんだったらなってみろって感じ(笑)」

――(笑)そんなに魅力のある職業なんですね、アイドルって。

「人によると思うけど、でも俺、飽き性だからさあ。いろんなことできるから、楽しいなあとは思うよ」

――じゃあアイドルになって、結果よかったなと思います？

「よかったなとも思うし、よくなかったなとも思うよ。それはどっちも思う。それはたぶん、どんな仕事に就いてもそうだけど。でも、よかったなって思う割合のほうが多いから、俺はトータルでよかったなって思えるんだろうね」

――どんな時によかったと思いますか？

「友達がねえ……4人いるでしょ、絶対近くに。ずっと一緒にいる人たちが。それはよかったなと思いますね。特殊な環境だけどさあ、特殊な環境だからこそ、普通の友達より近いところにいられるんだよ」

――じゃあ、嵐の人たちがこういう人たちじゃなかったら、今みたいな気持ちにはなってないかもしれないですね。

「そうだね。でも、嵐がこの人たちじゃなかったらとかっていうのは、考える必要性がないよね」

――二宮さんて、自分も嵐なのに、嵐のことを「嵐の人たち」っていう言い方しますよね。

「だって俺から見えてんの、この人たちだけだもん(笑)。自分が唯一見れないのは、自分じゃない？ それを見ようとするのはナンセンスでしょ。それは変えようがない。特殊なんだよ、真ん中にいる人たちは」

――この10年間で嵐のいろんな足跡がついてきたと思うんですけど、二宮さんから見て、どんな足跡がついたと思いますか？

「考えたことないよ。まさか10年でこんなにたくさん取材してもらえるとも思ってなかったし、国立でライブやらせてもらったり、五大ドームでもやらせてもらったりとか、思ってなかったし。選択肢になかったからねえ。べつに向上心がなかったってわけじゃないんだけど、俺たちは俺たちで楽しくやってたから、あんまり考えてなかったよね」

――でも以前「『硫黄島からの手紙』に出てよかったことは？」って訊いたら、「『硫黄島』を通して嵐というものを知るきっかけになるなら、それはよかったかな」っておっしゃってたから、嵐のよさを知る層を広げていこうっていうのは、目指していたことなのかなあと思うんですが。

「うーん、べつに目指してはなかったかな。単純に、自分がひとりで仕事やらせてもらう意義って、そこにしかないからさ。ただそれだけだよ」

――嵐の皆さんって、みんな自分の評価より嵐のことを最優先で考えますよね。

「なんでだろうね？ いい人たちだからじゃん？(笑)。まあ、自分ひとりがよければいいっていうのも、全然悪いことじゃないと思うんだよ。否定はしない。ただ、俺たちとは仲良くなれないよね(笑)」

――二宮さんはどうしてバックに嵐を必ず背負って仕事してるんですか？

「だって嵐として選ばれたんだもん、この5人組が。『明日から嵐ですよ』って言われたら、『ああ、明日から嵐か』ってなるでしょう。だからだと思うよ。それに……自分ひとりのことを考えられるのは、すごいことだなあと思うよ。グループとしてやりたいことを全部やっちゃった人たちってことでしょう？」

――もしくは、グループに満足してない、とかですよね。

「でもさあ、人間がふたりもいて満足できないことが、ひとりでできるわけがないよね。だって5人でやったほうが速いもん、処理速度が(笑)」

――はははは。

「5倍だもん、だって(笑)。俺たちはまだグループでやんなきゃいけないことがいっぱいあるし。プラスアルファ、やりたいこともいっぱいあるわけだから」

――あと、以前から「アイドルを毛嫌いする人がいるほうが燃える」みたいなことをおっしゃってて、面白いなあと思うんですけど。

「燃えるっていうか、簡単だよね、そっちのほうが。そういう人たちが存在してくれるからこそ、その人たちが嫌がったりとか、煙たがったりすることが、アイドルとして正解な行動なわけじゃない。もう答えが出ちゃってるんだよ」

――でも、『硫黄島』を撮影した2006年ぐらいから、「僕は俳優じゃなくてアイドルですから」って、アイドルの概念を変えようという発言を意図的にしていますよね。

「いや、それはだって周りが『俳優、俳優』言うからだよ。それが嫌だったの。俳優じゃないんだもん。"俳優の仕事してる人"だもん」

――それがエポックメイキングだったんだと思いますよ。ベルリン映画祭の会見でも、海外のマスコミがびっくりして記事にしてたし。

「だから、俳優じゃないんだもん！(笑)。そうやって訊いてくるからさあ」

――でも、二宮さんの発言を振り返ると、「アイドルはすごくプロフェッショナルなエンターテイナーなんだぞ」ということを世に知らしめたいというか、アイドルへの偏見を自覚的に変えようとしてるんじゃないかなって気がするんですけど。

「そうねえ、まあ……アイドルを変えるっていうわけじゃなくて、『アイドルがこういうこともできる』ってことなんだよね、きっと。『こういうことをアイドルがやっちゃうのも面白い』とか、そういうことなんじゃないのかなあ、言いたかったのは。アイドル自体を変えちゃったら、もうなんでもよくなっちゃうじゃない。アイドルの枠組みを全部取っ払っちゃって、自分が新しい枠組みを作るなんて、それは既にアイドルじゃないんだよ。アイドルの枠組みの中で新しいことをやってくのがすごいことなわけであって。だから、こういうこともするんだとか、ああいうこともするんだっていう……ある種のグレーゾーンをずっと叩いていくっていうことをしたいんだよね、俺たちは。まあ、誰もやろうと思わなかったことだったりもするん









05年10月号（撮影＝若木信吾）

「嵐の夏休み」をテーマに、田舎のおばあちゃん家をほうふつとさせる日本家屋で撮影。すいか割り、花火、風船爆弾、シャボン玉……と、本気で遊んでくれた嵐でした。
5人の座談会では「嵐の長所＝優しい。短所＝優しすぎる」と大野さんが発言。

だけどね（笑）」

――二宮さんをアイドルという仕事に向かわせる原動力も、そういうところにあるんですか？

「それは、目の前に仕事があるからじゃない？　仕事があるってことがどれだけすごいことかっていうのをわかってるからだよ。仕事がない時代を経験してるからね。コンサートできない時もあるし、歌を出さない時もあるし、それを知ってるからじゃないかなあ。あとは、応援してくれる人たちがいるからだよね。その人たちがいるから、俺たちが存在するわけでさ。地位とか名声とか要らないから、見てる人がよかったって言ってくれるだけでいいんだよ」

――じゃあこの10年間で得た、一番大きなものってなんだと思います？

「それは、やってこれたことじゃない？　ずっと続けられたこと。なにかを始めたりとか、なにかをやめたりするのは簡単なことだけどさ。続けるって大変だもん。すごく地味なことでしょ。俺たちは会社員とかじゃないから、昇進とかはないわけよ。ADからディレクターになって、ディレクターからプロデューサーになって、とか。係長から課長になって、部長になって、専務になって、とか。そういうモチベーションがまったくないわけなの。肩書きっていうのは成長過程のひとつの見分け方でもあるから、みんな頑張ってるな、とか思うんだけど。俺たちはそういうのがないから、すごい地味なんだけど……ある意味いろんなことやらせてもらえるからさあ。俺はそっちのほうが合ってたのかなあと思う」

――飽き性だっていう面も含めて？

「うん。どんどん昇り詰めることはいいことだけど、俺は昇り詰められないからさあ。社長になりてえって会社に入って、社長になっちゃったら、どうすんだろうなとも思うし。たとえば俺のモチベーションが、アイドルで1番になりたい！だったとしても、毎年のようにアイドルが生まれてくるわけで、鬼のように先輩がいて。1番なんて明確につけられないじゃん？」

――そうですよね。

「やってるとわかるけど、そんなの、つけててもしょうがねえなとか思っちゃうし。で、上がないのよ。もっと怖いこと言うと下もないんだけど。そこで現状維持できてる嵐はすごいなと思うけどね」

――確かに。

「上に上に行こうとせずに、毎年、新しいことをやらせてもらえてるっていうのは……やっぱり現状維持できてるからかなあと思うからね」

――それはやっぱり頭のいい人たちが集まってるからなんですかね。

「うん。あとはもう何回も言ってるけど、真面目にやってんだろうね。やっぱり、家建てるのとかでも、旅行ひとつ手配するのにも、真摯にやってくれるほうを選ぶじゃん。そういうことだと思うよ」

――周りがどんどん変わっても、嵐自体の魅力はほんとに変わらないなあと思うんですけど、二宮さんが国立でおっしゃっていた「変わらない進化を楽しみたい」というのはどんなことを指しているんですか？

「嵐は変わらないだろうけど、個人では変わっていくじゃない？　ニュースキャスターやったりとか、それまでやってなかったし。でも、その人たちが嵐になると同じ立ち位置でやってくれるっていうのが、すごいわけじゃん。リーダーなんて個展とかやってんのにさあ、嵐に帰ってくるとボロクソ言われてさ（笑）」

――はははは。

「翔ちゃんだってニュースですごいしっかりやってるのに、嵐に来たらボケたりとかさ。その立ち位置は変わらないわけじゃない。それは潤くんだってそうだし、相葉ちゃんだってそうだけど、そういうことですよね。歳も取るし、結婚して子供ができて、とかっていうのも起きるわけじゃない。それでもやっぱり変わらないものが嵐にある、っていうのがすごいんじゃない？」

――なんで嵐だとそれが可能なんだと思いますか？

「普通の人だからじゃない？　昨日ご飯食べてたら、そこの店員さんに、『こないだ、松本潤くんに会ったんですよ』って言われたの。誰かの誕生日会に行ったら、潤くんと錦戸（亮）もいて、わいわい楽しくやってたんだって。そしたら、『ぐるぐる回って、至るところで〝錦戸のことお願いします〟ってずっと松本さんが言ってた』っていうんだよ（笑）」

――はははは！

「それ聞いて大爆笑しちゃったよ、俺。もうなんか、部長みたいじゃん（笑）。『僕、松本さんてそんなイメージまったくなかったから、びっくりしちゃいましたよ』って言ってて。ほんと普通の人間だなと思いながら聞いてたんだけど」

――二宮さんはよく「普通の人たちが、ある場所にいくとこんなにすごいんだっていうことを嵐で確立したい」と発言していましたけど、実際に今、それが広がっていますよね。この状況は望んでいた状況だと思いますか。

「うーん……いいと思いますよ。騒がれないより騒がれたほうがいいでしょう。だってアイドルなんだもん。騒がれないアイドルってシュールでしょ（笑）。どんどん面白くなってると思う。でも、今がベストだと思ってるからね、いっつも」

――では、二宮和也として、嵐として、どんな未来を見たいですか？

「その先にあるものじゃない？」

――こんなふうになったらいいなあ、っていうのはありますか？

「ないよ。そんなの目指して進んでたって面白くないじゃん。だって、100メートル先に分かれ道があって、右側に100円があって左側に1万円があるっつったら、みんな1万円のとこ行くでしょ？（笑）。でも、なんにも知らないで100円取ったって嬉しいわけ。それでいいんだって。それに、先見据えて仕事なんかしないんじゃないかなあ、特に男って。今あるものをちゃんと、一個ずつやっていくことしかできないよね」

――じゃあ、二宮さんにとって嵐とはなんですか？

「それはこの4人だよ。さっきも言った通り、俺から見てる嵐って4人だから。どこでも。いつでも」

――その4人はどんな存在ですか？

「面白いよ。なんでもやってくれるし。楽しいし。頭の回転も速いしね。気が利くし。ほんと結婚するならこういう人見つけたほうがいいよね（笑）。真面目に働いてくれるしさ」

――（笑）嵐でよかったなあって、改めて思ったりしますか？

「思うよ。改めてじゃなくて、常に思うよ。この取材だって嵐じゃなかったら取材してもらえないわけだし。よかったなあって思うよ。ほんと、なにしてたかわかんないもん（笑）、嵐じゃなかったら」 H



大野智

嵐とは、なんか一個あり得ない空間ができちゃった感じ。こんな空間いいの？みたいな（笑）。

伸びやかな歌声、重力が感じられないキレのいい踊り、豊かな感情表現と飛び抜けた身体能力が噴き出る芝居。一瞬で人を惹くその才能は長らく嵐をよく知る人にしか知られていませんでしたが、表参道ヒルズの個展『FREESTYLE』や連続ドラマ主演によってお茶の間レベルでそのすごさが知られることになった大野智さん。『H』でも「大野智のすごさを知っていますか？」という特集を組みましたが、彼の本当のすごさは、既成概念に囚われないフラットさと、他者をありのまま受け入れる底知れぬ器のでっかさなのかもしれません。達観した考え方とオリジナルな人間性で嵐を支える「先頭に立たないリーダー」大野さんが考える嵐、そしてアイドルという生き方とは？

――この間櫻井さんにインタビューした時、大野さんの芸能生活が次の誕生日で人生の半分になるっておっしゃっていて。



06年11月号（撮影＝藤原[illegible]）

短期集中連載「嵐のセルフ・ポートレート」スタート。第1回目は「アイドルの幅を広げたい」と語る二宮和也さん。





06年9月号（撮影＝鳥巣佑有子）

『黄色い涙』の撮影現場に潜入。いつ現場に行っても飽きずに「チッチ」をやっている嵐、本番の5秒前まで楽しそうにキャッキャする嵐、でも本番になった瞬間役に切り替わる嵐の姿に「ブレないな〜」と改めて驚愕。この『H』の写真が『黄色い涙』のポスターになりました！



「はははっ。それ、翔くんが気づいたんだよ。もうすぐ15周年になるねって。あんま実感ないけどね」
――この間の国立競技場のライブでは、最後の挨拶でグッときてらっしゃいましたけど。
「あれもなんで泣いたかは自分でもわからない(笑)」
――去年の国立とは気持ちが違ったんですか？
「同じ気持ちでやってたつもりなんだけど、去年は忙し過ぎてあまり覚えてないの(笑)。だからねえ、今年は絶対頭にインプットしよ！と思ってやってたんだよね。覚えてないのはもったいな過ぎると思って(笑)」
――今年の国立はちゃんと目に焼きつけられました？
「焼きつけられた、うん。夢のようだった。[illegible]見てる感じ。実感がはっきりなかったな」
――今年は10周年ということで「おめでとう」って言われる機会が多いと思うんですけど、「嵐大好き」「嵐最高」って、最近はメンバーの人たちのほうがいっぱい言ってるんじゃないかってイメージがあって(笑)。
「あははっ。そのままだからじゃない？　ほんとに好きだから自然に言っちゃうんじゃないの？(笑)」
――その好きっていう思いはずっと変わらないですか。
「基本は変わんないよねえ。でも、どんどん面白くなっていってるんじゃないのかな。松潤が、『年を重ねるごとになんか嵐でいることが楽しくなってる』って言ってて、よく考えたら確かになあとか思う」
――ほんとにどんどん関係性がよくなるグループですよね。
「そうだねえ。まあ、それぞれがそれぞれにいろんな経験して、で、5人になったときにまた面白い一面があったりだのするから、じゃないのかなあ。だから、関係性もどんどんよくなってんじゃない？」
――では、嵐フィーバーのこの状況はどのように受け止めていますか。
「わかんない。実感がないからな、嵐が売れてるとか売れてないとか……嵐はなんか嵐のことを他人事のように見てる感じするけどね」
――「なんかすごいことになってるなあ」みたいな感じで？
「そうそう、『俺らすげえなあ』とかじゃなくて、『なんかよくわかんないよね？』みたいな(笑)。国立とか行っても『えー、ここ埋まるんだあ？』とかなんかね(笑)、本人たちのことなんだけど、それを実感してない嵐っていう感じ。だから、みんな普通なんじゃないの？」
――でも周りも持ち上げるようになるだろうし、その中で普通の感覚を保つのって難しくないですか。
「うーん、でもずうっとこんな感じできたからねえ。自分は変わんないとは思ってたけど、変なふうに変わらなかったね、メンバー誰も。このままだったからよかったよね。まあ、変わり方もわかんないしね(笑)」
――じゃあ、客観的に今の嵐を見て、なにか思うことはありますか？
「なーんて言えばいいんだろうねえ、嵐ってねえ、すごいとは思わないけど。特別なことは何もしてないし。ただ……何だろう、やっぱ〝5人の空気感〟と、〝5人でやるっていう意識〟が嵐なんじゃないのかな。俺だけが目立とうとかさ、そういう人がいないんだよね。でも、もともと前へ前へと出る人はいなかったけど、最近は出ざるを得ない状況にどんどんなってきた(笑)」
――(笑)それは居心地悪かったりするんですか？
「今では逆に楽しんでやってたりするけど、申し訳ないと思っちゃうんだよなあ。俺らのことそんな考えなくていいよとかさ(笑)、そこまでしてくれなくていいよぉとか。嬉しいけどね……うん、もう十分恵まれてるから、これ以上しなくていいよとか思っちゃうんだよね(笑)」
――嵐って、見てるこちら側が思う「嵐らしい部分」を、みなさんすごく理解されてると思うんですけど、大野さんが思う嵐らしさって、どういうことだと思います？
「……最近、スーパーアイドルとか言われてるけど(笑)、っぽくないっていうか。スーパーアイドルって、なんかすごい高級な家の、大理石か何かでできてる家に住んでそうじゃない？　だけど、俺ら四畳半の畳とか(笑)、そんな感じじゃん？　〝普通〟なんだよ」
――『H』の「FREESTYLE」特集でおっしゃってた「カッコつけるっていうのはカッコ悪いことだと思う」「バカなことしてる俺らがカッコいい」っていうのも嵐ならではですよね。
「やっぱり、カッコつけるのってカッコ悪いと思っちゃうんだよな、単純に(笑)。だったら、恥も考えられないぐらい無我夢中に(物事に)向かってる人のほうが断然カッコいいわけであって。松潤とかカッコいい系じゃん。でもストッキング被るじゃん(笑)。だからいいじゃん、みたいな。何でもやっちゃうところがいいし、それを5人も楽しんじゃってるところがなんかいいよね」
――大野さん個人でいうと、ほんとにライバルが自分自身だなって思うんです。「他人と比べない」とか「他者をありのまま受け入れる」ところがすごいなあと思うんですけど。何でそんなに仏みたいになれるんですか？
「はははっ。仏？(笑)」
――普通は他の人の目を気にしたり、比べたりしちゃうと思うんですよね。なんでそんなにブレずにいられるのかを教えてほしいんですけど。
「そんなの気にする必要がもうないよね」
――昔は気にしてたりしたこともあったんですか。
「あったよ。デビュー当時とかもそうだし、こうしなきゃいけない、ああしなきゃいけないとか言われて。テレビ出たら笑ってなきゃいけない、とかさ(笑)。でも無理矢理笑ったって顔が気持ち悪いし、だったら、面白くなかったら笑わなくてもいいやと思って。全部が全部笑ってたら気持ち悪いじゃん？とか、なんか変な考え方になっちゃった(笑)」
――じゃあ、テレビや雑誌で見てる大野さんは、ありのままの大野さんなんですか。
「そうだねえ、基本は」
――でもカッコつけたり笑ったりすることで身を守ることもできるじゃないですか。ありのままでアイドルをやるっていうのは、怖いことでもあると思うんですけど。
「でも、そっちのほうがいいじゃんと思っちゃうけどね。その人のことをよりわかるし。究極言ったら、テレビでも雑誌とかでも、常に笑っているより、『今日はしんどい』とか言ってるほうが人間臭くて好きだけどね(笑)」
――他の人と比べない、っていうのはどうしてできるんですか？
「自分は自分だからね。人がああだから俺もああしなきゃ、なんて、それやったって疲れるだけだし」
――もともと評価されたいとかっていう欲がない方なんですね。
「ないから。捉え方は人それぞれだから、何がいいか悪いかっていうのはあんまりこだわりもないし」
――それはやっぱり自分の中に何か自信や芯となる部分があるからできることなんですかね。
「うん。この10年でいろいろな仕事とか経験して、自分にとっての自信になることとかもいっぱい経験した中で、どんどん自分はこんな感じでいいや、って徐々になっていったけどね。まあ、最近はあんまり自分のことを考えなくなってきたけど」
――じゃあどんなことを考えるようになったんですか。
「……人のことかな。〝人のために、今生きている〟になっちゃった」
――人のための「人」っていうのを具体的に言うと、誰のことですか。
「いや、誰でもいいんだよ。ファンの子ももちろんそうだし、おいらがいることで誰かが喜べば、もうそれでいいやと思う」
――何でそういうふうに思えるようになったんだと思います？
「……まあ、満足しちゃったからじゃないの？(笑)」
――何にですか。
「えっ？　自分に。この恵まれた10年で自分のことは満足しちゃったの。それだけこの10年が、すごい守られた10年だったってのを最近感じたから。……人のためにとはずっと思ってたけどね。でもその思いが違くなってきたかな。もうちょっと前は、自分の中でもちょっと欲があったとは思うんだけどね」
――なにがきっかけだったんですか。



07年3月号(撮影＝SUGI)

「嵐のセルフ・ポートレート」松本潤の巻。『花男2』撮影中のホテルで、自宅でくつろいでるイメージの撮影を。



07年2月号(撮影＝中野敬久)

「嵐のセルフ・ポートレート」大野智の巻。身体能力の高さを写真に映すため、ジャンプとダンスをリクエスト。



07年1月号(撮影＝澁谷征司)

「嵐のセルフ・ポートレート」櫻井翔の巻。「等身大でプライベートな表情を！」とホテルの一室で撮影。



06年12月号(撮影＝ヤン・ブース)

「嵐のセルフ・ポートレート」相葉雅紀の巻。抜群のスタイルのよさと無自覚な色気を切り取ろうとクールに撮影。

「まあ、『FREESTYLE』もやっぱ大きかった。自分でやりたいっていって、どデカいものになって。やっぱりファンの子に見てほしいからやりたいって思ったし、結果、いっぱいの人が見にきてくれたから。自分から行動して、人のために何かできたっていうのは、個人的にはすごいよかったなあと思う」

——自分に満足したことによって、嵐として生きていく覚悟ができたっていうことなんですか。

「覚悟とかはないけど、『まあ、それでいいやあ』になったんです(笑)」

——ははははは。なんでそんなにフラットでいられるんですか。

「わかんない(笑)。でも今はそういう気持ちかな。またどう変わるかわかんないけど。この5人でよかったなあとか、単純に思うしね。……すべてがよかったです(笑)」

——嵐5人じゃなきゃできなかったことっていうのは何だと思います?

「全部じゃない? ほんとにこの10年の仕事全部だと思うけどね。この5人でなかったら、この10年は多分あり得ないし、また違う方向に行ってると思う。それはどの方向かはわかんないけど。でもおいらはこの5人の方向で、今満足してる」

——改めて、アイドルってどんな職業だと思います?

「(笑)わっかんないよなあ。ファンの子がなんでこんなにいてくれてるのかも不思議だし……でも、その人たちのためにやるんじゃないのかな。なんていえばいいのかな、俺らがここにいて、ファンの子たちがいっぱいいるわけだけど、たまたまテレビとか雑誌に出てるから、ひとりの人生のことがわかるわけじゃん。だから、俺らは代表して表に立ってる人たちって感じなんだよねえ。特に嵐はすごい普通だし、人間臭いし……一緒に人生歩んでる感じというか。なんかもう遠い存在でもなく、身近にいる感覚ではいるけどねえ」

——じゃあ、普通に生活してる人たちの人生を代表して、自分の人生をテレビとかいろんなところで見せてるっていうことですか、感覚的には。

「うん、感覚はそうだけどね。代表というか、『おまえ行ってこいよ』ぐらいのノリだけど(笑)。『ええ～? 俺?』みたいな。その5人が集まっちゃったみたいな感じ」

——でも、人生全部見られるのって窮屈ですよね。それを別にいいやって思えるのはどうしてなんですか。

「何でだろうね? 見たけりゃ見てくださいっていう感じ(笑)。基本、見られるの嫌いだけど、でもそれが自分の、今の使命なんじゃないのかな。そこに特別なプレッシャーはないし、焦りも不安もないんだよ。なんか、もう決められてる感じがするんだよね」

——履歴書出したのは自分じゃないかもしれないけど、自分の意志でここまでやってきたわけで。それが動かされてるような気がするのは何故なんでしょうか。

「過去とかいろんなことを振り返ると、意味があったり、全部つながってたりするから。あっ、ああいうことが起こったのは、ここにつながってたんだとか、それをすごく感じるからかな。だから、やらなきゃいけないんだよねえ。でもやるからには、楽しくやろっかなって感じ(笑)」

——(笑)じゃあアイドルとして生かされてるっていう感覚なんですか。

「そうだね。上のほうで誰かがやれっつってんじゃないの?(笑)」

——(笑)それは事務所の偉い人とかじゃなくて、もっと上にあるデッカい存在のことですよね。

「そう、もっと上のもの。宇宙なのかな?(笑)」

——それに気づいたときはラクになりました?

「ラクっていうか、ああ、すべてに意味があるんだなあとは思った。こうなったことは絶対この先でつながってる、というふうに思えるからね」

——では、自分にとって嵐はどんな存在ですか。

「……不思議な存在(笑)。なっかなか味わえない空間だよね。家族でもない、友達でもない、今で言ったら仕事仲間でもない感じかな。もう一個上にいる感じ。最初の頃は仕事仲間って思ってたけど、今はもう、なんか別の空間にいる感じ」

——別のカテゴリーに入るもの?

「うん。いいの?って感じ(笑)。こんな空間いいの?みたいな(笑)。だってなかなかないじゃん」

——ないですよ。嵐に入りたいっていう人、いっぱいいますよ。

「んふふふ。なんか一個、あり得ない空間を作っちゃった感じ。できちゃった感じ、かな。何でできたんだろうねえ? わかんねえなあ(笑)。不思議な空間だよ、ほんとに。5人も不思議だと思ってるよ」

——じゃあ、嵐に対して何か一言言うとしたらなんて言いますか?

「『ありがとう』。ほっんと、これに尽きる。……幸せです(笑)」

櫻井翔

この10年は遠回りじゃなくて、俺らの時間のかけ方はこういう時間のかけ方でした、ってことだと思うんだよね。

『NEWS ZERO』のキャスター業や北京オリンピック等での取材を誠実にこなし、アイドル界に知性を持ち込んだ第一人者である櫻井翔さん。彼が作詞を担当するラップ詞では、時にリリカルに、時にアグレッシブにリリックを紡ぎ、アイドルにしか歌えないラップも確立しました。嵐が新たなアイドルのパイオニアであろうとしていることを意識的に発信したり、嵐の思想をわかりやすく名言化するなど、「嵐」という概念をズレなく浸透させた彼の役割は大きいと思います。5人でいる時はまとめ役になりつつ、ここ数年は突っ込まれキャラという一面も確立した、愛嬌たっぷりの聡明な彼が思う、嵐の現在過去未来とは。

——今かなり忙しいですよね?

「忙しい、ね(笑)。忙しいけど……幸せだなって思いますよ。こんなにたくさんの人に『おめでとう』って言ってもらえる10周年になってよかったなってほんと思う。おめでとうとありがとうは、どんなにあってもお腹いっぱいになることないからさ(笑)。すごい嬉しいよね」

——この10年間で、個人的に自分の中で何かが大きく動いた出来事ってなんだと思います?

「いっぱいあり過ぎてわかんないけど……でもまあ、大学卒業と、『ZERO』との出会いかなあ」

——そのふたつは櫻井さんにとってどういう意味を持ちますか?

「やっぱ、学校ってのは俺にとってすごい大切な場所だったから、そこがなくなることの怖さは相当あったんだよね。補助輪外されちゃう感じとか、仕事一本になる漠然とした不安とか、いろんな感情があったんだと思うけど、当然のようにあったものがなくなっちゃう怖さっていうか。アイデンティティのひとつをもぎ取られるような感じはあったよね。まあ一番でかかったのは、友達が就職して、それぞれの肩書きがつくことで関係性が変わっていっちゃうんじゃないかっていう怖さだったんだろうなあとは思う。結果としては全然そんなことなかったんだけど。……でもやっぱ改めて思うけどさあ、どんな時もこの4人は、変わらずいてくれたからね。俺、たぶん帰属意識っていうのが強いタイプだと思うんだよね。だから、自分が属する嵐っていう場所と、そこにいる他の4人が……変わらず、ずっといてくれて。で、いてくれた人たちがああいう人たちでよかったなあって思うけど」

——『ZERO』に関しては?

「やっぱ、夢ってのは形になり得るんだなあ、っていうことを実感できたっていうのがひとつと。あとはまあ……昔から、いろんな方向で試してみてたけど、アイドルの可能性を広げてみたいっていう思いが、こういう方向で広げることができるとは思ってなかったから。それこそデビュー前から、ヘソにピアスあけてみたりとか、(ジュニアに)短髪の奴がいなかったから、えっらい髪短くしてみたりとか、そういうジャニーズっぽくないことっていうのに――若さもあると思うけど、ずっと固執してたのね。でも、その真逆の方向で可能性を広げることができるんだ、って思えたことが大きかったかもしれないね」

——『ZERO』と出会ってから、嵐での突っ込まれキャラっていうのも確立しましたよね。

「まあねえ。でもそれも、『ZERO』ができるようになったから変えてみようとか、そういう感じでもなかったんだけどね。具体的なタイミングで言えば、『山田太郎ものがたり』の現場での俺とニノの関係が、グループにまで引っ張っていかれたんだと思うんだけど。でもそれも、5人でこういうキャラの棲み分けしようねって言ってできたもんじゃないからさあ。自然な流れなんだよね」

——最近オチ担当になってますが。

「結構、高いハードルを課せられるんだよなあ(笑)」

——だけど、ハズさないですよね。

「いや、違うよ。ハズしても乗り切る精神力があるだけ(笑)。だから今の形も、今だけの形かもしれないし。やっぱ10年見返すと、回り続けてるろくろじゃないけど、徐々に徐々に形変えながら、でも窯に入れて形固











07年4月号(撮影＝鳥巣佑有子)

「嵐の卒業旅行」と題して、キャンピングカーで旅館に行き、鍋をつついてパジャマでうだうだ……という撮影を敢行。5人の座談会では初アジアツアーで第2章が始まった怒涛の2006年度を振り返り、ソロインタビューでは『黄色い涙』への思いを語ってもらいました。いや～、畳が似合うアイドルって、ほんっとに素晴らしいですね。

めず、ずっと回り続けていつでも形変えられるみたいな状態かなあと思う。5年後はまた全然違う立ち位置になってるかもしれないし、その時その時の形なんだろうなあって」
―あと、『H』の伊勢谷友介さんとの対談(06年7月号)で、「いろんな仕事の中で一番興味あるのは？」って訊かれて、「ぶっちゃけ音楽なんです」っておっしゃっていて。報道という武器を身に着けた今、音楽に対する思いは変わりましたか？
「やっぱり、嵐がCDでデビューした以上、原点がそこである以上、すごい大切だし。いろんな人にメッセージを届けたり、人の背中を後押しできるのは、俺らにとってやっぱり音楽だと思ってるのね。乳首あきTシャツ着たって、顔に金粉塗ったって、誰も元気にはなんないから(笑)」
―はははは。
「笑えるとは思うけど、気持ちを揺さぶられるってことは恐らくないわけで(笑)。それもすごい大切だと思ってんだけどね。ただやっぱ、自分で音楽作ったり、プライベートでリリック書いたりするのは、めっきり減っちゃったね。今も相変わらず音楽たくさん聴いてるし、大切であるものには間違いないんだけど、音楽って言ったその時の大切さと、今はだいぶ変わってると思う」
―じゃあラップは？ 嵐の楽曲を嵐らしくするための要素として、櫻井さんのラップは重要だと思うんですけど、そこは意識されていますか。
「そこは難しいんだよなあ。やっぱここまで積み上げてきたし、創り上げてきたから、嵐のラップっていうのはずっとやり続けたいと思ってるの。嵐＝ラップの方程式って、そこまで浸透してないと思うから、僕らにはラップっていう武器もあるんですよってことを示すためにもね。ただ、今の嵐の音楽をラップで聴きたい人が果たしてどれぐらいいるかっていうのは、ちょっと俺は個人的に懐疑的だから。そういう尖った部分を時には見せたいと思ってるけど、そこが邪魔になるんだったら、そんなに前面にいたくはないなっていうのは、最近の思いかなあ」
―尖った部分という意味では、"Anti"で「アイドルがどれほどか見せてやるよ」って言ってた時期もあるわけで。自分の中で余裕ができたのは何故だと思います？
「元々マイノリティ意識が高かったんだと思うの。だけどまあ、自分でマジョリティとは言えないけど、マイノリティではない、っていうところまで持ってけたから。だと思う」
―それはなにを以て持っていけたんだと思います？
「その頃からちょっとずつ、可能性を感じる瞬間がたくさんあったからじゃない？ 個人的なことより、メンバーみんなの仕事にっていうかさ。ニノがハリウッド行きました。松潤が『花男』ですごいことになりました。大野が個展やりました。相葉、虎に飛びかかられてます、みたいなさ(笑)。あとは、CMの撮影現場でディレクターの机の前にメンバーの顔写真と名前の紙が置いてないとかさ(笑)。タクシー乗っておじちゃんに『宿題くん』観てるよって言われるとか、そういうちっちゃいことの積み重ねかもしれないけどね」
―じゃあ、"Attack it!"の「外野」は何を指してるんですか？
「あれはさあ、意味合いとしては、我が道を行くっていうか。よそがどうこうじゃなくて、『俺らは5人で自分たちの世界を確立していきます』っていうことの表現としての『外野の言葉はシカトする』だから。あそこの外野は存在しないんだよね。仮想敵みたいなのは、あれに関しては存在しないの」
―今も、アイドルがどれほどか見せてやるよ精神は変わらずですか？
「基本的には『ZERO』の場所でもそうだし、ライヴ・パフォーマンスでもそうだし、それはずっと変わってない。嵐としてはなくしていいところかもしれないけど、個人的にはそこなくなっちゃうと、だいぶ丸くなったなあって感じになっちゃうから。残しておきたいと思ってる」
―背負うものがどんどん大きくなってるっていう感覚もありますか？
「それはあるよ。でも、背負うものに押し潰されそうな瞬間ってのはないけどね。他のメンバーも言ってるかもしれないけど、今の状況はまやかしっていうか、バブルだと思ってるから。11年目のど素面になったタイミングからまた、最初の一歩を踏み出す気持ちで行かなきゃな、とは思ってるけどね」
―そこはみんな地に足着いていますよね。
「うん。単純にすごい嬉しいし、すごい幸せだなって思うけど……こんな時間、そう長く続くはずはないってみんな思ってんじゃん？(笑)」
―はははは。
「やっぱ時間がそうさせてくれたんだと思うよ。7年目だか8年目だかで初めてドームやれるようになったり、アジア行けるようになったりしてさ。それくらい時間がかかったっていう、時間が俺らにそうさせてくれたと思う。俺もつい、遠回りしてよかったみたいなことを言っちゃいがちなんだけど、この10年は遠回りじゃなくて、俺らの時間のかけ方は、こういう時間のかけ方でしたっていうことなんだと思うんだよね」
―じゃあ、この仕事に向かえる原動力はなんだと思います？
「前も言ったかもしれないけど、もともとそんなにこの仕事が向いてるとは思わないところから始まってるから、いつか『ああ、この仕事選んでよかった』って思いたいっていうのが個人的な原動力のひとつ。あとはやっぱり、こんな多くの人に夢を与えられる仕事って他にないから。子供たちに夢を感じてもらえるような存在になれたらいいなあって思うしさ。そのやり甲斐かなあ」
―だけど嵐の思想をわかりやすく言語化して周りに伝えるとか、櫻井さんじゃなきゃできないやり方でアイドルをやっていますよね。
「でもそれも5人だから成り立ってると思うんだよ。たぶん俺、ひとりでこの世界でやるって言ってもできないと思うんだよな。嵐にいるからなんとかなってるっていうか」
―嵐5人とも、個人的な評価より嵐というものを最優先に考えてる気がしますよね。
「それぞれの可能性を信じてるんじゃない？『ちょっと見てくださいよ。うちの誰々、こんなすごいんですよ』っていうのを知ってもらいたいっていう。あとは、最初のハワイの会見の時はただの寄せ集めだったからさ。そこからがむしゃらに嵐をって、知ってもらいたくて知ってもらいたくて……っていうところから始まってるからかもね。『嵐ってなんだ？』って自分たちがずっと思ってきたからじゃないかなあ」
―では、櫻井さんが思う嵐らしさって、どんなところだと思います？
「まあ、あったかさなのかなあ。体温があるっていうか、人間っぽさっていうか。俺の中では、ずっこけ感ってのもあるんだけど(笑)」
―それは嵐のマストですよね(笑)。
「(笑)キメる時に、ついずっこけてしまう感じというか。でも、それが成り立つのはなんでかっつったら、やっぱ温度があるからなのかなあって思う。いつもカッコつけてる人がずっこけちゃったら寒くてしょうがないけど、俺らなら、ずっこけたって、あるよねそういうこと、って思ってもらえそうっていうか」
―でも、櫻井さん個人としては、「そういうずっこけも面白いよね」っていうのが出てきたのって最近のような気がするんですけど。
「最近だと思うよ。やっぱ若い時はカッコつけてたいもん(笑)」
―(笑)実際昔はカッコつけてたじゃないですか。
「つけてたつけてた。その意識は思いっきりあるよ(笑)。でも、グループの立ち位置の変化なのか、年齢的なものなのかわかんないけど、カッコつけることに重きを置かなくなっちゃったんだよな」
―でもみんな言わずともその価値観を共有してる感じがしますよね。
「俺らが特異なのは、上の大野くんから下の松潤までこれだけ年齢が近い5人が、11歳、12歳、13歳の頃にもう出会ってたっていうことだと思うんだよ。そこから同じ時間を過ごしてきた5人が、こうして今、一緒にいることの奇跡っていうか。その、物心を共有してる感じっていうか、時代を共に生きてる感じって、大きいと思うのね。だから同じ思いを共有しやすいっていうのが、俺らの根っこにあるのかもしれない」
―では、櫻井さんにとって嵐とはどんな存在ですか？
「……やっぱ、夢だよなあ。こうなったらいいな、ああなったらいいなっていうのが詰まってるし」
―嵐じゃなかったらどうなってたか、考えたりしますか？
「考えなくなっちゃったなあ。ライヴで"Oh Yeah!"歌ってる時にいっつも思うんだよね。"もう一度あの日に戻るとしても同じ道選ぶだろう"って歌ってるその先に、すごい楽しんでくれてるファンの人たちの笑顔が見えてさ。あの日ってのはたぶん……99年の6月ぐらいに、うちの近くの踏切で、学校帰りに社長から電話をもらった瞬間だと思うんだけど。たぶん同じ道選ぶだろうなって最近すごい思う」
―そう思えなかった時もあるんですか？
「思えなかった時はないけど、どうなっちゃうんだろうっていう漠然とした不安から始まってるからさ。巻き込まれた感じから始まってるから、強くそう思えるようになったのはおっきいことだよね。巻き込みありがとうって感じ、ほんとに(笑)」
―では最後に、櫻井さんといえば天の頂をいただこうとしていることで有名ですが。
「(笑)そうなの？」
―(笑)いや、"HipPopBoogie"で言ってるから。その先にどんな景色を見ようとしているんですか。
「まあ、天の頂目指す、頂上目指すっていうマインドは、ずっと変わらずあるけど。現実的な意味のトップってことじゃなくて、誰かの心に未来永劫残る存在でありたいなって思う。たとえば俺、"シーソーゲーム"聴くと、途端に中2のサッカー部で合宿してる時のグラウンドにタイムスリップしちゃうんだよね。音楽ってそういう力があると思うし。音楽だけじゃなくても、その時の嵐を見ると、その時の自分を思い出す、みたいな感じになれたらいいなあと思うよね」





この写真集は、私の素がたくさんつまっています。
普段の私が、そのまま写真になっています。——

木村カエラ（あとがきより）

カエラの素顔、すべて見せちゃいます！
木村カエラはじめての写真集『Cheeky』、大絶賛発売中！

デビュー5周年となる今年も、絶好調の勢いでキュートな魅力を振りまき続ける木村カエラ。そんな彼女の写真集『Cheeky』が絶賛発売中です！ 普段見せることのない“素”の表情があふれ出すロンドンでの休日から、2006年、日本列島を縦断した2本の全国ツアーの舞台裏、さらには終演後の打ち上げ風景などを収めたスタッフ撮影によるツアー中のオフショット集まで——。ミュージック・シーンを駆け抜けるカエラのリアルな息遣いをこの一冊に閉じ込めました。ポップに弾けるカラフルな魅力と、等身大の素顔が詰まった決定版写真集です。是非ともお買い求めください。

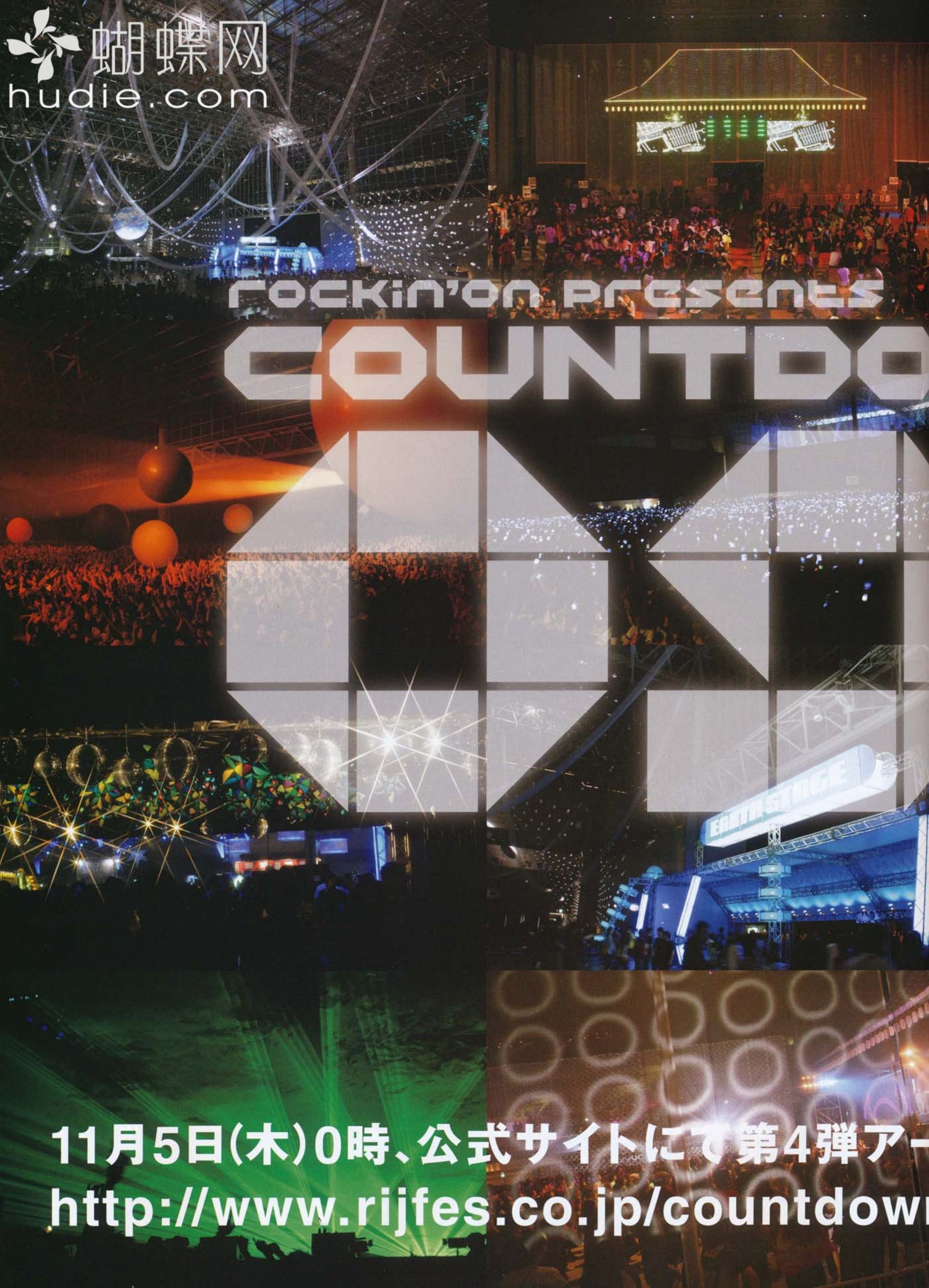
木村カエラ写真集『Cheeky』 撮影＝森本美絵／アミタマリ　定価：2,415円（税込） A4変型 ISBN978-4-86052-064-9

※ご注文は、お近くの書店にてお願いします。ご自宅へのお届けは、注文センター（042-944-0451/平日9:30～17:00）、または弊社ホームページ（http://www.rock-net.jp）にて承っております（送料380円）。



ティスト発表!!

apan/（PC・携帯共通）


rockin'on presents
COUNTDO
11月5日(木)0時、公式サイトにて第4弾アー
http://www.rijfes.co.jp/countdow

12.30.Wed.

ART-SCHOOL
安藤裕子
OGRE YOU ASSHOLE
cutman-booche
グループ魂
GOING UNDER GROUND
サカナクション
ZAZEN BOYS
Scars Borough
曽我部恵一BAND
Qomolangma Tomato
東京事変
トータス松本
Nothing's Carved In Stone
knotlamp
THE NOVEMBERS
the HIATUS
ザ・ビートモーターズ
フジファブリック
your gold, my pink
UNISON SQUARE GARDEN
YO-KING
凛として時雨
luki
and more...

12.31.Thu.

andymori
泉谷しげる
エレファントカシマシ
ザ50回転ズ
サンボマスター
SISTER JET
SCOOBIE DO
Superfly
sleepy.ab
dustbox
鶴
detroit7
the telephones
東京スカパラダイスオーケストラ
怒髪天
仲井戸"CHABO"麗市
HALCALI
B-DASH
PILLS EMPIRE
フラワーカンパニーズ
plenty
THE BAWDIES
bonobos
POLYSICS
The Mirraz
and more...

※五十音順 ※出演者の出演時間、出演ステージは後日発表いたします。※出演者は変更になる場合がございます。

0910

ッセ国際展示場1~8ホール、イベントホール(千葉市美浜区)

31日=開場予定12:00/開演予定13:30/終演予定29:00

UNTDOWNJAPAN 09/10 事務局 0180-993-634(24時間テープ対応、PHSからは不可)

式サイト〔NOTICE〕の「全体に関する注意事項」をご確認下さい。

Budweiser

12.28.Mon.

avengers in sci-fi
UNCHAIN
WEAVER
奥田民生ひとり股旅
木村カエラ
9mm Parabellum Bullet
GLORY HILL
坂本龍一
佐野元春 & THE COYOTE BAND
椿屋四重奏
TRICERATOPS
Northern19
PUFFY
the band apart
People In The Box
a flood of circle
flumpool
BOOM BOOM SATELLITES
ユニコーン
ROCK'A'TRENCH
and more...

12.29.Tue.

HY
OVERGROUND ACOUSTIC UNDERGROUND
氣志團
黒猫チェルシー
毛皮のマリーズ
SEAMO
ストレイテナー
SPANK PAGE
TOTALFAT
DOPING PANDA
のあのわ
BACK DROP BOMB Special Formation Set
THE BACK HORN
The Birthday
BIGMAMA
BEAT CRUSADERS
FoZZtone
Prague
Paymoney To my Pain
monobright
RHYMESTER
LOW IQ 01 & MASTER LOW
and more...

rockin'on presents

COUNTDOWN JAPAN

2009年12月28日(月)・29日(火)・30日(水)・31日(木) 幕張

28日・29日・30日=開場予定12:00/開演予定13:00/終演予定21:3

主催:幕張メッセ/ニッポン放送/ディスクガレージ　企画制作:ロッキング・オン　協賛:Budweiser　後援:JAPAN COUNTDOWN/WOWOW　お問い合わ

※今年より、ダイブに対する厳しい措置を含め、注意事項、オペレーション等を一部追加、変更しておりま

宮崎あおい

『ソラニン』

PHOTOGRAPHS BY MIE MORIMOTO
TEXT BY TOMOKO UEDA





OL2年目で会社を辞めた芽衣子と、
音楽の夢を諦めきれずにフリーターを続けている種田。
ふたりの同棲生活やバンド仲間との交流を通して、
未来への漠然とした不安を抱えながら
明日への新しい一歩を踏み出そうとする若者たちの姿を描いた
浅野いにおの人気マンガ『ソラニン』が映画になります。
井上芽衣子に宮﨑あおい。種田成男に高良健吾。ドラムのビリーに桐谷健太。
ベースの加藤にサンボマスターの近藤洋一。加藤の彼女小谷アイに伊藤歩。
このピッタリなキャストを従えて、また新たな青春映画が誕生します。
やりたいことがわからないもどかしさ、やりたいことがあっても
実力や運がついていかないふがいなさ。
誰もが感じたことのあるいびつな感情がキャスト陣の等身大の芝居で丁寧に描かれ、
クライマックスとなるライヴシーンはスクリーンならではの迫力で胸に迫ることでしょう。
そこで今回の『H』では一足お先に『ソラニン』の現場で宮﨑あおいちゃんをキャッチ。
芽衣子が“ソラニン”を歌うライヴシーン撮影の翌日に行われた
インタビューとあわせて、映画『ソラニン』の現場レポートをお届けします。

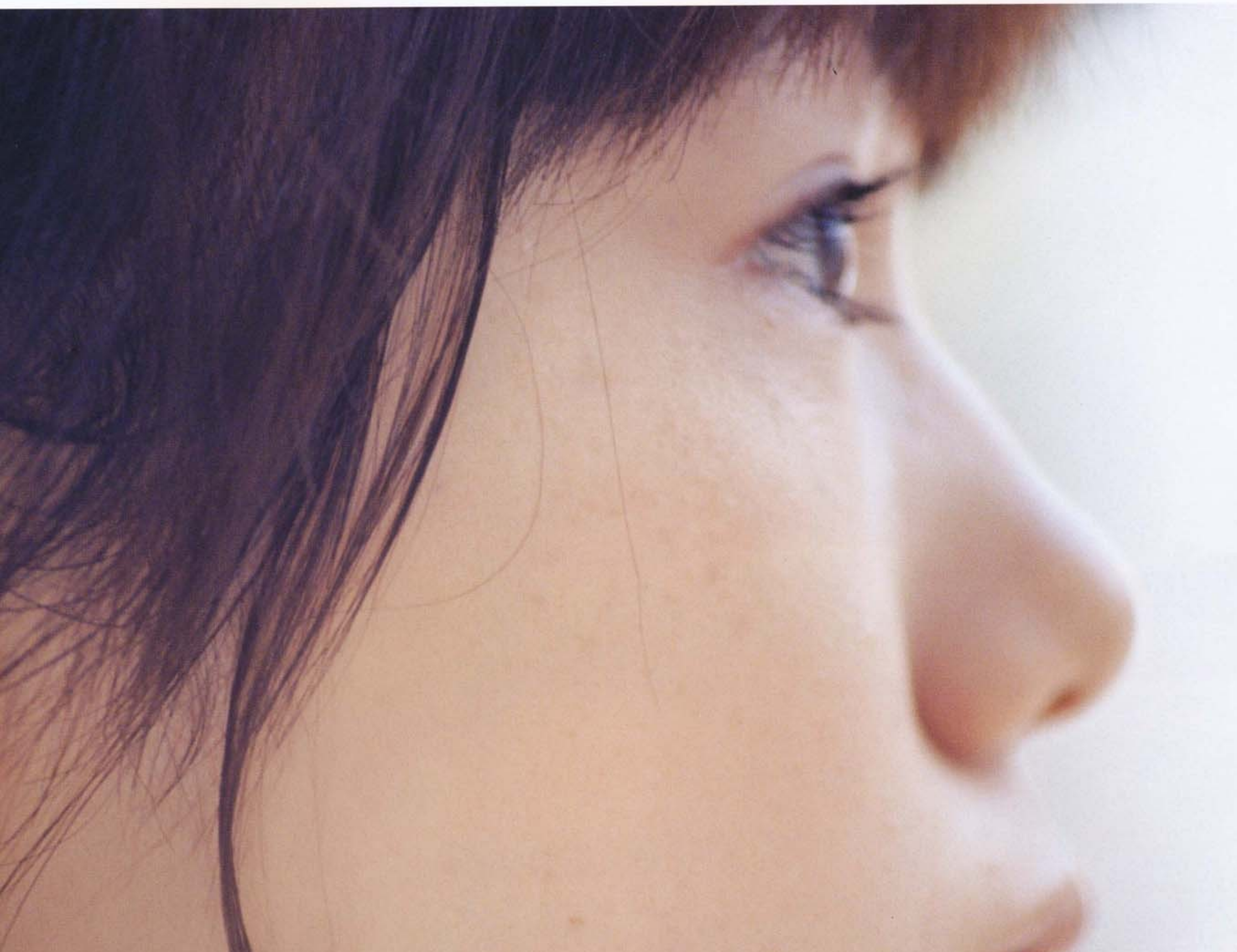



Fender MUSTANG










Fender
Fender














1991











——ライブ撮影の感想からお訊きしてもいいですか。
「楽しかったですねえ」
——ライブハウスでギターを弾いて歌うという体験はいかがでしたか？
「多分もう一生ないでしょうからね。プライベートではもちろん、仕事でもなかなかこんな機会はないので。ライブの最後に演奏する〝ソラニン〟のシーンを撮影するために、その前に演奏している曲の最後の部分もやったんですよ。本当なら最後のフレーズだけちょっと流してやってもいいんだけど、3人とも前の曲を演奏した疲れっていうのは、ちゃんとやらないと気持ち的に出せないっていうのがあって、毎回毎回全部最初から——曲のアタマからやらせてもらったんです。エキストラの方たちも毎回新しい反応をしてくれて、スタッフの方も毎回つきあってくれて、それが一番ありがたかったですね」
——「曲の後半だけ撮るんだけど、どうする？」って助監督さんに訊かれたときに、3人みんなが「最初からやらせてください」って言ってましたよね。あれは最初から3人で決めてたことだったんですか？
「いや、ステージに立ったらそうなりました。みんな同じ気持ちになって。何回でも何十回でも(演奏)できるよねっていう話をしていたんですよ。だって、お客さんだけを撮るときにはこちら側もお芝居をするじゃないですか。でもそのときも、3人とも自分が撮られていなくてもそんなこと関係なく、全部を100パーセントで歌って演奏したんですね。だからまったく悔いがないし、逆にもう1回やりたいとも思わないし、やり切れたなあという感じがすごいしています」

種田の意志を継いだ芽衣子がステージで“ソラニン”を歌うライブ・シーン。本編のクライマックスであり、クランクアップでもあった撮影の翌日に宮﨑あおいさんに訊いた、初めてのバンド、『ソラニン』について。

撮影＝森本美絵　テキスト＝上田智子

——ギターを背負った写真を『宮﨑あおいの日々のあわ』(Hの姉妹誌CUTでの連載)に載せてくれた時期から、昨日のクライマックスに向けての何ヵ月間があったわけですよね。悔いが残らずちゃんとできたっていうのはすごい達成感ですよね？
「楽しかった〜(笑)。あの一体感というか……3人でしか作れない空気感を作れたこともよかったし、それをスタッフの方やエキストラの方たちと共有できた気がするし。何度も演奏して、歌って、キーも出ない音が出てきたり、最後とかもう声が出なくてガラガラしてオカマみたいな声になってきていて(笑)。でもすごい、声がハスキーになっていくのが楽しかったり」
——インする前は人前で歌うことをちょっと恥ずかしがっていたけど、そういうのもなくなりましたか？
「そうですね、なくなりました。ライブのときなんて恥ずかしいなんてまったく思わなかったし、気持ちよくてしょうがなかったです(笑)」
——(笑)でもライブの演奏シーンが悔いなく終わってよかったですよね。
「もうそれが一番ですね。後はどう編集されてどういう作品になるのかはもう、待つしかないですからね(笑)」
——3人のバンド感みたいなのもすごく出てましたけど、3人での練習は多かったんですか？
「実はそんなにしてないんですよ。でも、スタジオで初めて練習したときからすごく楽しくて。演奏もまだまだだったし、歌もまだまだだったから課題は残ったんですけど、そこから考えると、昨日あそこまで達せたことはすごいことだと思う」
——ちなみにどんな練習をしたんですか？









「最初の頃は毎日、車の中とかでも一応ギターに触っていて。でも撮影インしてからは1週間くらい触っていなくて、高良(健吾)くんに『1週間くらい弾いてないよぉ』って言ったら『忘れますよ』って言われたから、またそこから少しずつ触り始めて。そのすこし後に他の曲のコードをもらったり、〝ソラニン〟のレコーディングがあったので、またちょっとずつ弾き始めました。ピアノと同じで、わたし音符もコードも読めないから手で覚えましたね」
——それはギター指導の先生と一緒に？
「はい。でも最初はもう、そこのコードに指を持っていくことが難しいから、意味のわからない手の形をしてるんですよ(笑)」
——Fとかすごい大変なんですよね。
「わたしはキーの問題で違うコードになるんだけど、高良くんはそれがいっぱいありましたね。まずコードを覚えるとこから始まって、とりあえず動きができるようになってそこからスムーズに動かせるようになって——そう考えるとすごいですねえ？　高良くんすごいわあ(笑)」
——(笑)あおいちゃんは結局何ヵ月で弾けるようになったんですか？
「撮影前の1ヵ月と撮影中だから、1ヵ月ちょっとですね」
——それ、普通ではあり得ない早さだよ。
「すごいですよねえ？」
——だって『純情きらり』でピアノも弾けるようになったじゃないですか。ピアノも未経験だったんでしたっけ？
「ピアノも未経験でした」
——すごいなあ。やっぱりプロ根性

なんですかね。
「改めて考えたらすごいですよねえ?」
――「わたしすごい」って言っちゃっていいと思いますよ。
「すごい(笑)。できるようになったもん、だって(笑)」
――バンドのメンバーだったサンボマスターの近藤洋一さんと桐谷健太くんは、同志みたいな存在だったんですか?
「近藤さんはやっぱりプロの方なので、いてくれたことで安心したところはたくさんありました。レコーディングのときも『大丈夫、大丈夫』って言ってくれて。そして一番年長さんだし、いてくれるとホッとするんですよね。わからないことがあったら、楽器のことでもなんでも近藤さんに訊けるし、どういう感じでやりたいかっていうことを音楽の専門用語で言われてもわからないじゃないですか。だからもう近藤さんがいいと思うものがきっとわたしたちにとっていいはずだからと思って、『近藤さんに任せます』って言っていましたね。ほんとに信頼できる人ですね。健ちゃんはムードメーカーで、健ちゃんがいると現場が楽しくなるんですよ。昨日もあれだけ演奏して、みんなすごく疲れてるじゃないですか。そしたら健ちゃんが、『膝が笑ってるんだよねえ』って裾をまくったら、膝小僧にマジックで笑った顔が描いてあって(笑)。で、『こっちはどうだろう?　こっちも笑ってるかな?』ってもう片方の裾もまくったらそっちは怒っていて(笑)。そんなのをライブ終わったあとに仕込んでるなんて、おもしろいなあ、最高だあと思って。ちょっと(気持ちが)落ちてる日とかも、『おもしろい話して』って言うとおもしろい話してくれるから、笑ってよし頑張ろうって思えたりしてました」
――「おもしろい話して」って言うとしてくれるんですね(笑)。
「してくれます。でも書けない感じのおもしろい話なので、(放送禁止の)ピーピーピーピー入れなきゃいけない(笑)」
――(笑)高良健吾くんや伊藤歩さんはどうでしたか?
「歩ちゃんは年上なんですが、すっごく可愛くて、天然なんです。喋っているとひとつひとつがおもしろいんですよね。初めて会ったときにいきなり、『わたし宮﨑さんのこと好きなんで～す』って言われて『うあっ、告白された～。ありがとうございますぅ』なんて会話があって(笑)。そこから毎日会って話をしたりして、ちょっとずつ歩ちゃんがわかってきました。昨日も『あおいちゃ～ん、あたしのこと好きでしょう?』って言われて(笑)、『好きだよ』って言ったら『わかる』って。そういうのも本当に可愛いし、大好きになりました。映像とかで見てるとそんなにホワ～ッとしたイメージがなかったんですよね。しっかりしてるというか、もっと強いタイプの人かと思っていたんですけど全然そんなことなくて、すごく柔らかくて可愛かった(笑)」
――高良くんは?
「高良くんは前に共演した時に、すごく礼儀正しい男の子だっていう印象があったんですね。腰が低くて、わたしの顔見てくれないみたいな(笑)、目が合わないくらい。それで今回また一緒になって、多分高良くんも最初はすごく緊張していたみたいなんですよね。わたしが近づくと離れるみたいな感じだったから、嫌われてるのかなあってちょっと思っていて(笑)。最初はふたりきりのシーンが多かったんだけど、他のメンバーがちょっとずつ入ってきてみんなを交えたときに、だんだんそれもほぐれてきて。そこからやっと種田と芽衣子になれるというか、ふたりだけで作ってる関係性じゃないんだっていうことをすごく感じました」
――周りのみんながいるからこそ、ふたりが際立つみたいな感じだったんですね。
「うん、そうですね」
――種田と芽衣子としてはどうでしたか?
「種田と芽衣子としては、客観的に見てないからわからないんですけど、夢の中のシーンで種田が死んじゃった後に、『そんな顔しないでよ。君は笑ってる顔が一番可愛いんだから』って言ってくれるシーンがあるんですよね。高良くんの顔は映ってないんだけど、そのときに種田の気持ちがワッと動いたのが見えて、感情の動きがすごく伝わってきたんです。そのシーンが一番好きかもしれない。そういうときにお芝居してて楽しいなって思う」
――そういう気持ちを受けて芽衣子として歌うというのは、種田が歌った曲を歌うというのもあるし、いろんな紆余曲折があって最後に歌うところだから、声の出し方や歌い方も芽衣子になって入り込まなきゃいけないですよね。それは宮﨑あおいとして歌うのとはまた違う感覚ですよね。
「でも、宮﨑あおいとしては歌を歌わないので、わたしだったらっていうことがまずないんですね。だから初めてレコーディングをしたときはすごく緊張したし、声も固かったんですよ。最初の《思い違いは～》ってちょっと淡々と歌うところは声が震えていて、だけど近藤さんはそれがすごくいいって言ってくれたんです。レコーディングをしている日も、近藤さんはNHKで仕事をされてたんだけど、合間にちょっと来てくれたりとか、すっごく優しくて」
――やっぱり頼りになりますよね。
「頼りになります。『大丈夫』って言ってくれたり、レコーディングが終わって出来上がったものを聴いて『すっごくいい』って言ってくれました」
――歌のレコーディングって、ナレーションのお仕事とはまた違うものでした?
「うん、緊張しましたね。だって本当に、〝歌〟って今まで避けてきたものだったのに、歌わなきゃいけないわけだったから。でもミキサーさんとか音楽プロデューサーさんもすごくいい方で、みんなが優しい気持ちでわたしができるまで待ってくれている感じがすごくあって、安心してできましたね」
――レコーディングした自分の歌を初めて聴いたときの感想は?
「最初はすごい恥ずかしかったですよ。昨日ライブハウスで聴いたら好きって思ったけど、最初に家でひとりで『よし!』って決心して聴いたときは、『イヤ!』って思った(笑)。でもライブハウスのステージに立ってあの歌を聴いて歌ってみると、自分の声もイヤって思わなかったし、歌うことがすごく楽しかった」
――声だけ聴くと、喋り声と歌声が違いますよね。
「それはすごく言われました」
――あおいちゃんの歌、すっごくよかったですよ。
「よかったぁ～」
――映画の完成を楽しみにしています!

SOLANINE






『ソラニン』
2010年春、全国ロードショー　宮﨑あおいカレンダー発売中



上野樹里×玉木宏
『のだめカンタービレ』

NODAME & CHIAKI

Une date d'un jour à Paris

PHOTOGRAPHS BY YAMA[ANGLE]
STYLING BY MAYUMI NISHI(UENO), HIROKI NAKAYAMA[SUZY](TAMAKI)
HAIR & MAKE UP BY HAMA(UENO), YUKIYA WATANABE[SUZY](TAMAKI)
TEXT BY TOMOKO UEDA




PASSAGE PUBLIC
METRO


OPTIQUE


Le Monde
20 ans après la chute du mur de Berlin
Indonésie : le séisme fait des milliers de victimes












Café Michel Angelo




















LYON

上野「この映画の中で、自分の内面に抱えてるものが
画面に映り込んでる瞬間が見れたら幸せですね」
玉木「もともとコメディとクラシック音楽と人間の内面を
すごくいいバランスで描いている作品だし、
今回の映画もより上質な人間ドラマになっていると思う」

『のだめカンタービレ 最終楽章』撮影中のパリにて、
ふたりは何を思うのか？
のだめ×千秋のスペシャル・フォトストーリーとともにどうぞ！

映画『のだめカンタービレ 最終楽章』を撮影中のパリまで追っかけてシューティングした、のだめ&千秋のスペシャル・フォトストーリーはいかがでしたか？ ドラマ『のだめカンタービレ』（06年）の一大ムーブメントは記憶に新しいですが、クラシック・ブームという一過性のものだけでなく、私たちの心に残る作品になったのは、ストーリーの圧倒的な面白さと、臨場感あふれるクラシック演奏シーンに加えて、「ピアノの天才で変態」というのだめと「聡明でクールな完璧主義者」という千秋を、上野樹里さんと玉木宏さんが立体的に体現したからこそだと思います。ヨーロッパに舞台を移した映画ではのだめと千秋の葛藤や成長が丁寧に描かれることになりますが、おふたりの和やかな雰囲気や充実感あふれる表情を見る限り、かなり期待してよさそうです！

映画『のだめカンタービレ 最終楽章』は2部作となり、前編は12月19日公開、後編は2010年春公開予定！ 公開に先駆けて、パリでの対談をお届けします。

——今日は、パリの街並みの中におふたりがいるだけで、「あ、のだめと千秋がいる！」って思ってすごく嬉しかったです。パリでの映画の撮影はいかがでしたか？

玉木「最初はちょっと不安ではありましたね。やっぱりその間に違う仕事が挟まっていたから、純粋に3年半という時間の中でちゃんと同じ役ができるかなって思ってたんですけど。でも、実際に撮影が始まってみたら、頭で考えてたよりも体がちゃんと反応してくれたんです。のだめと千秋の成長過程を描いている作品だから、新しい心情も生まれてるし、パリに来て1年半が過ぎているって設定もあったし。だから、頭で考えるほどは難しくないなと思いましたね。こんな風にシリーズになる作品って、たぶん一生やっていく中でそんなにはないと思うし、ましてやこんなパリに来て撮影する機会もほとんどないと思うので」

上野「シリーズって最初からわかってなかったですしね」

玉木「そう、毎回その都度終わりだっていう意識でやってたので、この環境を楽しみたいなっていうのがありましたね」

——改めてお伺いしたいんですが、おふたりにとって、『のだめカンタービレ』という作品は大切なものとして残っていますか？

上野「初めて連ドラの主演をやらせていただいた作品が『のだめカンタービレ』で、それが映画化までできたっていうのも、また初めてのことなので。次またそういう作品があっても、最初にやったことが一番記憶に残っていると思うから……心に残っていくものというか、代表作になると思いますね」

玉木「僕も同じですね。初めてメインでドラマをやらせてもらったので、最初はもちろんプレッシャーも感じていたんですよ。原作ファンの人が多いこともそうだし、撮影自体もきつかった。だけど、その分すごく楽しかったんです。そういう作品で演じた役だからこそ、特別に感じられるのかなと思います」

——今回の映画化にあたって、どういったことを考えて演じられたんですか？

上野「『のだめ』って誰もが楽しめるし、劇場に足を運びやすい作品ですよね。すごくこだわりのある映画ファン以外の人——映画館に普段来ない人も来たいと思うような、そういう良さとパワーがあると思う。でもその一方で、これまでのドラマでは見せていなかった細かい心情の部分も描いているので、そこをちゃんと表現したいっていう気持ちも強くて。どっちも大事で、そのバランスをとるのがすごく難しいんですよ。でも、ドラマのスタッフと映画のスタッフがそれぞれいるので、その時点でもう絶対新しいものが出来るとは思うんですよね。だから、あとは一生懸命やるだけ。今まで通りにやればいいっていう慣れみたいなものも全然なくて、新しいものを作ってるっていう感覚なんです。映画になった『のだめ』を見てないから出来上がってくるまではわからないけど、そういうことを恐れずにやっていこうと思ってますね」

——逆に、何が映ってるかわからないというのが楽しみだったりしませんか？

上野「そうですね。自分の内面に抱えてるものが画面に映り込んでる、宿ってるっていう瞬間が見れたら幸せですね」

——玉木さんはいかがですか？

玉木「ドラマを始めたときに遡っちゃいますけど、これはチャレンジの多いドラマだったと思うんです。僕ら役者側もそうだし、制作側もそうだったと思う。でも手探りの中でやってきて、オンエアされてある程度の反応が返ってきたときに、それがすごくプラスになったんです。結果、自分たちのモチベーションを上げることにも繋がって、こうやってシリーズになって、今に至っているっていう。映画を撮っているときはお客さんの反応がリアルに見れないので、そういう意味でちょっと不安要素もあったりはしますけど。でも、ほんとに深い作品だと思うんですよね、コメディと、クラシック音楽と、人間の内面を、すごくいいバランスで描いている作品なので。今回の映画は、もちろん『のだめ』の今までのテイストっていうのもあるんですけど、より上質な人間ドラマに近いものになっていると思うので、そういう意味で今すごくやりがいを感じてます」

——上野さん、玉木さんがそれぞれしっかりと隣に〝のだめ〟と〝千秋〟として立っているからこそ、自分の役がより引き出されたっていうことはありませんか？

玉木「それはもちろんありましたね。やっぱり『のだめ』っていう作品に対して、樹里ちゃん自身がすごく真剣に捉えてるので、一緒にやる側としては心地いいんですよね。すごく

撮影＝YAMA[Angle]
スタイリング＝西真由美（上野）、中山寛己[SUZY]（玉木）
ヘア&メイク＝HAMA（上野）、渡部幸也[SUZY]（玉木）
撮影コーディネート＝佐藤久理子　テキスト＝上田智子

やりやすい環境だなと思ってます」

上野「私は現場で行き当たりバッタリでやっていくタイプで、そのときに感じたことでやっていくので、良し悪しいろんな結果があると思うんです。でも、玉木さんは常に安定しているので、そういう面で助けられますね。逆に芝居の面で、本当にのだめみたいに振り回してるところがあるかもしれないですね(笑)」

玉木「そんなことないよ(笑)」

「千秋の素直に言葉にできないどこか不器用な部分も、すごく好きになれた」(玉木)

「のだめの我の強さみたいなのが逞しいなって思います」(上野)

──いよいよ物語も完結してしまいますが、結末までの台本を最初に読んだときはどんなふうに思われました?

玉木「やっぱり、のだめと千秋の成長過程を描いてるんだなっていう印象がすごく強かったですね。『前編』は千秋がマルレ・オケを立て直す話で、のだめに対して差を見せつけなきゃいけないところでもあって。で、それを見たのだめが『後編』で焦るようになってきて、そんなのだめに対して、千秋がはじめて見せるやさしさがあったりとかして……。今まで自分が『のだめ』で経験したこととは違う要素があるから、それをどう見せようかなって台本を読んだ段階では思いましたね。でも人間のすごく生っぽい感情だから、それは大事にしたかったし、『後編』のストーリーなんか特にすごくいいなと思ったので。その良さがほんとに出せるように演じられたら最高だなと思いました」

上野「私は、映画として成立させるために、今まで構築した意識を全部変えたいって思ったんです。『前編』ののだめはおちゃらけてばかりいて真剣になるシーンが全然なくって、動きのキレとかテンポはドラマの良さをそのまま生かしていこうってやっていて。でも『後編』で精神面が結構ヘビーになってくるので、その差がすごいんですよ。『後編』はのだめっていうよりも、のだめと千秋の間に生まれてくるものという、ふたりの物語だと思うんです。今までののだめと千秋の関係性が逆転したりとか、恋愛の部分でもう本当にダメになっちゃうんじゃないかってところまでいっちゃたりするから。……いつもは笑いを交えて千秋先輩に怒ったりつっかかったり甘えたりしていたけど、どんどんそれが本気になっていって、本気でキレたりぶつかったりして、だんだん笑えなくなっていくっていう。ドラマのときは動きもオーバーアクションだったけど、映画になるとまた全然違いますしね。精神的な部分を大事にすると動きがやっぱり制限されちゃったりするので、そこはほんとに難しいんですよ。でも、もうやるしかないなっていう感じでした。いろいろ考えるよりも、この気持ちひとつだけを持っていればいいんじゃないかな、それ以外なんにもいらないな、って」

──では、足掛け4年ものあいだ演じられてきた、のだめ、千秋という人物の魅力はどう捉えていらっしゃいますか?



JURI UENO × HIROSHI TAMAKI

玉木「最初にお話をいただいた段階では、『こんな完璧な人間、できるわけないよ』と思ったのが正直なところなんですよ。でも蓋を開けてみて、自分が向き合って演じていくうちに、すごく愛情を持って演じられる役だなと思ったんです。努力をして常に高い壁に向かってる人間なので、まわりから見たら何でもできるいわゆる天才に見えるけれど、実際はいろいろな悩みや葛藤が徐々に見えるようになってきて、努力してそうなっているっていう部分もより出てきているので。素直に言葉にできなかったりするどこか不器用な部分とかも、すごく好きになれたんですよね」

上野「のだめは最初は変人、変態っていうか、『普通はこういう子いないじゃん』っていう非現実的な感じの印象だったんですよ。何やるにもテンション高いし、普通じゃないなと思ったけど、今ではそれが普通になってきてるんですよね。さっき玉木さんが言ったみたいに、そういう風に見えていただけだと思うんです。たとえば、実際に地方から出て来た人でふだんは自分を抑え込んでいても、お酒飲んだら素の部分がバッて出たりするじゃないですか。やっぱりそういう風に、みんなどこかで真面目にやる部分と抑え込んでるけど何かの拍子に本当の自分の声が出るときってあると思うんですよね。でも、のだめは常に本当の自分を出せる子で、どんな環境でも変わらない。変わりたいと思ってるんだけど3日ぐらい経つと絶対に自分の世界に戻ってしまうっていう感じで。悪く言えば成長してないし、良く言えば自分っていうものを強く持ってる子なんですよね。そういう我の強さみたいなのが逞しいなって思います。だから、一見そう見えないけど、裏で実は賢いんじゃないかなと思います。動物的っていうか、起こった出来事、経験したことすべてが絶対糧になって演奏とかに反映してくる。そういうのってなんかわかる気もしますし。意外とすごく自然体な子なんだなって思いますね」

衣装=(上野)コート¥115,500、中に着たタートルカットソー¥18,900、中に着たワンピース¥84,000/以上minä perhonen☎03-5793-3700、マフラー¥22,050/MARK BY MARK JACOBS(MARK JACOBS JAPAN☎03-4335-1711)、タイツ¥4,830/FORDMILLS(ANGLOBAL SHOP表参道☎03-5470-2151)、シューズ¥37,800/TOGA☎03-5467-1692 (玉木) JACKET ¥187,200、PANTS ¥79,800、GILET ¥63,000、SHIRTS ¥46,200、SHOES ¥89,250/以上全てDior Homme☎03-3263-2266


2009.11.11 RELEASE
坂本真綾
マジックナンバー
1 マジックナンバー
(TVアニメーション「こばと。」オープニングテーマ)
2 Private Sky
3 カザミドリ -Live Version-*
4 ポケットを空にして -Live Version*
*1月24日 東京国際フォーラム・ホールAにて収録
2010年、"CDデビュー15周年"。
記念すべき1年にむけての序奏が始まる、
キラキラ度満点のNEW SINGLE !!
可愛くて、ひたすらまっすぐで。
最高にキュートなファンタジックナンバー。
VTCL-35077 / ¥1,260(tax in)
武道館LIVE決定!!
2010/3/31<wed>
★
初回封入
二大封入特典
1 初披露曲含む、ミニ・コンサート&トーク (vo. 坂本真綾 p. 河野 伸) 応募ハガキ
2010年2月実施予定 応募締切：2009年12/2 (水)
2 武道館LIVE チケット先行予約情報 (シングル「マジックナンバー」購入者専用)
応募期間：11/11 (水) 19:00～11/16 (月) 18:00
こばと。
NHK－BS2 にて好評放送中 http://www.kobato.tv/
©2009 CLAMP・角川書店／こばと。を守る会
OFFICIAL HP「I.D.」 http://www.jvcmusic.co.jp/maaya/
公式携帯サイト「坂本真綾 IDS!」(i-mode, EZweb, yahoo! ケータイ) http://maayasakamoto.jp/
株式会社フライングドッグ
http://dog.flying.com



蝴蝶网
hudie.com
Simply Good
AYUSE KOZUE
NEW ALBUM 2009.11.18 Release!
01. close to you ～ずっとそばで～ 02. ヤミツキ 03. あのねのね
04. トオリアメ 05. バンビのしっぽ 06. Un-controllable ～いつでも君だけ～
07. こよいキミに恋をして 08. KISS KISS KISS 09. LUV CRUISIN'
10. ONE 11. How Beautiful 12. Don't let you down
All songs created by AYUSE KOZUE
初回盤 (CD+DVD): TFCC-86316 ¥3,200 (tax in) 通常盤(CD): TFCC-86317 ¥2,800 (tax in)
初回封入特典：09.16 Release『Don't let you down』連動応募抽選券
www.ayusekozue.com www.myspace.com/ayusekozue
Kimi



阿部サダヲ×皆川猿時×宮藤官九郎

『なくもんか』

PHOTOGRAPHS BY MASAKAZU YOSHIBA
TEXT BY TOMOKO UEDA


MIWA
カギと錠の専門店


MEAT




自転車歩行者
バイク
世田谷


係員以外
立入禁止
な横断は
おやめ下さい

阿部サダヲ主演×宮藤官九郎脚本×水田伸生監督が送る『なくもんか』は、下町の商店街を舞台にした「ホームドラマ」。幼い頃父親に捨てられ、預けられた先のハムカツ屋を継いでいる祐太(阿部)と、祐太の生き別れの弟で今は人気絶頂の芸人である祐介(瑛太)の、兄弟と家族の物語です。阿部×宮藤×水田チームがこれまで手がけてきた作品——『ぼくの魔法使い』『舞妓Haaaan!!!』は、はっちゃけたコメディの要素が強かったですが、『なくもんか』は、ちょっとヘビーな人間ドラマと大笑いできる部分の振れ幅がすごいことになっています。笑って泣けて、最後はじんわり感動できる新たな快作ができあがりました！　ということで、今回は、阿部さんと宮藤さん、そして商店街の酒屋の息子・トシちゃんを演じた皆川猿時さんにお集まりいただき、あれこれたっぷり語り下ろしていただきました！

——まず映画を観た感想からお聞きしてもいいですか？

皆川「おもしろかったですねえ。おもしろかったんだけども、なんかそのぉ、みんな複雑なのね？」

一同「(爆笑)」

阿部「それ、台本を読んだときじゃなくて、映画観て気付いたんですか？(笑)。『みんな複雑なんじゃねえのか』って？(笑)」

皆川「そうそうそうそう。なんかみんな、一生懸命生きてんだなぁと思って切なくなりました、おもしろかったですけど。嘘の世界なんですけど(笑)、みんな大変なんだなーと思って、うん」

阿部「(笑)あなた(トシちゃん)の家のお父さんとかは、もういないんだよね」

阿部「知ってる？　この台本、ぱつんぱつんフェスの夜に書いてたんだって」
皆川「えっ、あのどじょう食った後に？」
宮藤「どじょう食って書けたわけじゃないから（笑）」

39歳同学年の3人が語り下ろす『なくもんか』（と、どうでもいい与太話）とは？
ラジオの実況中継風にお届けします！

撮影＝吉場正和　テキスト＝上田智子

皆川「うん」

宮藤「あとはお母さんだよね？」

皆川「うん。お母さん役の人が複雑な方で……。現場で急に身の上話をされちゃって(笑)。びっくりしたんですよね」

宮藤「(笑)」

——阿部さんはご覧になっていかがでした？

阿部「皆川さんが出てるな～って感じしましたよね、なんか」

皆川「はははは！」

阿部「なんか、皆川さんが止まってるシーンが多いんだよね。ずーっと見てるシーンとかあるじゃない」

皆川「あれ、長いねぇ(笑)」

阿部「喋んのかなって思って待ってたら、なんにも喋んなくて(笑)」

皆川「よくわかんない顔してたけど。なに考えてたんだろう、あの時」

阿部「(笑)。あとね、ハムカツのソースが普通のソースになったシーンの時に、皆川さんのアップがあって。その前に後ろのほうから声が聞こえ始めるんだけど、『あれ、まだ映ってねえな』みたいな感じじゃない？」

皆川「そうそうそう(笑)」

阿部「『このソースがよ！』みたいなのが聞こえるけど、(カメラが)まだそこに来てないなって」

皆川「来てない、来てない。でも、『今だよー！』って時はなに言ってるかわかんないみたいな」

宮藤「はははははは。(ハムカツ食べて)『うまっ！』ってやつだよね」

皆川「『うまっ』ってやつ、小倉(一郎)さんのセリフだったじゃない。台本上にはないんですよ、俺のセリフとしては」

宮藤「ないよね」

皆川「だから俺、水田さんが勘違いしてんのかなって」

宮藤「勘違いして皆川くんに渡してると思ったけど、儲けたと思って(笑)、返さなかったんだ」

皆川「黙っとこうって(笑)。そしたら、その後に小倉さんに『もう終わりですか？』って聞いたら『いやね、僕まだ〝ソースおいしい〟ってとこ撮ってないんだよね』って言われて。やっべ～！みたいな(笑)」

一同「(爆笑)」

——(笑)皆川さんが出てるシーン以外で、一番良かったシーンは？

阿部「僕は、いしだ(あゆみ)さんが陣内(孝則)さんに『孫は大事にしますから』みたいなこと言うシーンですね。自分じゃないですけど」

宮藤「あれも台本にないんだよ」

阿部「あっ、あれっ、そうでしたっけ(笑)」

皆川「はあー、そうですかあ」

宮藤「水田さんが作ったの」

皆川「へええー」

宮藤「でも、なんか、付け加えてくれたところがけっこう全部効いてるっていうか。台本に足りないところをいっぱい埋めてもらった感じがありますね。だってあの商店街の設定とか、ほとんど書いてないんです」

皆川「ああ～」

宮藤「徳井(優)さんがこの映画出てるって聞いた時も『なんの役だっけ？』って、すっげー考えて(笑)。現場行ってもわかんなくて、映画観て『ああ、こういう役なんだ』って」

阿部「(笑)」

宮藤「商店街の設定だと、あなた(阿部)と小倉さんと(片桐)はいりさん、あと高橋ジョージさんの役ぐらいまでじゃないかな、書いたのって。あとは監督が作り込んでくれて。あのリアリティはなかなか出ないですよ」

阿部「舞台みたいだったもんね」

宮藤「うん、エキストラなしだから、(出てる人は)全員役者なんですって」

——えーっ、すごいですね。

宮藤「うん。そうすると、ああいう画にちゃんとなるっていうのは、今回勉強になった」

阿部「みんな設定を考えられる役者さんばっかりだから、アドリブがうるっさいの(笑)」

一同「はははははは」

阿部「『こないだお前はよぉ！』みたいな設定を考えてくるの、みんな」

皆川「すごいよね(笑)」

——商店街のセットもすごいリアルでしたよね。

宮藤「元々はロケのつもりで書いてたので、セットになってること自体がもうびっくりだったんですよね。でも仕上がった映画を観て、ああ、セットっていう利点をすごく活かして撮ってるなって思いました。スタジオで組んでいるから、ちょっと薄暗いじゃないですか。それがすごく効果的だなーって。僕はロケだと思ってたんで、普通に日差しが入るのをイメージしてたんですけど、薄暗いから、さっき皆川くんが言ってた、ちょっと複雑な感じが出て、いいなーって思いましたね」

——ロケだと思ったのがセットだったり、台本にない部分があったり、水田監督が膨らませた部分も多々あるんですね。

宮藤「そうですね、シリアスな部分でも若干違う意味に取れるように繋いだりしてくれてるし。阿部くんの役はさ、(子供のときに)お母さんのお葬式に行くんだよね？」

阿部「うん、遠くから見てる」

宮藤「そういうのはないんですよ、ぼくの台本に。あと棋図かずおに似た人に会うっていうとこまでは、僕の台本にあるんですけど、それがじ

つはおヒョイさん(藤村俊二)だったっていうのは完全に水田さん」

阿部「細かいよね(笑)」

宮藤「(笑)細かいのを立て続けに入れてくるよね。『楳図かずおだ!』ってバイクに轢かれて、でもじつは楳図かずおじゃなかったっていう台本だったんですけど、それがおヒョイさんになってて(笑)」

皆川「ものすごいキョトーンとしてたもんね、おヒョイさん。意味わかんなかったんだろうねえ(笑)」

——作品自体としては、宮藤さんはどういう感想を持ちましたか?

宮藤「おもしろかったですね。今回は時間をかけずに書いたんですよね。煮詰まらなかったし、めんどくさくなかったんで、逆にどうなるかすごい不安で。だから(仕上がった映画を観て)意外と考えて書いてたんだなあって思いました」

阿部「知ってる? ぱつんぱつんフェス(グループ魂の秩父ぱつんぱつんフェスティバル)の時に書いてたんだって」

皆川「へ———!」

阿部「知らないでしょ!?」

宮藤「あなた達と飲んだ後だよ(笑)」

皆川「(笑)へ———!」

宮藤「庄やで飲んだ後」

皆川「えっ、どじょう食った後に?」

一同「はははは!」

宮藤「どじょう食った後」

阿部「どじょう食って書けちゃうんだからすごいよね(笑)」

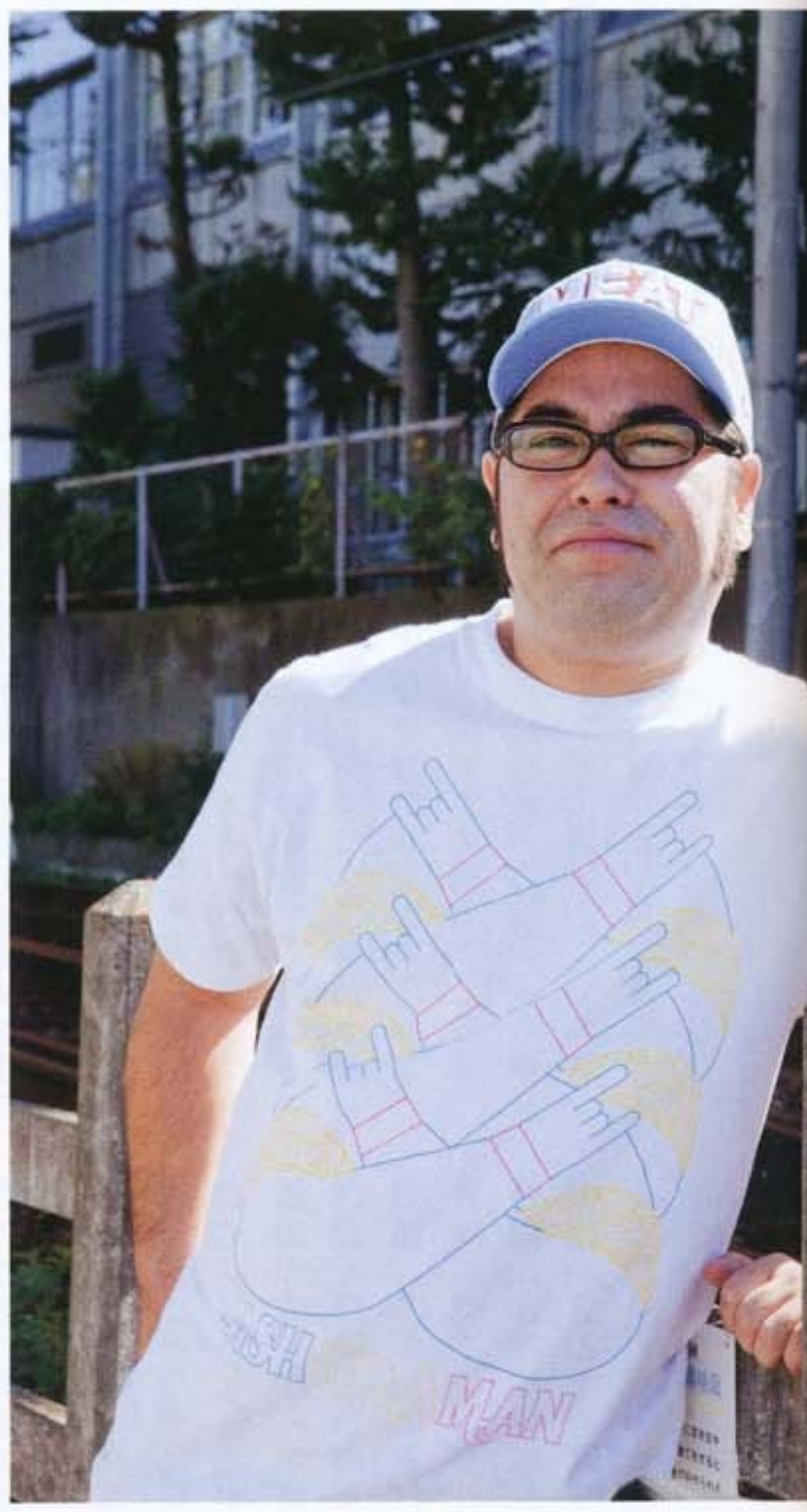
宮藤「どじょう食って、書けたわけじゃないから(笑)。でも、たまたまこの人(皆川)と富澤タクさんと3人だったんですよ」

——なんでどじょうだったんですか。

宮藤「東北だからじゃないですか?(3人とも東北出身です)」







阿部サダヲ×皆川猿時×宮藤官九郎

阿部「はっはっはっは」

宮藤「東北ってどじょう食べるよなぁ?みたいな(笑)。そんで飲んで部屋帰って、『フェスは楽しかったけど、これ終わったら俺、どうすんだっけ?』って思ったら、絶望的な気持ちになっちゃって。なんか次の仕事、始めた実感が欲しいなって。それで、一番先にやんなきゃいけなかったのが『なくもんか』だったんで書こうかなーと思ったんです」

皆川「へえ———」

宮藤「でもどじょう食ってなにか思いついたわけじゃないよ(笑)。どじょうにはなんにもインスパイアされてない」

皆川「でもぉ、あん時に東北の話をしたじゃないですか」

宮藤「そうだね」

皆川「みんなの家族の話を」

宮藤「そうだっけ?(笑)」

皆川「はい」

——ぱつんぱつんフェスで家族対抗歌合戦もやりましたしね。

宮藤「家族っていうのは、確かにちょっと自分の中にあったのかも。まあ、自分の親も来てたしね」

阿部「複雑な家ばっかりだったんですよ(笑)」

——庄やで話した家族の話ってどういう話だったんですか?

皆川「やっぱ東北って特殊だよねえ、みたいな話をしてたんですよね」

宮藤「そうだね」

皆川「食い物の話から。で、宮藤さんちってなんかいい話多いんですよね、お父さんにまつわる話とかってなって。それ、いいなぁってね。それで僕の知り合いのおばあさんは失踪して、なんか急にほんとに蒸発して、それから会ってないみたいな話になって」

阿部「へ———」

皆川「けっこうあるんですよ、東北地方ってそういうのが」

宮藤「東北地方にも、蒸発しない人もいるけど(笑)」

皆川「でも、だから伊原(剛志)さんがやった(祐太の)お父さんの役とか、すごいリアルで」

阿部「東北っぽい?」

皆川「東北の人ですよ、子供に対しての興味のなさとか。あと陰毛燃やして猫に嗅がせるとか」

阿部「ほんと!?」

皆川「あの人すごいリアルでしたよ!」

宮藤「あなたのお父さんもわりとあいうタイプでしょ?」

皆川「ああいうタイプです。どっか連れてってくれたとしても、パチンコ屋か競輪場で。あと河川敷行って『ゴルフボール拾えーっ』とか」

宮藤&阿部「はははは」

皆川「一回、山のほうに行ったんですよね。それで『お父さんどこ行くのー?』って聞いたら『おまえのこと捨てに行くんだよ』って言われて」

宮藤&阿部「(爆笑)」

皆川「ほんとに冗談じゃない感じだったんですよ(笑)」

——(笑)阿部さんのお父さんはどんな方ですか?

阿部「うちの親父はなんか自慢ばっかりしてるような人ですよ」

宮藤&皆川「はははは」

阿部「歌がうまい。女にモテる」

——(笑)それ子供に話すんですか?

阿部「うん、自慢ばっかり。自分の会社の社長と女を取り合ったとか」

皆川「すごいなぁ(笑)」

阿部「平社員のくせに(笑)」

——それ聞いて「お父さんすごい!」と思うんですか?

阿部「いや〜、みんな嫌がってましたね(笑)。また始まった、みたいな。何っ回も言うんですよ、ほんっとに。今でも言ってます」

——今回の皆川さん、阿部さんの役は、それぞれ当て書きなんですか?

宮藤「違います、とくに阿部さんは。『舞妓Haaaan!!!』は、第一稿の段階では、まだ役者が決まってなかったんですが、水田さんが『阿部さんにやってほしい』って言ったんで、阿部くんに寄せて直したんです。今回は逆で、最初から阿部くんありきで本を書いたんですけど、じつはあんまり当て書きしてなくて。だから、想像つかない部分がいっぱいあったんですね」

——じゃあ、阿部さんのために新しいタイプの役を考えて書いた感じではなかったんですね。

宮藤「違う人がやっても成立するって言っちゃ変ですけど……違う人がやったら全然違うんだろうけど、それはそれでいい人っていうことで成立するだろうなって思いながら書いてましたね。それこそ吉岡秀隆さんがやるような(笑)、『北の国から』の純くんみたいな感じでも成立する」

阿部「(笑)」

宮藤「(笑)阿部くんのことを忘れないと書けなかったんです」

阿部「(純の口調で)『好きでやってますから』って?」

宮藤「(笑)そうそう」

皆川「それは見たいなあ」

——(笑)そういう脚本の中で演じてる阿部さんを観てどうでした?

宮藤「いや、おもしろかったですよね。じつは知ってるじゃないですか、この人がいい人じゃないって(笑)」

阿部&皆川「はははは」

宮藤「(笑)必ずしも、100%いい人じゃないって知ってて——」

皆川「そうそう、わかるなあ」

宮藤「でも途中から見えてくるんですよ、この人はこうやって生きてきたんだなーっていうのが。そうじゃないの知ってるのに。それこそ役者の力だなあって思いました」

阿部「ていうか、いい人じゃないの、バラさないでほしいんだよね」

一同「(爆笑)」

皆川「そういう訳にいかないでしょ、あなた」

阿部「こないだ『おしゃれイズム』の収録があったんですけど、そこでも宮藤さんのちくりが多くて」

——このかわいい感じのキャラクターが嫌なんですか?

宮藤「いや、嫌じゃなくて(笑)。わりと奔放な役を阿部くんにやっていただくことが多かったんで、今回はそうしないっていうことで不安もあったんですよね。皆川くんの役も、皆川くんになったからって特に皆川くんに寄せたつもりもなくて。ただ、皆川くんになるって言われた時に、『この、くされ外道!』って殴るとこだけは想像がつきました(笑)」

皆川「んはははは」

——(笑)皆川さんは、自分の映像を繰り返しビデオで観るのがお好きだって聞いたんですけど。

皆川「はい」

——今回も何回も観れそうですか?

皆川「こぉれは、DVD楽しみですね〜(笑)。いや〜、大変だよ」

宮藤&阿部「(笑)」

——何回も観る映画と観ない映画は、どういう差があるんですか?

皆川「えっ? 自分が出てるのはすべて何回も観ますよ」

宮藤「どんなやつでも?」

皆川「まあ、観ますよねぇ」

宮藤「『NO MORE BET』っていうのも?」

皆川「『NO MORE BET』って最高じゃないですか。あっはははは!」

阿部サダヲ×皆川猿時×宮藤官九郎

阿部「それのタイトルなんだっけ?」

皆川「『愛なんていらねえよ、夏』。もう何回も観ますよねえ、ほんとに」

阿部「あのー、軽部(真一)さんっていらっしゃるでしょ、フジテレビのアナウンサーに。あの方がね、皆川猿時さんのモノマネするの」

宮藤「え——?」

阿部「びっくりした。この間『男おばさん』っていう番組の取材で、『皆川猿時さんの"クライマーズ・ハイ"での一言』、みたいな感じでモノマネしてて」

一同「(笑)」

阿部「『なんとかじゃねぇよぉ!』ってやってたよ」

皆川「似てないでしょ」

阿部「似てないけどね、ほんと好きみたいよ」

皆川「へええー!」

阿部「だから『なくもんか』についても、俺とかじゃなくて皆川さんのことばっかり話してたよ(笑)」

——今作は阿部さんの主演作第2弾になりますよね。

皆川「でも、なんかね、変わんないんですよ、普段と。別に気負ってるわけでもないですしね」

宮藤「確かに。主演だったり、主演じゃなかったりってのは大人計画でずっとやってきたから、あんまり変わんないよね。主演になったからって、急に差し入れ持ってきたりするタイプじゃないですし」

皆川「でもなんかね、上品な男なんだなと思いましたよね」

阿部「(笑)なにそれ!?」

皆川「『なにそれ』ってなあに!?」

一同「はははは」

皆川「なんか素晴らしいなって思いましたね。阿部くんのすごいところは、キスしても相手役の人が嫌な気持ちにならないとこ。そう言ってました、大人計画の女優たちが」

——(笑)。

皆川「『顔田顔彦はヤだけど』って言ってた」

阿部「どういう話でそんな話になるんだ(笑)」

皆川「なんだろうね。たぶん阿部くんの魅力を語ってたんじゃないですかね、みんなで」

阿部「気持ち悪いな」

皆川「まあ、結果的に、顔田顔彦の悪口になるんですけど(笑)」

一同「はははは」

宮藤「まあ、どんな話しても大体顔田さんの話になるからね」

——宮藤さんの作品はこれまでも家族というのを大切にしてましたけど、"ザッツ・ホームドラマ"っていうのは今回が初めてですよね。

宮藤「そうですね」

——宮藤さんとしては、どんなホームドラマになったと思いますか?

宮藤「書いてる時は、ちょっと、設定が突飛過ぎるかなって思ってて。やっぱ、兄弟の片方が漫才師になってて、片方がみなしごでハムカツ屋を継いでるっていう設定が、導入としては飛び過ぎてるかなっていうのが不安だったんです。でも、そこは水田さんの演出で、設定を皆さんに理解していただくようにちゃんとなってたんで。最初に瑛太くんのモノローグで阿部くんの半生をパーツでやって、阿部くんのモノローグで瑛太くんの半生をやる所は、すごい丁寧でしたよね、水田さんの演出が。僕は倍ぐらいのスピードをイメージして書いてたんで。でもあそこが丁寧だから、その後の流れも受け入れられるんじゃないかな。だってたとえばカンニング竹山さんが阿部くんのお父さんの役だったけど、じつ

は阿部くんのほうが年上だもんね」
阿部「そうです。僕より2個くらい下なんですよね」
宮藤「僕はなんかほんとに、ブワーッてふたりの人物紹介をやっちゃって、それで、竹内結子さんが来て、話が始まるみたいなイメージで。ほんとに軽い導入のつもりで書いてたんですが、それをすごく丁寧にやってくれて」
阿部「びっくりしましたね。読んだ印象だとアップテンポなのかと思ったけど、すごいしっとりした音楽で始まって(笑)。意外でしたね。台本にも書いてないですもんね、最初の『なんで?』っていうのも」
宮藤「あれはない」
阿部「文字で始まるんですけど。最初はスローモーションで、それが僕と瑛太くんの顔になるんです。それで、この人(皆川)が近づいてきてね、なんか台詞を言うんですけど、聞こえないという」
皆川「(笑)そうそう。あれすごく意味深だよね」
阿部「何喋ってるんだろう?って思うよね。(本人も)そういう風になるって知らなくて、芝居してるという」
宮藤「そうだよね、スローモーションになるって思ってないもんね」
阿部「けっこう声張ってたよね(笑)」
皆川「うん」
阿部「『短かったな』って言ったんだっけ」
皆川「そうだね」
宮藤「(瑛太に向かって)『いい気になってんじゃねーぞ、この野郎』って感じに見える(笑)」
阿部「(笑)」
宮藤「ちっちゃい声で言ってる感じ」
阿部「瑛太くんが『あそこの皆川さんいらない』って言ってたよ」
皆川「うん、俺もいらないと思う(笑)」
宮藤&阿部「にはははは」
宮藤「(笑)でも消せないからね、いらないって言われても」
——では、阿部さんと皆川さんにとって今作の現場での芝居はどういう経験でした?
阿部「『舞妓Haaaan!!!』の時はなんかこうなるんじゃないかって想像できたんだけど、今回は出来あがりを観て驚いたっていうか。監督の中で、音楽とかも全部できあがってた感じで、水田さんの考え方っておもしろいと思いました。宮藤さんも台本を水田さんに近づけたって言ってたんで、水田さんの世界がすごく出た感じはありますよね。水田さん、上品ですからね」
皆川「演出も丁寧だよねえ。けっこう細かいところまで色々演出していただきましたけど、それでやりやすくなるから、すごいなと思いましたね」
——たとえばどんなことを言われたんですか?
皆川「えっ? あんま覚えてないです」
一同「あっはははは」
宮藤「やりやすすぎて?(笑)」
皆川「『こんな感じなんですよー』みたいな? さっきも言ったけど、突拍子もない設定だけど、丁寧にやってるから、あのー、わかりやすいし」
宮藤「それ、俺言ったね(笑)」
皆川「そうそうそう。それでなんか……リアリティがある?」
宮藤「顔色うかがいながら話してるよね(笑)」
——今すごい見てましたけど、阿部さんの顔(笑)。みなさんにとって自分が思ってたのとは違う、ちょっと嬉しい裏切りみたいな作品になったってことなんですかね。
阿部「そうですね。やっぱり水田さんの中で完璧に水田監督の『なくもんか』が出来上がっているから、僕には弟がいてとか、水田さんご自身のエピソードを含めてすごく丁寧に言ってくれて、それがすごくわかりやすかったですね」
皆川「でもなんか、そういうことですもんね、観ててもね。『俺の親父もこういう親父だったなー』とか『でも、俺は兄貴とあんま仲良くないなー』とかさ、観ていろいろ思うわけじゃないですか」
宮藤「自分のことをね」
皆川「それはさ、作る側も考えて作らないとさっ」
一同「(笑)」
——皆川さんは、それを考えて演じられてたってことなんですね。
皆川「んんー? 考えてない(笑)」
一同「はははは」
皆川「なんかこう、観た後に、『こういう人いるよなー』とか『ああそれ、わかるなー』って思えるのがすごいと思いましたね」
——お三方って、大人計画でずっと昔から一緒にやってらっしゃいますよね。この機会に互いの「気になる点」、「気に入っている点」を教えていただきたいんですけど。
阿部「そういうことを言わないのが、いいんですよ、僕たちは」
——あ、なるほどね。
阿部「気にはなっているだろうけどね」
皆川「そうだねえ」
阿部「それはあんま話さないんですよ。年収とかね」
一同「(爆笑)」
宮藤「(笑)そっ、そんなこと気になってたのか。いきなりそれが出てくるとは思わなかった。そっか。皆川さんにはよく『儲かってんでしょ』って言われるけど(笑)」
皆川「まあまあ」
宮藤「途中からお金払わなくなったりするから(笑)」
皆川「はははは」
宮藤「『宮藤さんいいですか?』って。鮨屋に入って、注文する直前に『宮藤さん、ここいいですか?』って。むちゃくちゃだよ(笑)」
阿部「飲みに行った時も、飲み屋行って『いいかな?』って(笑)」
——そこはちょっと甘えちゃうんですか?
皆川「なんかたまたまお金がないんですよね」
宮藤「嘘でも芝居してほしいよね、そういう時。嘘でも財布開いて『あっ、俺金持ってねえよ』とか、お芝居あるじゃない。『宮藤さん、お寿司屋さんありますよ』って入って、注文する段階で『宮藤さん今日いいですか』って(笑)。いつからないって気付いてたんだろうな、こいつって」
皆川「ずいぶん前から気付いてたわけですよ。だから、嘘つけないの!」
一同「(笑)」
——こういう皆川さんがいるから、救われてる部分もありますか?
一同「…………」
皆川「なっなっないのぉー!?」
宮藤「(笑)いやあ、はい」
阿部「一応、おない年ですからね、3人ともね。だからおない年でもいろんな人いるなと思います」
——全然タイプが違いますもんね。おない年ゆえの連帯感みたいなのってあるんですか?
皆川「なんかありますね。なんなんだって言われたらわかんないけど」
宮藤「わかんないですけどね」
阿部「でもやっぱ同じ学校にはいなかったタイプっていう」
皆川「あなたみたいのも、いなかったよ、東北には!」
宮藤「いない、いない」
——それってどういうタイプなんですか?
皆川「なんつうんですかね、なんか知れば知るほど分からなくなる人ですかねえ。いろんなキャラクターを演じたりしてる特殊な仕事だっていうのも関係してるのかもわかんないですけど。『なんなの?』っていう感じで、よくわかんない。そこがたぶん魅力だと思うんですけどね」
阿部「いいんですよ、べつに。あんまり、どういう人かって考えてないでしょ」
皆川「なんかそういうのってよくないよね。あの人はこういう人だとかさ。そういうもんじゃないですよねえ。そんなことないですか?」
宮藤&阿部「(笑)」
皆川「これ、映画と一緒ですよね。いろんなこう、複雑なところがあるんだよね、人間っていうのは」
宮藤「『人間は複雑だ』って、インタビューのあたまに戻ってんじゃん、それだと」
皆川「そうそうそう。もう一回こう……記事が読める、みたいな。ループでね?」
一同「(爆笑)」
——(笑)すばらしい。ありがとうございました。



『なくもんか』
11月14日公開、東宝配給
©2009「なくもんか」制作委員会.


『パーマネント野ばら』



西原理恵子の傑作漫画が菅野美穂主演で映画化。
高知県は宿毛市からお届けする
撮影現場レポート！

撮影＝鳥巣佑有子（Ａｎｇｌｅ） テキスト＝上田智子






御婚礼 衣裳着付
パーマネント
野ばら
ビューティサロン
パーマ
着付&カット
野ばら
パーマ











池脇千鶴（ともちゃん）

「不幸のオーラは漂わせたいと思ってます（笑）」

――台本を最初に読んだときってどんなふうに感じられましたか？

「元々漫画を読んでいたので、ちょっと変わったなっていうふうに思いましたね。映画として受け入れられやすいというか、立体的にするにあたってすっきりした印象でした」

――西原理恵子さんの作品がお好きだったりするんですか？

「はい。好きで結構持ってますね」

――中でも『パーマネント野ばら』は本当に女の子ならではの世界ですよね。原作の漫画にはどんな印象を持っていましたか？

「閉ざされた田舎で、女たちが悲しくも明るく生きていく、その女の性（さが）と逞しさを見せつけられるような。西原さんの絵とか話が好きなので、たぶん女の感じ方なんでしょうけれども、素直に感動しましたね。たとえば、みっちゃんの『今まで世間さんの、注文してきた女やってきたんやから好きにさしてもらう』みたいな言葉があって、そういうのにグッときました。彼女たちは好き勝手やってるんだけど、必死で生きてますよね。食べる為、お金を稼ぐ為、あたりまえのことをサボらずに現実に生きていて、そういう姿がやっぱりいいと思いました」

――池脇さんは女性の生命力の強さを体現できるのが素晴らしい役者さんだなと思うんですが、今回はすごく運が悪くて、男運も悪くてという女の子ですね。どんなところをフックにして演じているんですか？

「（自分と役が）遠からずっていうところがあるので、きっと本から私が受けた印象のまま生きれば大丈夫なんじゃないかなと思ってますね。なおことみっちゃんがいて、そこにポッとイモ姉ちゃんの私がいるだけでたぶん大丈夫じゃないかなっていう心づもりではいます。あとは不幸のオーラは漂わせたいとは思っていて（笑）。そういうのってちょっと沈んでしまえば出てしまうと思うんですよ。なので、あんまり幸せを知らない、なんにも気付いてない子としていればいいかなって。人間として世の中のいろんな部分に気付けてる人ってもっとハッピーな生き方ができているものなので、なんにも気付いてない子なんだろうなっていうのが伝わればいいかなと思います」

――どういう映画になりそうですか？

「漫画版ではない映画版の『パーマネント野ばら』ですね。映画館に行って予告が流れた時に、なんかちょっと切なくて今観たいなっていろんな人が惹きつけられちゃうような。あいまいな映画ではあって欲しいんですね。何がテーマで何が答えでっていうはっきりしたものじゃないから。そういうふうに思わせて、いろんな女の子が観てくれたらいいなと思います」 H



パーマネント野ばら



小池栄子（みっちゃん）
「みっちゃんみたいに一生懸命生きてる子って好きなんです」

──今日の衣装やメイクもすごく似合っていますが、小池さんは本当に原作のみっちゃんと違和感がないですよね。

「ありがとうございます。私としてはパンツ見せたかったんです。原作で一番好きなシーンが、離婚パーティでみっちゃんのスカートからパンツが見えるシーンだったので。だから常に見せパンをはいてるんです（笑）」

──小池さんがみっちゃんっていうキャラクターに初めて出会ったのは、台本と漫画どっちが先だったんですか？

「漫画ですね。この作品が映画化されるって聞いて。でも、この中だったら絶対にみっちゃんを演じたいって思えたんです。なんか一生懸命生きてる子って好きなんですよ。常に泣いてわめいて思いっきり笑ってって、その日その日を一生懸命生きてる子ってすごく魅力的だから。みっちゃんはまさにそういう子だったから、演じられることになって嬉しかったですね」

──実際に演じてみていかがですか？

「純粋で真っ直ぐな役をオファーしていただくことが多いんですけど、今回のみっちゃんもそういう部分がすごくわかりやすかったので、すんなり役に入れました。監督の演技要求については、自分なりにじっくり考えて演じていますが、常に、漫画ほど大げさではなく、もっと日常のテンションの芝居でいいよって言われます。変にアニメくさくならないように注意してます」

──みっちゃんという役は演じていて楽しいですか？

「やっぱり自分が好きだなと思える役は楽しいですね。一言一言のセリフが大事だし、美しいかわいいセリフもたくさんあるし。充実していて本当に楽しいです」

──『パーマネント野ばら』って原作にもファンがとても多い作品ですけど、どういう映画になると思われますか？

「映画館を出た帰り道に、友だち同士で『あのセリフってなんだったんだろうね』とか『あのシーンいいよね』とか一緒に考えられるような作品だと思います」

──なるほど。

「現場でワンシーンワンシーン、すごく〝ものづくり〟してる感覚があるんです。原作者の西原さんや原作のファンの人がガッカリしないように、キャスト、スタッフが思いを込めて、一生懸命いいものを作ろうっていう雰囲気があって。観ないと損だなって思うような、その年の歴史に残るような作品になると思います！」

漁村に1軒だけある美容院「パーマネント野ばら」で繰り広げられるのは、ギッチギチのパンチパーマをあてにくる女たちの恋のよもやま話。「女のザンゲ室」に集う女たちの生き様と、小さい娘を連れて実家の「野ばら」に出戻ってきたなおこの恋が描かれる『パーマネント野ばら』(2010年5月公開)は、西原理恵子の漫画が原作の切ない大人の恋物語です。

高知県の宿毛市の撮影現場にお邪魔したのですが、そこには丸い山と昔ながらの漁港という、原作そのまんまの風景がありました。どこか寂しげで昔の恋人との逢瀬を重ねているなおこ(菅野美穂)、なおこの同級生であるフィリピンパブのママみっちゃん(小池栄子)、男運が悪すぎるなおちゃん(池脇千鶴)もリアルに人間くさくてハッとさせられました。監督は、『腑抜けども、悲しみの愛を見せろ』『クヒオ大佐』の吉田大八。西原理恵子デビュー25周年となる今年は『毎日かあさん』がアニメ化、『いけちゃんとぼく』『女の子ものがたり』が映画化されましたが、『パーマネント野ばら』はもっとも西原テイスト——シビアで毒っけがあるんだけど、優しさが深い——の色濃い作品になりそう。女性なら誰もが共感してしまうピュアな気持ちや女のぶっちゃけ話がどう描かれるのか楽しみに待ちましょう。

——最初に漫画を読んでいたので、映画版のなおこが菅野さんって聞いたときに、「えっ、綺麗過ぎるじゃん」って思ったんですよ。だけど現場に来て見てみたらすごい〝なおこ〟になっていらして驚きました。

「ありがとうございます」

——一番最初って台本を読まれましたか? 漫画を読まれましたか?

「西原さんのこの漫画が映画になるんですよって聞いて読ませていただきました。最初になおこ役って言われた時は、みっちゃんとかおばちゃんたちの役のほうが楽しそうだなと思ったんですけど(笑)、なおこの頼りなげな感じとかは、何か演じるっていうよりも我慢する演技だから、事務所の人にも『この役は我慢の役ですよ菅野さん』って言われて(笑)。小池さんとか夏木(マリ)さんとか、お名前を聞いただけで『ピッタリだな!』って、皆さんが生き生きと動いてる様子が想像できる方たちのキャスティングだったので、『菅野は我慢だよ』みたいな感じで。そういうテーマをもって、映画でひと月丸々演技をするっていうのも久しぶりだったので、実際に我慢でした(笑)」

——『さくらん』もありましたけど、主演映画としては『Dolls』以来ですよね?

「そうなんですよね。私も新聞で『8年振りか!』と思ってビックリしたんですけど(笑)」

——それにしてもこの宿毛は遠いですよね。高知市からも2、3時間かかる場所でお芝居だけを考えるっていうのは、どんな体験ですか?

「合宿みたいな感じで、夏木さんや小池さんと一緒に、撮影が早く終わった日にはごはんに行ったりとかしてますね。東京だとなかなかそういうことが難しかったりするので、共演者の方たちと一緒の宿に泊まったり、なんか親密な感じですよね」

——なおこの周りの人たちはワーッとはっちゃけて発散させる芝居ですけど、なおこの場合は全部受けの芝居じゃないですか。その中で彼女が思っていることを微妙な表情で出したりっていう難しい芝居になると思うんですけど、この役をどういうふうに掴んでいったんですか?

「原作の漫画という共通言語のようなものがあっても、監督と自分とでこれだけ捉え方が違うんだっていうのがありましたね。でも今回は、すべてをわかって道順が整理された中でこういうふうに出していこうっていう演技ではなくて、どうなんだろうとか、逆に言うなら整理されてない状態の中で本番をやっているというか。だけど自分の中での感覚って当てにならない部分も大きいので、本当は整理ができて本番に臨むっていうのが安心なのでいいんですけど、なんかモヤモヤしたまま『本番!』ってなったりするのも今までと違っていいのかなとか思ってます。そのゆらぎがなおこ自身のキャラクターにも通じると思うので、すごく新鮮な体験になっています」

——じゃあ結構ジレンマみたいなものもあるんですか?

「そうですね。でも夏木さんや小池さんや共演者の皆さんに助けられてます。『パーマネント野ばら』って〝女のザンゲ室〟って書いてありますけど、今だとネイルサロンとか美容室とか女の人よく行くじゃないですか。美容室って話すことによってセラピーみたいになってるところがあるんじゃないかと思うんですね。だから共演者の方たちとしゃべったりすることも、なんかそこに繋がっているのかなと思ったりしていて。女同士で喋ってるとそこにセラピーがあったり、親以外の人からの説教のようなものを『ああそうか』って自然に吸収できたりっていうことがありますよね。美容室ってそういうところがある気がしますよね」

——なんか男性とはまた違って、女



菅野美穂(なおこ)

「西原さんのすごいところは、悲しいからこそ同じぐらいの強さで笑いにいくっていうところですよね」



パーマネント野ばら

ならではのところがありますよね。そういうとこがちゃんとリンクしてるっていうのとか。

「うん、リンクしてるなと思いながらやってますね。パンチパーマの話もあるんですが、すごく悲しいお話で。漁港の女の人は漁師さんと結婚すると、マグロ漁とかだと夫がしばらく帰ってこないんですよね。赤ちゃんを産んでも、夫は帰ってきたら他の女の人のところに行っちゃったりとかして。それで離婚して貧しくなってまた同じこと繰り返して、っていう中で、愚痴を吐きに美容室に行くんですよね。でも貧しくて頻繁に美容室に通えないから『やぎのくそくらい硬うにあてて欲しい』って。お金がなくてそんなにたくさん来られないから持ちをよくしてくれっていう悲しいお話だったみたいで」

――そういうのってほんと女ならではというか。この作品には女の人の愛しい部分がすごくいっぱい出てますよね。

「本当にそうですよね。西原さんのすごいところは、悲しいところに、悲しいからこそ同じぐらいの強さで笑いにいくっていうところですよね。逞しさ、健やかな感じの力強さっていうか生命力みたいな。やっぱ宿毛に来て思います、なんかみんな躊躇がないんです」

――女性がですか?

「なんかこう突進してくる感じで(笑)。そういった意味も含めて西原ワールドという感じです」

――西原さんの世界はお好きですか?

「そうですね。そこに生まれ育ったら大変なこともあるだろうなとは思うんですけど、作品を読ませていただいてると、わかるわかるっていうことがすごくあるし、そこでホロリとさせるところがあるじゃないですか。他にはないリズム感がありますよね」

――泣かせて笑わせる、毒吐いて泣かせるみたいな。

「うん。それを実際に西原さんが生きてきたんだと思うと疲れただろうなって想像しちゃうけど、だからこそ作品から元気をもらえますよね」

――中でも『パーマネント野ばら』はすごくファンが多い原作ですけど、この作品の魅力はどんなところにあると思いますか?

「いろいろ作品を読ませていただいたんですけど、『パーマネント野ばら』の魅力って西原さん自身の魅力って感じがしますね。豪胆さの中の切なさっていうのが西原さんの特徴なのかなって思うんですけど、『パーマネント野ばら』は、もうど真ん中みたいな感じですよね」

――女の人の汚い部分だったり可愛い部分だったりがいっぱいつまっているから、男目線と女目線とで受け取り方が違うと思うんですけど、菅野さんから見たなおこというキャラクターの可愛い部分だったり愛しい部分はどんなところだと思いますか?

「なおこの佇まいって、頼りなげで男の人が支えてあげなきゃみたいな感じがするんだと思うんですけど、じつは結構毒吐いてるし、子供に対してはよき母であるんですけど、たぶんでもそれは(自分の母親である)まさこ(夏木マリ)の背中を見てるから、自分もそうならなきゃってがんばってる部分でもある気がして。女の人って本当は毒も持ってるし、やんちゃだし、ケッて思ってるところいっぱいあるんですよね(笑)。それをまわりの人たちは、お酒を飲んでガハハってやってるんだろうけど、なおこはそれを自分なりに受け入れてみようとしているというか。一回(街の)外に出ていった人間だからこそ持てる、違う視線があるんだなと思ったりします」

――では、なおことしてスクッと画面の前に立つ為に、気をつけてることって何かありますか?

「今回はテクニックじゃないんだなと思っていて。自分の何かを役に注ぐんじゃなくて、やりたいことをあきらめるというか、やりたいことを忘れるというか、削ぎ落としていくことが今回の役作りなんだなと思ってるんです。いつもは付け足していくイメージなんですけども」

――強いキャラクターの役も多いですしね。

「なにかやるとか、準備するとかそういうことじゃなくて、逆に言うならその不安に耐えるのが今回の役作りなのかもしれないなとも思うんですよね」

――最近のドラマとは全然違う役作りということで、新鮮な体験ではあったりしますか?

「そうですね。"受ける"とか"聞いてる"とかが多いですからね。どちらかというといつもは、演技をする上で仕掛けていくほうが多くて、ただそこにいて(まわりから)"もらう"役は少ないのですごく新鮮。でもなおこは、"見てる"みたいな感じかな」

――どんな映画になりそうでしょう?

「原作の力を借りて、笑いの部分も『監督そこ狙うんだ』みたいなところがあったりとか、あと監督が男性なので男の人の目線も入りつつ……でもまだわかんないです(笑)。わりとパンチが効いた仕上がりになると思いますけど(笑)」

SPEEDSTAR RECORDS

Noa Nowa

のあのわ

2nd Single

「Sweet Sweet」 2009.11.18 (Wed)

―つないだ手が　少しだけ期待してる―

友達でも恋人でもない　名前のない二人の恋のうた

自分の気持ちを伝えられず、相手の気持ちも確かめられず、あいまいな関係だけれど、
そんな時間でも大事に思っていたはずなのに、いつしかそれだけでは満足出来なくなって――。
そんな経験した憶えはありませんか？
甘く、切なく、心に響くスウィートソングが、人肌恋しくなる冬の季節に遂にベールを脱ぐ！



VICL-36551 ¥1,000 (tax in)



M-1. Sweet Sweet（日本テレビ系「音楽戦士 MUSIC FIGHTER」POWER PLAY）　M-2. 繋ぎ、踊る　M-3. Heavenly（全3曲）

初のワンマンライブツアー♪「のあのわ SPECTACLE tour 09～わぁ！わぁ！わぁ！ドリーミーなやつらがやって来た！」

11/25（水）梅田シャングリラ
OPEN/19:00 START/19:30（キョードーチケットセンター：06-7732-8888）

11/26（木）名古屋アポロシアター
OPEN/19:00 START/19:30（SUNDAY FOLK PROMOTION 052-320-9100）

12/4（金）福岡 ROOMS
OPEN/18:30 START/19:00（BEA 092-712-4221）

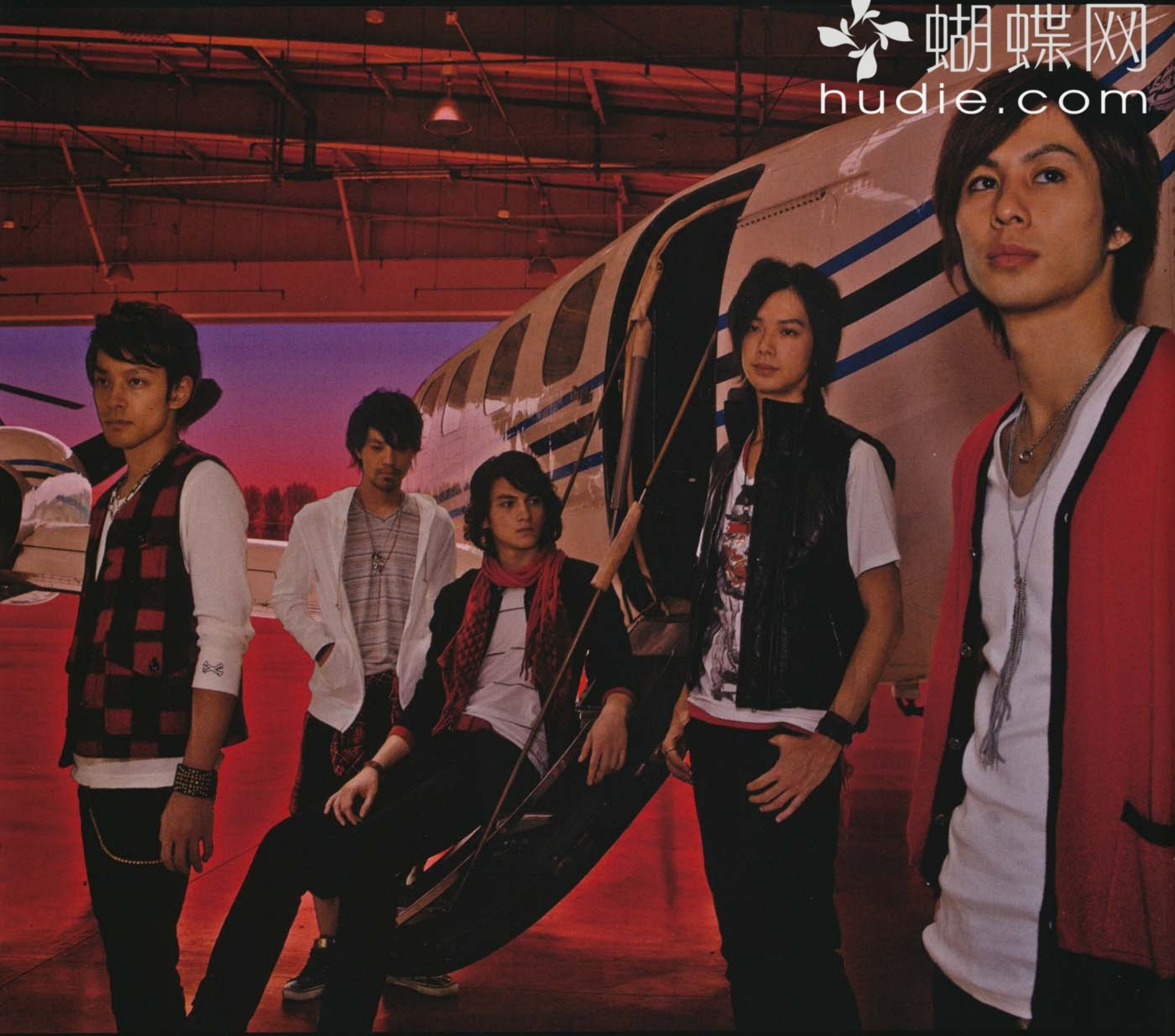
12/18（金）Shibuya duo MUSIC EXCHANGE
OPEN/19:00 START/19:30（HOT STUFF 03-5720-9999（平日 16:00～19:00））

◎チケット：前売り¥3,000（tax-in/drink 別）/ 当日券 ¥3,500（tax-in /drink 別）

着うた® 各サイトにて絶賛配信中♪

着うた® は、au、NTTドコモ、SoftBankの対応機種のみのサービスです。
着うた® は、株式会社ソニー・ミュージックエンタテインメントの登録商標です。

のあのわ OFFICIAL HP　http://noanowa.jp
SPEEDSTAR RECORDS HP　http://speedstarrecords.com/



Hi Lockation Markets

1st CD Single アカツキ
2009.11.4 ON SALE

track 1. アカツキ / track 2. Dive
初回特典：ハイロケ特製トレーディングカード封入！（全6種類のうち1枚をランダムに封入）
WPCL-10736 1,000円（税込）



http://wmg.jp/hlm/ (PC・携帯共通)

↓着うた® 着うたフル® はこちらへ

NOW ON SALE



MINI ALBUM
REAL
WPCL-10634
1,800円（税込）



DVD
HOP
WPBL-90117
1,300円（税込）

音楽チャンネル
MUSIC ON! TVにて、
12月より
レギュラー番組スタート!!
詳しくは、www.m-on.jp
※携帯端末からもご覧いただけます

WARNER MUSIC JAPAN

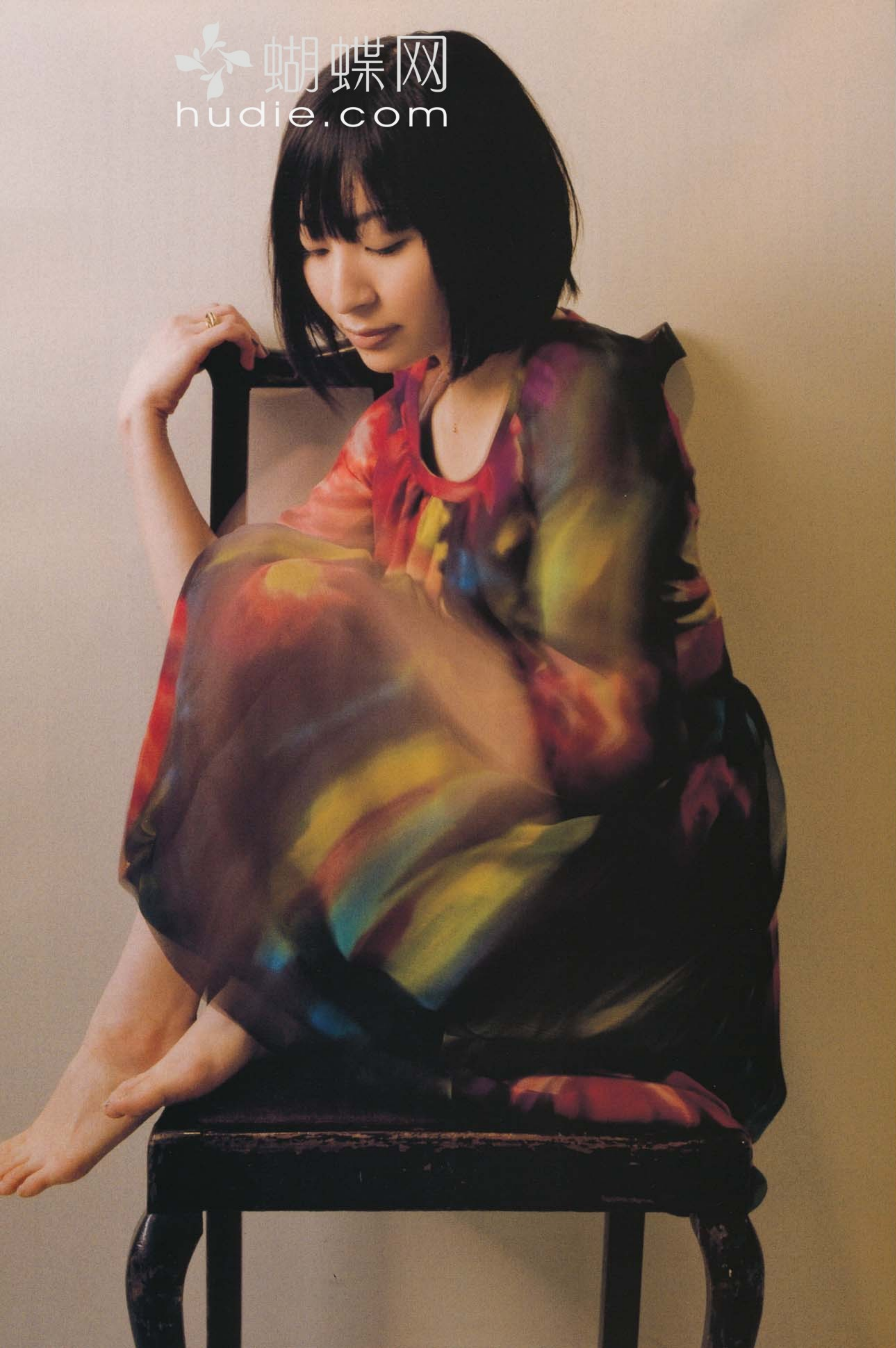


坂本真綾



撮影＝澁谷征司［supersonic］
スタイリング＝岩渕真希
ヘア＆メイク＝木村ゆかこ［addmixB.C］
テキスト＝小柳大輔





坂本真綾の2009年。この1年間は、彼女のキャリアにおいて、実に印象深い年として残っていくのではないでしょうか。1月には、自身も「シンガーとしての集大成」と語るアルバム『かぜよみ』をリリースし、そのままの勢いで初のホールツアーを敢行。夏には、声優として参加した『ヱヴァンゲリヲン新劇場版：破』が記録的なロングヒットで日本中の劇場を席巻。そして、このたび届いた、1月のアルバム以来の音源となる最新シングル『マジックナンバー』。これがまた、今というタイミングでリリースされることに大いなる必然を感じる、重要な楽曲なのです。

この楽曲において特筆すべきはまず、彼女にとって、珍しいほどに弾けるようなテンションを持ったポップソングであるということ。そして、そんな楽曲が、来年に控えた歌手デビュー15周年というアニバーサリーの直前に発表されるということ。『マジックナンバー』には、長きにわたってシンガーとして生きてきた自分のキャリアを大きな視点で見つめ直し、そこからまた新たな一歩を踏み出そうとするかのような、ピュアでポジティヴな、彼女の現在地を見ることができるはずです。

なぜ今、坂本真綾は、「音楽」に、そして、「歌を歌う」ということに、ここまでまっすぐに向き合えているのでしょうか。そこには、大きなハードルを越えることができた自身初のホールツアーでの体験と、つかの間に訪れた「5週間の休息」が大切なきっかけとして記憶されているようです。

——まず、久々のニューシングルになるんですけども、それがテンションの高い、非常に抜けている楽曲になった経緯から訊いていきたいんですけども。

「『わたしはあそこに帰りたいんだなあ、まだ歌いたいんだなあ』って再認識しました」

来年シンガーデビュー15周年を迎える坂本真綾。新たなる物語の始まりを告げる、ハイテンションなニューシングル『マジックナンバー』に至るまでの紆余曲折を語る！

「そうですねぇ、割と落ち着いたシングルが続いたりしてたのもあって、次は元気な曲でっていうイメージは漠然とあったんですけど。そこにプラスして、今回、テーマ曲になっている作品（ＴＶアニメ『こばと。』）に求められているものもやっぱり元気で明るくて可愛い主題歌っていう大前提があったので、そういう雰囲気のものにしようという意味では早くからイメージしていて。わたし個人の気持ちで言うと、1月には、やっとここにたどり着くことができたと思えるような達成感のあるアルバムを出して、ライヴもツアーも無事に終わって、その後、実は5週間お休みもらって旅に行ったりしてたので（笑）、ちょっと気分が切り替わったところでもあって。もの作りに対してすごく貪欲な気持ちをあらためて感じていたので、勢いのある曲でスタートしたいなっていうのもありました」

——聴いてまず、「どうしたんだろう？」って思うぐらいのテンションに驚きまして、まさに「弾けてる」っていう言い方が近いようなものになっているんですけども。

「そうですねぇ（笑）。やっぱり大きかったのはツアーだったのかなと思いますね。それまでライヴに対して積極的ではない思いがあったんですけど、そのライヴが、お客さんとも自分自身とも腹を割って向き合えるような空間になって。そのおかげで、今ならいろんなものに対して恐れずに立ち向かえるっていう気持ちにもなれたし。あとは、この曲にもきっと縁があって出会ってるんだと思ったし、もしかしたら、大人だから大人らしく歌うとかそういうことではなくて、すごく無邪気に、本当にわたしが今したいことってなんだろうとか、自分の原動力になるエネルギーみたいなものをあらためて見つめて、歌うべきタイミングなのかなって思ったんですね。だからこそ、曲のなかでもそういうことが歌いたかったし。あとは、あまりいろんな概念にとらわれずに、とにかく明るくて元気でポップな曲をやってみようじゃないかっていう挑戦もあって（笑）。それを自分にフィットするところまで持っていくっていう作業がまた新しいものに挑んでる感じがあって、すごい楽しかったんですけどね」

——確かに、今このタイミングでこういったピュアな楽曲がリリースされるっていうのはすごく象徴的なことで。シンガーとしての坂本真綾が、新しい段階に入ったのかなっていう感じが強くしていて。

「そうですね。今回大きいなと思ったのは、表題曲もカップリングも全部、自分のなかではライヴを意識して作ったっていうことなんですよね。この間のツアーが終わって、こういう曲があったらもっとライヴで盛り上がるなあとか思うことがあったんですけど、今まではそういう作り方ってあまりしてこなかったし。ツアーが終わったその日の打ち上げから、もう次のライヴのことを考えてしまうくらいで、苦手意識っていうのは本当に払拭できたんだなあって思って。この感じを忘れないうちに早く次をやりたいっていう、また違う欲が出てきたんだと思うんですよね。だからやっぱり、ライヴで自分が歌うことを前提にいろんなことを考えられるようになったっていうのは、わたしにとってすごく大きな変化だと思います」

——インタビューでお会いするたびに、ライヴは苦手で、というお話を聞いてきたような気もしますし、ライヴのことを前向きに考えられるようになるっていうこと自体、数年前からするとなかなか考えられなかったことだと思うんですよね。

「そうですねぇ、ほんとにそう思います」

——ちょっと振り返ってもらうとすると、「思えばここまできたなぁ」っていう感覚なんですかね。

「（笑）ね？　ずいぶん時間かかったなあとも思いますけど、でもほんとに、こういうことってやっぱりタイミングがあるんだなあと思いますね。ほんとに大事なことは自分で気がつくものなんだなと。人に教わって、そのときは『そういうもんかなあ』ってわかったつもりでも、自分が納得して心底『こういうことか！』って思えるまでは、本当にわかったっていうことにはならなくて。今振り返れば、もっと若いときに、今わたしが気づいてるようなことを周りにいる人が伝えようとしてくれてたと思うんですよね。そのときのわたしにはまだそれを理解する力がなかったんだと思うんですよ。でも、今ならわかるっていうことがいっぱいあって。だから当時から周りの人はちゃんと見ててくれたし、わたしに大事なことを教えようとしてくれてたんだけど、それに、時間もかかってしまったんだけど、やっぱり自分が気づいたってことにはほんとに意味があると思うし。これまで続けてきて、ほんとによかったなあと思いましたよね」

——ライヴのことを考えてる時間が長いっていう話がありましたけど、それはつまり、真綾さんのなかでの

フラワードレス¥60,900／muller of yoshio kubo☎03-3794-4037、ネックレス／スタイリスト私物

歌うべき理由が増えていっている状況だと思うんですね。

「はい」

——で、15年っていうのは短くない時間だと思うんです。15年やっていれば、歌を歌う自分への慣れがどうしても出てくると思うんですね。そこに、15年目にして新たに歌う理由が生まれてくるっていうのは、やはり宿命めいているというか、「歌っていく人生なんだ」っていうことを再確認できるきっかけになっているんじゃないかなと思うんですが。

「それはありますね。ほんとにありがたいなあと思います。この間、ファンクラブのライヴツアーをやったんですけど、そのときにお客さんにアンケートをとらせてもらったら、デビュー曲から聴いてるっていう人の数がすごく多かったんですね。もちろん最近聴き始めてくれた方もいるんですけど、それ以上に、わたしと一緒に15年、年を取ってきた人が多くて、たとえば最初聴いたときは小中学生だった子が今は社会人になってたり、ともに大人になるまでの間をお互い見続けてきたっていう、そういうこともなかなかないことだと思うんですね。で、自分のなかの葛藤みたいなものだったり、もしくはもっと気楽なテイストのラブソングだったり、いろんな詞を書いてきたなかで、そういう感情を共有しているというか、すごく近い意識を持ってくれていた気がするんです。でも、一方で、わたしはわたしであくまで自分のために歌ってきたのであって、『誰かのために！』みたいなことって、ほとんど思うことなくやってきたんだと思うんです。それってすごくエゴだなあとも思うけど、でもやっぱりそれだけが、なんていうのかな、何にも惑わされずに、よくも悪くも自分の責任として考えられる唯一のことだとも思うんです。振り返ってみても、自分が歌いたいから、自分が書きたいから、もっと自分のことが知りたいから、これをやってるんだっていうところには、ブレがなかったなあって思うんですよね」

——なるほど。ツアーも含めてのこの1年間で、ご自分のこれまでと、これから目指すべき場所を明快に結ぶことができたっていう感じなのかもしれないですね。

「そうですねぇ、でも今回、5週間休みをもらったんですけど、お仕事を始めて以来、初めてそんな長く休んじゃって、自分がどうなるのかちょっと不安だったんですよ」

——へぇ。というのは？

「いや、もう燃え尽きちゃってるんじゃないかな、とか(笑)」

——(笑)なるほど。

「でも、忙しくやってきたなかで、やりたいこととやらなきゃいけないことの線引きがだんだん曖昧になってくる感じというか、『大人として事情を考えると』とかいろんなことを想像できるようになって、本当に自分がしたいことっていうのを何度も後回しにしてしまったりもしていて。そういうこともあって、わたしはもう一回、本当にわたしがしたいことだけに集中する5週間を過ごしたいと思って。触りたいと思うまでは、まったく楽器も触らないし、音楽も聴かないし、歌も全然歌わずに過ごしてたんです。でも、何週間目かに、ふと泊まった宿にピアノがあって。ちょっと弾かせてもらったら、『やっぱり好きなのかなあ』と思ったり、ふらっと観に行ったオペラでは、お客さんが入って、チューニングが始まったら、自分が舞台に立つときのことを思い出してゾワッとして、急に涙もろくなったりとか(笑)。そこで、『やっぱりわたしはあそこに帰りたいんだなあ、まだ歌いたいんだなあ』っていう気持ちが強いんだなあっていうことを再確認する旅に、結果的にはなって。そんな旅もあったので、ギアがまた新しいところに入った感じはしますね」



——その5週間っていうのはなきゃダメっていう感じだったんですか。

「そうですねえ、すごく充実した気分で、アルバムを作ってライヴをやってた反面、なんていうか、『自分はこうなりたい！』とか、『こうじゃなきゃ！』みたいな強い意識とか理想があって。そこに向かって頑張るのはいいんですけど、キャパシティ・オーバーかもしれないっていうこともあって。そういうときって勢いで乗り越えられちゃったりもするんですけど、自分が『こうしたい！』って思ってることと、実際の自分の身体がだんだん離れてきて、頑張りたいのに身体がついてこなくなる瞬間もあったりしたんです。とにかくワーッとアウトプットしてきたんで、何かまたインプットしたいっていう思いがあって。空っぽになったところに、また何か新しい刺激がほしかったし。ということで、休みに旅に行ったんですけど、結局自分の取材をして帰ってきたみたいな(笑)、いろんなものを見て聞いてきたけども、じゃあ次はどんなアルバムを作っていこうかっていうことに結局つながっていて。環境が変わってそこにいろんなものを取り入れて帰ってきたんだなっていう感じがありました」

——そういうお話を聞くと、なおさら意味を読みたくなる今回のシングルなんですけども。この15年が集約されたような、燃え尽きちゃうんじゃないかっていうようなアルバムとライヴがあって、で、インターバルがあって。そして、休息を経て出てきたのがこのシングルだったっていう。それが、キャリア史上でも屈指のテンションで弾ける楽曲だったというのはすごく象徴的な話だと思うんですけども。

「そうですねえ。今回の詞の世界観のオーダーっていうのが、元気でポジティヴで、明るい、可愛いっていうキーワードだったんですね。インターバルの間に考えたりしたことを新しいシングルでバーンとぶつけたかったんだけども、『ポジティヴって何だろう？』みたいなことで、まずつまずいて(笑)。でもそう思ったときに、やっぱり、いろんなことを思うプロセスが大事で、そのプロセスがあってこそ何かを達成したときに、『やっぱり全部間違ってなかったんだ、意味があったんだ』って思えるっていうのは経験上わたしにもあって。落ち込む時間を否定するんじゃなくて、それすらも引っくるめて、結局は進まないといけないわけだし、思えば、これまでもその繰り返しでここまできたんだなあってあらためて思って。今回は、ライヴとかアルバムを通して、確かに自分のなかでひとつやり遂げた感じがあったんです。でも、ひとつクリアしたからって全部オッケーっていうことにはならないし今後の活動とか人生のなかで、自分がこうやって得てきたものも忘れちゃうぐらいしんどいこともあるかもしれないじゃないですか。だから、自分がまた何かにぶつかったときでも、『わたしにはまだ何かあるはずだ』っていうことを自分で思い出せるように、そういう暗示というか合図を込めたかったというか。365日毎日元気じゃなくてもいいし、毎日頑張ってなくてもいいけど、でも頑張りたいときは、頑張れる自分も過去にはちゃんといたし、いつでも呼び出せるよっていうことを自分に覚えさせておくためのキーというか。そんな曲になったんじゃないかなと思います」


NICO Touches the Walls



PHOTOGRAPHS BY YASUYUKI KUROSE
STYLING BY DAISUKE ARAKI HAIR & MAKE UP BY KATSUNORI AOYAGI(esper.)
TEXT BY DAISUKE SHIMIZU



「音楽が鳴ってるのってライブハウスだけじゃないんですよね。
音楽が鳴るところであれば、僕らはどこでもシンクロしていきたい」
2007年のデビュー以来快進撃を続けるNICO Touches the WallsがH初登場！
ニューシングル“かけら”、続くアルバム『オーロラ』で踏み出す、
彼らの新たな一歩とは。

撮影＝黒瀬康之　スタイリング＝荒木大輔　ヘア&メイク＝青柳克典(esper.)　テキスト＝清水大輔

メジャー・デビューから約2年、驚異的な勢いで進化を続けてきた4ピースバンド、NICO Touches the Walls。アルバムやシングルをリリースするごとに支持を広げていった彼らの曲には常に、「もっと多くの人に聴いてもらいたい」という強い想いがあふれている。ロックのダイナミックさと、自分達の音楽を広く届けたい、という願いから生まれたポップさが同居するファーストアルバム『Who are you?』をはじめ、彼らのバンドとして揺るがないスタンスは、どの曲からも感じることができるのではないだろうか。

そんな彼らのニューシングル“かけら—総べての想いたちへ—”は、美しいメロディとストレートなエモーションが詰め込まれたバラード。今年に入って、アニメや映画の主題歌などいろいろな場面で聴くことができた曲たちと同じように、彼らが奏でる音楽の豊かな広がりを予感させる、新たな代表曲にもなりそうな一曲。“かけら”と、その直後に控えるセカンドアルバム『オーロラ』のリリースを前に、H初登場となる4人がその思いを語ってくれました。

——ニューシングルの“かけら—総べての想いたちへ—”では、バンドとして今まで以上に外向きになっていこうとしている印象を受けたんですが、いかがですか?

古村大介(G)「うん、外向き」

光村龍哉(Vo&G)「ずっと外向きですね」

対馬祥太郎(Dr)「そうですね」

古村「ミディアムテンポのバラードだからこその伝え方を考えれば、それが外向きになっていていてっていう感じですかね。外向きは意識したり、しなかったり(笑)」

坂倉心悟(B)「“かけら”みたいな曲だったり、いろんな曲が増えていくことで間口が広くなっていくのは楽しいですよね」

——それって同時に、聴く人にとってもすごく楽しいことですよね。

光村「そうですね。やっぱり次またシングルが出るってなって、『前と同じような曲じゃん』っていうことになると、僕がいちリスナーだとして音楽を聴くとしたらガッカリするっていうか。『今回全然毛色違うじゃん』とか、そっちのほうが喜びは絶対あるし。今年シングルの“ホログラム”とかで知ってくれた人たちが“かけら”を聴いてどう思うかなっていうのも知りたいし、それで、いいと思ってくれたら嬉しいですね。だから、思い入れはやっぱり強いですよ」

——なるほど。

光村「今までの曲と同じように気持ちを込めて作ってるんですけど、その気持ちの種類が違うのかなっていう。もう少しワイドにっていうか、包み込みたいっていうか。多くの人に、っていうのももちろんあるし、季節柄っていうのもあるし(笑)」

——(笑)。

光村「こういう曲だと、なんかね、うまく染まるかなっていう。街中とか、自然の中でもいいですけど」

——包み込みたいっていうモチベーションが生まれたのにはどんな背景があったんでしょう。

対馬「今までやってきた中でいろんな人に聴いてもらいたいっていう気持ちはずっとあったし、その上でいろんなことをやらないと満足できない自分たちもいるんですよね。でも決して内容を薄くしたくはないし、自分たちの本質を入れたいんですよ。ライブもそうですし、今までやってきた活動も全部踏まえて、自分が満足するだけでは満足できないようになってきたっていうのがひとつ大きくあると思うんですよね。ライブが一番わかりやすいんですけど、会場を包み込んだりしたときはお客さんと一緒に楽しくなってるというか一緒に渦巻いてる感覚というか。そういう感覚も大きな目で見れば、曲を作ってそれを世の中に出すっていうときとまったく一緒だったりするんですよね」

NICO Touches the Walls

——特に今回の新曲は間口が広いというか、より多くの人に聴いてもらいたい、っていうところを強く意識してるのかなと思ったんですが、いかがでしょう。

光村「もうずっと、どんな曲も同じようにみんなに聴いて欲しいって思いながら作ってきたんですけど、今回に関しては間口が広いというか、僕らとしてものびのび歌えた、演奏できた曲だったような気はしてますね。すごく性に合ってるというか、そういう曲だからこそいろいろ込めたい想いみたいなものも、今まで以上に詰めこむことができたのかな、と思う部分もありますね。僕ら自身も純粋に感情を込められるし、手段を選ばずに人に届けられるような気がしてますね」

——このタイミングでのびのびとやれる曲が作れて、それをリリースできるっていうことについてはどうですか?

光村「この曲の原案自体は今年の梅雨ぐらいに行った合宿でできたんですけど、そのときもわりと自然発生的な感じで。今年は“ビッグフット”“ホログラム”っていう結構ガツンとした感じのシングル曲が続いてたのもあったのかもしれないんですけど、ごく自然にバランスを取るような感じで、こういう曲ちょっと欲しいなみたいな、プッとできたときにね」

坂倉「そこはわりと共通した意識で」

——“かけら”のようなバラードって、もちろんファーストアルバムの中にもありつつ、シングルではロック寄りの曲を出されてきましたよね。今回のように「うた」としての存在感や強さを持った曲をシングルとして出せるっていうのは、バンドとしてのひとつの成長なのかなと思ったんですが。

光村「そうですね、出させてくれたって感じですよね」

全員「(笑)」

光村「いや、ほんとに、自信なかったわけではないんですけど、たとえば今までのシングルをテレビのコマーシャルなりCSのビデオで観た人が、ちょっといいなって思ったときに、今だったら気軽にライブに行けたりするわけですけど、ライブでは実はかなりミディアムな曲もやってたりして。そういうところでドキッとさせるみたいな、してやったり感みたいな感覚が僕らとしてもあって。そこに自信があることに変わりはないので、ほんとにこういう曲をシングルとして出せるタイミングとか、すべてに感謝の気持ちでいっぱいですね」

——“かけら”という一曲を聴くことで、『NICOってこういうバンドなんだ』ってわかってもらいたいというか、“かけら”がNICOの代表曲になっていくっていう意識もあったのかなと思ったんですが。

光村「そうなっていくと嬉しいですね。やっぱり、端から端まで、今まででのシングルの中でも結構自分たち

らしいなって思うところがほんとにいっぱいあるので。そうなってくれたらいいなっていう気持ちはありますね」

――〝かけら〟も含めて、幅広さをより見せていきたいっていうのは常に持たれてる意識なんですね。

光村「そうですね、今後も持っていくだろうし。持っていかないかもしれないけど(笑)」

坂倉「例えばライブハウスに来る人ってすごい限られてて、ドラマーが好きだとか、ギターがカッコいいとかっていうんじゃなくて曲単体としてすごい感動してくれる人なんですよね。そういうところにもちゃんと曲が届いていくっていうのは嬉しいですね。そうなりたいっていうか」

――逆に、皆さんにとって、曲がいろいろな人に届いているなって実感する瞬間っていうのはどんなときなんでしょう。

光村「実感ね、まあ……」

対馬「難しいね、なんか」

古村「なんだろうね」

光村「……このリアクションだとそんなに実感なさそうですね(笑)」

――(笑)。でも古村さんは考えてくださってるみたいですよ。

古村「アニメのタイアップをやった後に小学生からリアクションがあったりすると、実感したりはしますね」

対馬「出たー(笑)」

光村「Hって小学生も読んでるのかな?」

対馬「コアな、ね」

――でも、たまにいただいたりしますよ、12歳の読者の方からのハガキとか。

光村「たまに(笑)」

古村「ラジオのサテライトスタジオでやったときに小学生がいたりすると、あーって思ったりとか」

対馬「いたね～」

“かけら”がNICOの代表曲になってくれたらいいなっていう気持ちはありますね。

――それって、すごくいい話ですよね。広く届いていることを直接肌で感じられるっていう。

古村「そういうのは嬉しいですよね」

光村「ファンの人からの手紙とかメールとかで、今日お昼の校内放送で流しましたみたいなメールが来るんですけど、それが最近結構多くて。これは家の目の前にある小学校でNICOの曲が鳴る日も近いかなっていう、期待と予感みたいなものはありますね」

対馬「いいよね。学校帰りの子供が鼻歌で歌ってたりしたらドキッとしますよ俺は。オイーーって(笑)」

――ははは。

光村「結局、ライブはライブで大事ですけど、音楽が鳴ってるのってライブハウスだけじゃないんですよね。音楽が鳴るところであれば僕らとしてはどこでもちゃんとシンクロしていきたいんです。もちろん自分たちの音楽とシンクロしてカッコいいなと思うところだけというのはあるんですけど、そういうところも含めてちゃんと真価が発揮できる、バンドとしてきちんと音楽が残せるのであれば、ほんとにどんどん挑戦していきたいし」

――なるほど。歌詞の部分についてなんですが、〝かけら〟と〝Aurora(Prelude)〟は、ファーストアルバムのひとつの特徴でもあった、抽象的だったり攻撃的な歌詞と比べると、人との関係や思いに対してすごく踏み込んだ歌詞だなと思って。特に〝君〟っていう言葉の登場の仕方が印象に残ったんですけど、より明快なメッセージを届けたいっていう意識があったんでしょうか?

光村「そうですね……やっぱり、曲を作る上で何パーセントかはメッセンジャーでないといけないなって思う部分はもちろんありますね。すべてがメッセージでなくてもいいとは思うんですけど、気持ちの中で膨らんでくるものを言葉にしていく中で、捉えるテーマが大きくなってきてはいるかなと思います。今回の〝かけら〟の場合で言えば、自分がいて誰か相手がいてっていうところの話があって。その自分と君っていうのをもう少し大きなもの、自分と自分の中の、サブタイトルになっている〝想い〟であったりとか、それが何かに置き換えられても、すごく大きな意味を持つようなものを作りたいっていうことを思いながら作った曲ではあったんで。そういうことを考えると歌詞を書く上でのメッセージ性というか、気持ちは強くなってきましたね」

――その〝想い〟っていう部分はみなさんで共有されている感じなんでしょうか。

古村「最初からっていうよりも、作っていく中ですごく伝わってきて共有できるっていうか」

対馬「我々3人は歌詞の生い立ちはノータッチなんですけど、みっちゃんは曲と別々っていう考えで歌詞を作らないので、すごくその曲から受けるインパシー……ってなんだ、インパシーって(笑)」

全員「(笑)」

対馬「シンパシーをね、よりインな感じで(笑)。今までも面白い歌詞があったり、みっちゃんらしい歌詞があったり、すごくシンプルでストレートな歌詞があったりするのも、違和感は今まで一度も感じたことはなくて。曲の印象が歌詞が付くことによってより伝わりやすくなったかなと思うし、すごく『うんうん』ってなるものもあるし、自分が『うんうん』ってなれば、人も『うんうん』ってなるという。まあ、大ざっぱなんですけど、でもそれを実現させるのが演奏であり歌詞であるっていうことなんですよね」

――間もなくリリースされるニューアルバム『オーロラ』についてなんですが、ファーストアルバムの『Who are you?』はそれまでの集大成でもありつつ、おまえたちは誰なんだっていう自分達への問い掛けでもあったわけですよね。で、その次に来る『オーロラ』はドンッと一言で提示するタイトルになっているわけですけど、それって今までやってきたことへの自信の表れだったりするんでしょうか?

光村「そうですね、ファーストを出したからっていうところはすごくあると思います。ひとつ光とか夢についていろんな光の当て方をしたっていうことが今年達成できたことだと思うんですよね。それをきちんと世に披露して、その後ツアーもあったりして、そこで初めて自信が付けられるような気もするし。これは僕らにとっても実験というか、ひとつ挑戦だと思ってるんで、どう受け取ってもらえるかっていうのは楽しみな部分ではあるんですけど」

対馬「シングルのタイトルもちょうど〝かけら〟ですけど、アルバムも今出せるものをすべて出して、やりたいこととしてやったたっていうひとつのかけらでもあるんですよ。僕らの本質はいろんなことやりたがりだったりするんで、今回もアルバムで満足したら絶対次に行きたくなるんですよね」

――なるほど。

光村「それこそ……オーロラって空にあるものですけど、これが終わったら今度はものすごく地面について書くかもしれないし(笑)」

対馬「それを見てた人がいたみたいな話になるかもしれないっていう」

光村「やりたいことはまだ溢れるぐらいあるんですけど、今年はとにかくこの『オーロラ』っていうものに向かっていくっていうのがひとつのテーマだったんです」

対馬「それと、今アルバムを出すっていうところまでの過程を越えた先には、それまでやってきた自分たちの自信だったり労力だったりっていうものの割合が大きければ大きいほど次へのステップに上がるためにそれなりの高さが必要だと思うんですね。そういった意味では今までやってきたことも続けていくというのはあると思うんですよね。だからやっぱり満足するっていうことは、その先にさらなる高みがあるし、どんどんいこともいろいろあるし、どんどんどんどん、まあ何が高みかはわからないですけど、自分達も満足していけることをどんどんやっていきたいですね」

――高みに立つところを見せたい相手っていうところで、ライブを重ねてきた中で聴く人の顔が見えてきた

っていうのもあるんでしょうか。

光村「うーん、顔はやっぱり見えてきましたし、逆に見えないところでも音楽は鳴ってるっていうことをすごく意識はするようになりましたね。とにかくバンドとしては常に提案はしていきたいなって思うんですよ。ライブもそうだし出す曲もそうなんですけど、提案し続けないと聴く人は受け取るだけなので。でも、こう、音楽が好きで音楽をずっとやっていきたくてっていう、立ち返ると僕らの原点ってただそれでしかないんですよね。だからこそほんとに今何かを求められてるというか、どういう顔して欲しいかっていうことだけを僕らが提案する、それが一番大事なんじゃないかなと思ってやってますけどね」

――NICOというバンド自体がシーンの中で存在感を増しているわけですけど、その過程で何か変化とかは感じたりしてますか？

対馬「まあでも、バンドでやってるっていう責任感とか、そういうものはやっぱり変わってきてはいますけど」

光村「それもあるし、しかもこう、ちっちゃいことかもしれないんですけど、僕らってすごく近所に住んでて、千葉県の、ほんとに田舎にあるような高校からポンッと出てきたバンドで。ただの友達みたいなところから始まってるバンドが北は北海道から南は沖縄まで、作った音楽が届いていくっていうところにすごく醍醐味を感じてはいるんですよね。やっぱり、錦を飾るというところまではいかないにしても、『やってやりたい』っていう感じはありますよね。僕ら全然英才教育を受けてるわけでもなんでもなくて、すごくナチュラルに発生したものだから」



――では最後に、〝かけら〟と続くアルバムの『オーロラ』、それに今年発表した〝ビッグフット〟や〝ホログラム〟も含めて、NICOの第二章の幕開け、ターニングポイントになっていくのかなと思います。みなさんの中でこれらの曲やアルバムは今後どういうものとして残っていくと思いますか？

光村「うーん……深いですねえ」

坂倉「やってってすごく思うのが……なんていうのかな？ その、流行りではなくなっていく音楽ってあるじゃないですか？ 後々になって聴いていらなかったって思うようなものではあって欲しくないっていうのは思いますね」

――スタンダードを作っていきたいっていう。

坂倉「音楽の質として、後々になって聴いてもやっぱりいいなって思えるものを残しておきたいっていう、それは思いながらやってるところなんですよね」

光村「そうだね」

対馬「でもまあ、なんか、フラッと買い物に行ったりしたときに、横のおばさんが歌ってくれてたりしたらいいですよね。それが一番嬉しいし、その嬉しいって思える元になる僕らの音楽が素敵ならいいかなって思います」

古村「取材の記事とかを読みながら聴いてもらう中で、今回僕らが狙っていることと、聴く側のイメージとがお互いに繋がってくれるんじゃないかなと思うんですよ。それで、NICOのひとつが〝かけら〟とか『オーロラ』でできたっていうふうになっていけばいいなと思いますね」 H

（古村）ニット¥28,350/603（MIDWEST 03-5428-3171）、Tシャツ¥9,030/LAD MUSICIAN（LAD MUSICIAN DAIKANYAMA 03-5457-1005）、ネックレス¥16,275/Pledge（Pledge 03-5459-4600）
（坂倉）カーディガン¥24,150/FACTOTUM（FACTOTUM 03-5459-9779）　（対馬）カットソー¥11,025/THREE BLIND MICE（アメリカンラグ シー（プレスルーム）03-5469-7686）　他すべてスタイリスト私物





A Y U S E   K O Z U E

PHOTOGRAPHS BY FUMIKO SHIBATA (étrenne) TEXT BY DAISUKE KOYANAGI





「変わったきっかけ？　なんだかもの足りないなって（笑）」

作詞、作曲、アレンジまでを手掛ける、新世代ダンスミュージックの急先鋒、AYUSE KOZUE。セカンド・アルバム『Simply Good』に見る、「自分らしい年の取り方」と、「ピュアに音楽に向き合うこと」の不思議な関係。

撮影＝柴田文子（étrenne）　テキスト＝小栁大輔

AYUSE KOZUE

自ら作詞、作曲、アレンジ、さらにプロデュースまでを手掛けるシンガーソングライター、AYUSE KOZUE。そんな彼女が生み出す音楽は、広く言えば、R&Bやソウルを咀嚼したダンスミュージック。ただし、特筆すべきは、開放的で煌びやかな彩りを持ったそのサウンドの芯に、一貫してパーソナルな手触りがあることでしょう。ひとつひとつのビート、ひとつひとつの言葉。彼女の目と体を通して生まれてきた、そんなファクターが一体となって音楽を織り成すとき、そのトラックとメロディには、AYUSE KOZUE自身の日々の息遣いが詰まっているかのような、独特な体温が宿ります。そんなどこまでも身近なダンスミュージックこそが、AYUSE KOZUEの魅力。一見クールでスタイリッシュなトラックの奥から溢れる、そのリアルな言葉遣いとメッセージには、誰もがふと共感できてしまうはずです。

そして、ファーストアルバムから2年、このたびリリースされる『Simply Good』は、そんなパーソナルな感触をより深く突き詰めた決定的なアルバム。音楽を創造することへの無邪気な喜びが満ちていた前作に比べると、地に足の着いた印象のある本作。自身の内面をしっかりと見つめながら、思いを綴ることが出来るようになった彼女の姿を見ることができます。

その深化の鍵を探るべく、本作が生まれてきた経緯を聞きました。

――濃いアルバムを作ったなあという感じなんですけど。ようやく作れたっていう感じ？　意外とすんなり作れた感じだったんでしょうか。

「前回のアルバムから、2年ぐらいの間があるんですけど、去年からあった曲も含めつつ、最近テンポよく上がってきたものをチョイスして入れているっていう感じですかね。だから、コンセプトがどうこうっていうよりも生活のなかから出てきた曲を自然な流れのなかで選んで入れていったっていう感じですね」

――いい感じの力の入れ具合で作れたみたいですね。

「そうですねえ、それがよくも悪くも2年が経ってるっていうことかもしれないですね。例えば、新人のアーティストの方で、2年空いてますっていう人ってなかなかいないと思うんですよ」

――まあいないですよね(笑)。

「ねえ(笑)。どんどん出していくことにはもちろん意味はあるんですけど、凝縮したものをいい時期に出すっていうこともすごく意味があることだとわたしは思っていて。マイペースといえばマイペースなんですけど(笑)、無理なく年を取れたというか。たとえば、アルバムを通して、『あ、AYUSEいい年の取り方してんな』って思ってもらえたら成功かなみたいな(笑)」

――AYUSEさんの音楽って、基本的にはダンスミュージックになると思うんですね。ただ、極めてパーソナルな作り方をしていて、それゆえ個人の息遣いが伝わってくるような作品になっていて、そこが面白いんですけど。そういう意味で、今回は特に、AYUSEさんの生活観が素直に投影されている作品に仕上がっていると思ったんですけども。

「最近思うのが、それこそファーストを作ってた頃っていうのは、たとえばサウンド的に鳴りがカッコよかったり、言葉もメロディのはめ方も、極力単純にカッコいいと思えるところに比重があったんですけど、その頃から比べると、いい意味で力が抜けてるというか。いろんな場所において、メロディでも歌詞でもアレンジでも自由度が上がったなって思うんですよ。昔だったら、『あ、この言葉はカッコよくない。なし！』みたいなことがあったかもしれないけど、今は『これもいいんじゃない？』みたいな。勝手に自分で枠を決めて、そのなかで『ダンスミュージックだからこれはなしですね』ってやってっちゃったら、すごくもったいないような感じがしたんですね」

――なるほど。

「なので、並べてみるといろんなバリエーションがあるんですよ。でも、これを全部違う人が作っていて、それをわたしが歌ってるっていうことだったら、『支離滅裂じゃない？』っていう部分もあると思うんですけど、全部わたしから出てきてるものなので。J-POP寄りだろうがダンスミュージック寄りだろうが、わたしっていうところでひとつにつながってるんですよね。だから、全然恐れずにできたというか。その曲その曲によっていいものができればいいなっていうだけっていうか」

――ファーストアルバムもいろんなカテゴリーの曲が詰まっていながら、AYUSE KOZUEという名のもとに統一されているアルバムで。だから、AYUSEさんの場合、毎回、そういう意味でのコンセプトアルバムなんですけど。

「ははは。そうですよね」

――ただ今作を作るにあたって、OKの範囲が広がってるんじゃないかっていう。そんな感じがしますよね。

「それはあると思いますね。まあ、年を取ってまるくなったのかなあ(笑)。ファーストを久しぶりに聴いたときに、『あ、若っ！　キラキラ！』と思って。それはそれでもちろんよくて、その当時のわたしにできるベストのことをやっていて。ただ、今回で言うと、それにちょっと、なんだろう……薬味を入れたみたいな。みょうがとか、しょうがとか(笑)」

――ははは。

「そういうところで、ちょっとひねくれてる部分とかもあったりするのかなって思うんですね」

――ファーストアルバムは、長いスパンで発表された曲が収録されていたし、当時のAYUSEさんの赤裸々なドキュメンタリーみたいな作品なんじゃないかと思うんですよ。だから、あれを作れたことによって、自分ってどういうことができて、どういうことが好きで、今後どういうことをやろうとしているのかみたいな、自分の輪郭がはっきりしたんじゃないかなと思うんですよね。

「ああ、輪郭がはっきりした感じっていうのはあるかなあ。自分のエッジが立ってくるというか。だから、今回で言うと歌詞の部分だったりとか。すごく感じましたね」

――書きやすかった？

「そうなんですよ。縛られない自由感を感じながら書けましたね。なんて言うんですかね、若ければ若いほど、メッセージとか感情っていうものを、フィルターを通した状態で俯瞰的に見た上で出そうとしていたというか。たとえば、ラブソングのこのワンフレーズだけに込めるっていう、そういうやり方だったと思うんです。だけど、年を経て、今のタイミングになって、もちろん全部を出せばOKっていうことでもないんですけど、そのフィルターの穴がもうちょっと大きめになってきたというか。『わたし、こう思ってるんだよ』

っていう部分を出せるようになったのかなっていうのはありますね」
――ああ、なるほどね。
「前で言うと、わたしにたどり着くまでにフィルターが何枚もあったんですよね。やっぱり『こう見られたい』っていうイメージが先行してたんだと思うんですよ。こういう音楽をやってて、『カッコいいトラック作っちゃいます』『カッコいい詞乗せちゃいます』って見られたいっていう部分が先行してたんだろうなと(笑)。でも今で言うと、自分の内側から出てくる部分がより濃くなったんじゃないかなとは思うんですよね」
――そんなお話を聞いていると、『Simply Good』という、ある意味宣言的なタイトルにとても合点がいくんですけども。どうしてこのタイトルになったんですか?
「『Simply Good』っていう言葉は、前からなんとなくいいなあと思っていて。でも、まあ3枚目のアルバムぐらいにとっておこうかな、なんて勝手に考えていたんですけど(笑)」
――結果的に、繰り上げて使うことにしたと。逆に言えば、そのぐらいこの内容に自信があったっていう。
「そうですね。ほんとに手応えというか、自分で作りながら、これはいいなあと思いながらやれていたので。まあ、とにかく一度聴いてみてくださいみたいな。シンプルに聴いてみてくださいみたいな感じ(笑)」
――実際、素晴らしい作品なんですけども。作っていく過程で、「今、ちょっとすごい作品を作れちゃってるんじゃないか」みたいな手応えがあったんじゃないですか。
「あれ、いい感じじゃん?っていうのはありました(笑)。世に出してみて、そのあとの反応っていうのはもちろんわからないですけど、作り手としてはほんとにいいものを作れてるなとは思っていて。わたしのなかで大事なのは、ミュージシャンの方でも、リスナーの方でも、『あ、なんか悔しい!』って思ってもらえたら、『やった!』っていう感じで(笑)」
――なるほど。
「そこが満足できるかどうかのラインというか。自分自身も『[illegible]』って思いながらやれるような(笑)、アルバムではありましたけどね」
――フレーズ、言葉、そういうものをひねり出したというよりも、AYUSEさんのモードがオープンになっていて、すんなり出てきたっていう状態だったんでしょうね。
「ほんとそうですね。『う〜〜ん』って考えるよりも、なんかこう、フラットにしてたら、自然にキャッチできるというか。でも、キャッチしたいキャッチしたいってずっと思ってるっていうわけでもなく、わりとフラットにしてたら気付かないうちに入ってたっていう感じなんですよね。"バンビのしっぽ"っていう曲も、お風呂に入ってて、ふと『♪でもね〜しっぽが〜見えてるよ〜』って浮かんできて。『これ面白くね?』って(笑)」
――ははははは。
「なんだろうなあ……OKのラインが広がって自由になれるのと同時に、自分自身に対する許容範囲も広がってるっていうのかな。ストイックにやっていく時期もあるかもしれないし、広げ過ぎちゃって全部いいじゃんってなるときもあるかもしれないんですけど」
――そうですね。
「たぶん、今はそのバランスがちょうどいいときなんですよ。1枚目はこう、とにかく突き進んでたし、それがカッコいい部分だったのかもしれないし。その若さゆえのエネルギー感みたいなものがよかったりしたのかもしれなくて。で、今で言うと、それはそれとしてOKなんだけど、もっと自分が面白いと思えるものってなんだろうかって考えたときに、もうちょっと内面的なことだったりしたんだと思うんですよね。最初のときは最初のときで、(デビュー曲の)"boyfriend"のトラックを作ったとき、『ヤバい、あたしこんなカッコいいのできちゃった!』って思ってたわけだし、まあ、それがたぶん1枚目のよさだったんだとは思うんですけど」
――ただ、そこで重要なのは、アイデアのプレゼンテーションの仕方に変化が生まれてるっていうことで。1枚目のときは、「見て見て!」っていう、すごいキラキラした欲求だったと思うんですよ。で、今回も基本的なスタンスは同じですけど「こんなの作れたよ!」っていうほど、無邪気ではないじゃないですか。
「ああ、そうですね(笑)。無邪気ではないかもしれない」
――ただ無邪気なだけではいられなくなったんだとして、そこにはどんなきっかけがあったんでしょうか。
「きっかけですか? まあ、もの足りなくなったっていうことですかね(笑)。なんだろう……どんどんひねくれっ子になったのかな(笑)。ひねくれることに『くく』って思うようになったってことかもしれないですね。もうひとつ要素を加えることに楽しみを覚えるようになったというか。かといって、お客さんたちが好きなようにって考えながらやっていっても、それはやっぱり自分がなくなっちゃうし。そのバランスが、自分なりにですけど、うまい具合にできたなっていう感じですね」
――そういう変化に伴って、曲作りの方法も変わってきた?
「曲作りの方法に関しては、実は、昔と意識的に変えようと思ってたことがあって。前は、『よし曲を作ろう』って思ったら、まずパソコンの前に行ってたんですよ。そうするとなんとなくはできるんですよね。だけど、もの足りなくて。で、1年前ぐらいから、とにかくパソコンを開けないようにしようって思って(笑)。自分のなかで音のイメージが具体的になってから、パソコンに向かって落とし込むみたいな」
――なるほど。
「やっぱりパソコンって、ただのツールでしかないので」
――でも、なんでパソコンを触らないようにしようと思ったんですか?
「うーん、なんとなくやっちゃってるなって感じがしたんですよね。やっぱり慣れみたいなものもあったり。音楽を作り始めた頃って、1個トラックができるだけで『わ、すっげえカッコいいのできた!』みたいな感じがあったりもするじゃないですか。でも、時間が経てば、なんとなくのトラックができるようになっちゃうというか。そこに自分自身が感動しなくなる部分がどうしても出てくるというか。というところでちょっと、パソコンは眠っててくださいっていう(笑)。それと、最近ヤだなっていうのが、それなりにそのへんの言葉を借りてきて、そのまま埋めるっていうことで。せっかく言葉を発する機会があるのに、もったいないなと思うし。なので、『わたしはこう思ってるんですよ』っていうところをもっと色濃く出したいなって、今回は、そういうところから始まってると思うんですよ。言葉をつなげて埋めれば、曲ってできちゃうもんだと思いますけど、残るものを作らせてもらってるんだから、そういうところでやっちゃダメだよなあっていうことはずっと思ってたんですよね」





のあのわ



PHOTOGRAPHS BY CHIYO NISHIDA
STYLING BY FUSAE TACHIBANA HAIR & MAKE UP BY MIKI AIZAWA
TEXT BY DAISUKE KOYANAGI

今年デビューを果たした新人アーティストのなかでも、個人的に特に注目していたバンド、のあのわ。バンドという形態の可能性を試すかのようなドリーミーでオーケストラのようなサウンド、チェロを弾きながら歌うというユニークなスタイル。日本のロックシーンにおいて特異に映る、そんな立ち位置がまず面白いのあのわだが、このバンドのポテンシャルの高さを何よりも強く感じるのは、あらゆる楽曲を等しく普遍的な楽曲として完成させてみせる、その確かなポップセンスだ。織り成すサウンドスケープが大規模になればなるほどにメロディのよさが浮き彫りになってくるのはそういうことだろうし、そんな高いアビリティこそが、このバンドの寓話的な世界観を成り立たせている。

そして、このたび届いたニューシングル『Sweet Sweet』は、そんなのあのわのポップ性を象徴するような楽曲。これは、これまで玄人ごのみのする職人集団というイメージで語られることの多かった彼らのステージを、より大きく開け放たれた地平へと押し上げるであろう決定的なポップソングだ。といっても、実はデビュー前から温めていた楽曲だったようだし、この楽曲が持っている魔力と普遍性も当然知っていながら温存していたようだし、ともかくにも、このバンドが一筋縄ではいかない音楽集団であることに間違いはない。

今回は、この風変わりな楽団の創始者、Yukko(Vo&Cello)と作曲を手掛ける割合の高いゴウ(G)、それに、〝Sweet Sweet〟を作曲した本間シュンタ(Dr)の3人に集ってもらった。まずは、バンドの成り立ちからどうぞ。

「(のあのわの世界が)王国だとしたら、そこにみんなで遊びに来てもらいたい」
チェロの響きが彩る、ドリーミーなサウンドスケープ。
独自の空想的ポップスでシーンに風穴をあける注目のニューカマー、
のあのわ、H初登場!

撮影=西田知世　スタイリング=相澤樹　ヘア&メイク=橘房図　テキスト=小柳大輔

――寓話的な世界がありつつ、でもどの楽曲もメロディは非常にポップで気持ちいいという、とても面白い音楽性を持ったバンドなんですけども。どういう経緯があって今のような音楽性になっていったのか、そのざっくりとした成り立ちをまず聞きたいんですけども。

Yukko「もともとゴウちゃんとわたしで始めた頃は、普通のギターロックをやってたんですけど。メンバーが集まるごとに、そのとき自分たちの中で流行ってる音楽も変わるし、そうすると、やる音もどんどん変わっていったんですね。最終的には、メンバーそれぞれのなかでいろいろ考えて作ってみたりしながら、あったかくてみんながハッピーになれる音楽っていうところで、今の音楽になりました」

――5人のメンバーの一番グッとくる琴線の共通点みたいなものを探した結果、こうなっていったっていう感じだったんですか?

ゴウ「そうですねえ、なんかまあ、明確にこういうきっかけがあったっていうことはなかったんですけど、ただ、ライヴハウスに出てるときも、そのなかで特別な存在になりたいっていう願望はずうっとあって。根本的なスタイルを早く確立したいなっていうのはあったんですよね。それはずっと探していて。でも〝ゆめの在りか〟っていう曲ができたときに、なんか見えた気がするなあっていう感じがあったんだよね」

Yukko「うん」

――おふたりよりも後に加入された本間さんはある意味バンドを俯瞰できる立場だったと思うんですけども。のあのわというバンドを、どういう目で見てらっしゃったんですか。

本間「ヒネくれた人たちだなあって(笑)。自分もヒネくれ者だと思ってたんだけど、でももっとヒネくれた人たちがいたと思って(笑)。好きで作った感じのするものこそ音楽だって思ってたんですけど、明確にこういう音楽をしたいから作るっていう、落としどころを見つけながら音楽を作っていくバンドに入ったのは初めてで。だからすごく面白いバンドだと思いましたけどね」

――まず、その面白さの根源として、バンドにとってチェロっていうのは大変珍しい楽器ですよね。これは、どういうふうに必要になっていったんでしょう?

Yukko「必要……(笑)」

――(笑)実は必要じゃなかった?

Yukko「(笑)うーん、ただ単に、弾きながら歌いたかったからなんですよね」

――まあ、それは必要だったたっていうことだと思いますけどね(笑)。

ゴウ「まあ、突然チェロをやりたいって言い出したときは反対もしたんですよ、『ややこしくなるからやめてくれ』って。でも、彼女の感覚みたいなものは信じられるんで、そこは任せてみようかなあと思って。いや、大成功だよねえ?」

Yukko「(笑)たぶん普通の人たちだったら『やめてくれ』って言われて、それで終わる話だと思うんです(笑)」

――そうだと思いますね。

Yukko「でものあのわのメンバーは、『ここでこうチェロ入れたら面白いんじゃん? どうやって使っていこうか』って、面白がっていろいろ考えてくれたんですよ。そうやって考えた結果が、今ちゃんと、チェロも必要だっていうことになってるんじゃないかっていう気はちょっとします」

――なるほど。では、今回発表される新しいシングルの話をしたいんですけども。これがまた素晴らしい楽曲で。この曲は、ヒネくれ者が集まって音楽をやってきたのあのわのポップな一面がすごく明快に出た重要な作品だと思うんですね。ストレートなポップソングだし、何よりもストレートなラブソングであるという。なぜ今、これを出せるようになったのか――つまり、デビュー当時に、これは出せなかったでしょうっていうことがまずあります。

本間「ああ～、そうですね」

――というわけで、新しいシングルがこの曲に決まっていった経緯をお聞きしたいんですけども。

Yukko「もともとのあのわの一年計画みたいなものがあって。この曲はデビュー前からずっとあったんですけど、どうしても冬に出したかったんですよね。ずっと前から『冬にはあの曲を、冬にはあの曲を』っていうふうに思ってたんです(笑)」

――感覚的な話をしちゃえば、みなさんのなかで、今、出すことがしっくりきたんだと思うんですよ。きっと、のあのわらしい発明めいたフォーマットについては、これまでの作品である程度プレゼンテーションできたっていう自信がついたんだと思うんですよね。だから今、このストレートなポップソングが出せるんだと思ったんですけど。

ゴウ「そうですね、確かに、のあのわはちゃんとポップスと向かい合いたかった。あんまりこうアングラに行かないで――そっちのほうがもしかしたら容易かったんだと思うんですけど、のあのわはもっと違うとこで勝負するんだっていうのはあったと思います、はい」

Yukko「確かに」

本間「マニアックなことをやってカッコいいバンドっていっぱいいますよね。だけどポップでカッコいいって思えるバンドっていうのはやっぱり少ないと思うし、そこのほうがやっぱり目指し甲斐があるなあと思っていて」

ゴウ「そうそうそうそう」

本間「で、いろんなことのタイミングが、たまたまとかももちろんあったにせよ、確かに今このタイミングでこの曲が出せるってことには自分たち的にもすごいしっくりくるものを感じていて。やっと報われたなというか、形になってよかったなあと思ってます」

――のあのわっていうバンドは、これまで「不思議な世界だよね」とか「掴みどころないよね」みたいなことを言われてきたと思うし、もちろんそこが面白かったわけですけども。だけど、この曲は、すごく意味のわかる曲じゃないですか。この両輪が、のあのわの肝になっているっていう自覚はどの程度あるんでしょう。これは、もしかすると、一貫して歌詞を書かれているYukkoさんの世界観が大きいのかもしれないと思うんだけど。

本間「そうですね、Yukkoちゃんに関しては、(本人は)抽象的じゃないつもりで言ってるのが、俺らには全然意味のわからないときもあったりするんですよ。だから、今回の曲は、もしかしたらたまたまそれがわかりやすいって思えただけかもしれないんですけど」

Yukko「たまたま文法が合ってただけかもしれない(笑)」

本間「かもしれない(笑)。だって、これは言われるまで全然わかんなかったんですけど、歌詞は全部、自分の身の回りに起こったことだとか、自分がほんとに感じてることしか書かないって言ってるんですよ、いつも。俺は、空想で作ってんのかなと思ってたんですけど。そういうわけではないんでしょ?」

Yukko「うん、そうなんですよ、実際思ったこととか、実体験を書いてるんですけど」

――それがときには「よくわかんない」って言われたりとか、「すごいよくわかる」って言われたりするわけですよね。その違いってご自分ではなんだと思いますか？



Yukko「そうですねえ、でもまあ、なにかで包んでフワフワのままにしておきたいのっていう気分のときも、ちゃんとわかってもらいたいのっていうときもあるし、もしくは、ただ単に文法が下手で意味がわからないことになってるっていうときもあるんだと思います。自分に起こったことがすごくヤなことだったら、それは夢の国に置いておきたいって思ってるときもあるし。〝Sweet〟は誰が読んでも、こういう思いをしたことがある人にはわかってもらいたかったし、その相手にもわかってもらいたいっていう思いで書いたんですよね。だから、わかりやすくなってるのかな」

――なるほど。でも、曖昧なままじゃなくて全部伝えたいっていう曲の割合が増えてきてるのかなあと思うし、この曲のリリースをきっかけとして、これから先、もしかしたらそういう曲がどんどん増えていくのかなあっていう手応えを感じてるんですけどね。

Yukko「そうですね、そうかもしれないです。もっとヤなところもちゃんと吐き出したいし、なんだろうな、ほわっとしてる部分だけじゃないところで共感し合えたらいいなあとかは思ったりしました」

――そこにはやっぱりなんらかのきっかけがあったと思うんですけど、おふたりから見て、これがそのタイミングだったんじゃないかなあっていう瞬間はありますか？

本間「ライヴが増えてきて、たぶんYukkoちゃんがストレートに自分自身を吐き出せたって思えているであろう曲のほうが、実際、お客さんに深く伝わってる感じがするっていうのはステージから見ててもわかったりするんですよね。ぼくはドラムなので一番後ろにいるんですけど、フロントにいればそれをそのまま受け取るわけじゃないですか。きっと、そこで感じることがあったんじゃないかなあと」

ゴウ「そうですねえ、うん、やっぱりライヴがデカいんじゃないかな。こういう音楽って、自分たちの王国みたいなものを作っていって、自分たちのなかで完結させたくなるというか、そういうこともできる音楽であるような気がしていて。でも、こういうものをやっぱりみんなで分かち合いたくなったし、王国だとしたら、そこにみんなで遊びに来てもらいたいと思ったから(笑)。それって、すごい幸せなことなんだなって気づいてきたんですよね。自分たちだけでやってるのも幸せなんですけど、他の人が幸せになるってすごい幸せなことなんだなあと思ったんですよねえ。そんな当たり前のことに気づいたというか。個人的には、そんな感じがしてます」

――Yukkoさんは、いかがですか。やっぱりライヴを通して掴んだものがあった？

Yukko「ありました、すごくあったし、すごく成長したと思います。最近頑張ろうと思ってるのは、プライドとか恥ずかしさとか、ステージに立つんだったら持っちゃいけないんだなあっていうことで。だけどなかなか捨て切れないんですけど、でも、そうしないと観てる人はきっと楽しめないし――っていうことを最近ライヴのたびに考えてます。ほんとにプライドがなくなればいいのになあって」

――そういう変化によって、やっぱりYukkoさんの書く歌詞が変わってきた、で、それと呼応するようにみんなが作る曲も変わってきた、そういう状態なのかなあという感じがしますよね。

本間「そうかもしれないですね。もちろんそれでつながれるバンドもいると思うんですよ。そういうふうにやっていけるバンドもあるだろうし、それはそれでいいと思うけど、でも、自分たちって実際、そういう人間性じゃないなっていう気づきもあったりして。性に合わないことを無理してカッコつけてやろうとしてるんだったら、それは違うんじゃないかなあと。もっと違う引き出し方があるだろうと思ってますけどね」

オーディション番組で激戦を勝ち抜いた新人バンド、HI LOCKATION MARKETS登場！
1st シングル"アカツキ"に見る、不安と迷い、
そしてそれを越えてたどり着いた未来への願いとは？



HI LOCKATION MARKETS

Text by ASAMI OJIMA

オーディション番組『イツザイ〜ITSUZAI〜』の“イケメンバンドオーディション”で集まった5人が結成した新人バンド、HI LOCKATION MARKETS。ゆえに、そんなトピック性ばかりが先行しがちな彼らだが、その音楽は確かなドライヴ感と力強い意志のこもったストレートなロックだ。そして今回、初のシングルCDとしてリリースされるのは、タイトルそのものに決意表明が込められた“アカツキ”という楽曲。この表題曲からは、バンドが身をもって経験してきた不安や迷いが素直に綴られていながらも、これまでに掲げてきたポジティヴなメッセージ性がより強度を増していることがみてとれる。「今」伝えるべき思いを胸に、前に進んでいく強さを身につけた彼らが見つめる未来とは。楽曲の作詞を担当した大城正志(Vo)、山本弓彦(B)に訊いた。

——配信限定シングルやミニアルバムを経て、今回初めてのシングルCDとしてリリースされる“アカツキ”はおふたりが作詞されていますね。

山本「もともと僕が書いた歌詞があったんです。で、時間が経って、シングルとして出せることが決まったときにそれを読み返してみたんですけど、その当時の僕の気持ちだったり、大城に歌わせたい言葉っていうのはやっぱり変わってないなあって思って。書いていたときに考えてたのは、やっぱりバンドをやり続けることってすごく難しいってことで。気持ちだけが前にいっちゃって、なかなかうまくいかなかったり……。でもそれをどうにかしたいっていう気持ちもすごく強くて」

大城「仮歌を入れるときに、歌詞をメンバーそれぞれが書いてきたんですよ。その中でも、弓彦が書いてきた歌詞が、一番僕っぽいなと思ったんですよね。客観的に見てくれているからこそ、図星だったというか。で、実際リリースが決まったときに、僕の言葉と組み合わせてみたんです」

——初のシングルCDというこのタイミングで“アカツキ”をリリースするっていうのは、何か決意表明みたいなものを感じるんですが。

山本「本当にそうですね。これまでの僕らが伝えてきた、『前向きにやっていこう』っていうメッセージ性は壊したくないんですけど……でも、不安なことがあっても、それを隠さずにやっていこうっていう、今やるしかないっていう気持ちが強くて、それも伝えたかったんです」

大城「やっぱり、今“アカツキ”を出せたっていうのは何か運命的なものを感じるんですよね。これからもずっとやっていきたい曲だし、一年半やってきた経験は変わらず大切にしながら、さらなる高みを目指していこうという、ずっと歌っていきたいメッセージが詰まっている曲なので」

山本「オーディションで集まったバンドって、どうしてもマイナスからのスタートだと思うんですよね。でもそれを誰よりも自分たちが感じているからこそ、早くプラスに変えていきたくて。せっかくこの5人が集まったんだから、普通のバンドよりももっといいバンドになりたいんです」









12.「この前のツアーでは、スティックも持てないっていうときもあったんですけど、ドラムはいい発散になってるような気がします」



13.「スタジオのスーパーに行ったとき、すんごい巨大な梨があって。すごくビックリして、持ち上げたときのショット」

14.「スタジオの裏の公園です。ちょっと前まで、スタジオには毎日行ってたんで、今でも、その周りをよくぶらぶらしちゃいます」









「用もないのに、エンジニアさんの顔見て、安心して帰る、みたいなこともよくあります(笑)」



15.「これがいつも見てる景色です。あんまり空が見えない」

前号のHで、注目のテクノポップアーティストとして紹介したAira Mitsuki。その後、7月にリリースしたセカンドアルバム『PLASTIC』が、オリコンチャート15位というスマッシュヒットを記録、続く全国ツアーも大盛況と、まさに快進撃を続ける彼女ですが、今回は、そんなAira Mitsukiのクリエイションの裏側に迫ってみました。10月から始まった3ヶ月連続のAFTER PARTY真っ最中の彼女が送るリハーサルとレコーディングの日々。ではどうぞ。

——これ(1)は、DSをやってるんですかね。

「レコーディングの空き時間ですね。前まで全然ゲームやらなかったんですけど、『ドラクエ』とか『ポケモン』とか話題になるソフトが多いので、最近DSをやるようになって。ちょっとやってみてるところです」

——へえ。ゲーム好きなのかなっていうイメージがありましたけどね。

「まあ、マネージャーが全部やってくれてます(笑)」

——はははは。ちなみに、これ(2〜5)はレコーディング風景なんですけど、何のレコーディングをされていたんでしょう。

「今はまだリリースが決まってないんで、次のシングルに入れる曲をどれにしようかって、録りだめの段階ですね。まだ、仮歌を録っているところですね」

——お話を聞いてると、Airaさんて1年中レコーディングしてる感じですよね。

「してますね。レコーディングエンジニアさんといつもふたりでやってるんですけど、去年なんてクリスマスも年越しもいつも一緒で、さすがにちょっと気持ちが病みました(笑)」

——Airaさんにとって、ライヴとレコーディングっていうのは、それぞれどういう場所なんでしょう。

「難しいな……。楽しみ方も全然違うし、掻き立てられるものも違ってくるんですけど、レコーディングは、仮歌のときでも、それに仮の歌詞をつけて歌うので、やっぱり自分の内面を掘り下げていく作業なんですよね。ライヴは、作ってきたものをあとはそこで出すだけっていう。精神的にはライヴのほうが楽です。あと、暗い気持ちで作った曲が、意外にライヴで盛り上がるんだって思ったり。そういうことはよくありますね」

——これ(10〜12)は、まさにリハーサル風景？

「DJセットとドラムを叩いているところですね」

——Airaさんの場合、一回のライヴのなかで、ひとりで何でもやっちゃうんですよね。

「やりすぎだなって自分でも思うんですけど(笑)。ドラムはプロデューサーさんに勧められて始めたんですけど、最初は8ビート叩いてるだけでも、すぐ手の皮がむけちゃったりしてて、もうちゃぶ台ひっくり返したいような気持ちだったんですね。でも、最近のツアーではようやく様になってきたんじゃないかって自分でも思えて。そういうときに、練習も大変だったけどやっててよかったなって思うんですよね」

——なんで色々やってみようと思ったんですか。

「きっと、アーティストになる人って、こだわりとかなりたいアーティスト像みたいなものがあって、たとえばこの曲でデビューしたいとかあると思うんですけど、Airaはそういうのがあんまりなかったんです。ライヴができること自体が楽しかったし。だから、これやってみたらって言ってくれたら、『じゃあやってみまーす』ってフラットに思えるというか。で、やってるうちにどれも好きになっていくんです」

——今年は、7月にアルバムが出て、全国ツアーもありまして。今は、どういうモードなんでしょう。

「ツアーのAFTER PARTYっていうことで、3ヶ月連続のライヴが始まるんですよね。ツアーっていうとより大きな会場で、どんどん上を目指していく感じなんですけど、AFTER PARTYは、昔から観てくれてるファンの方が中心のライヴだったりしますし、いつもと同じことやるのもなあって思っていて。今は、いろいろ企画しないとなあという感じなんです」 H



1. 「ゲームって途中でめんどくさくなっちゃうんですよ」マネージャー曰く「メタルスライムを見つけるのがぼくの仕事です」とのこと。



2. 「スタジオのトイレの前。そこから歩いてきてくださいって言われたけど、全然歩いてない写真になってます」



3. 「レコード会社の専用のレコーディングブースなんですけど、Airaは毎回ここでレコーディングしてます」

POLAROID DIARY BY Aira Mitsuki

TEXT BY DAISUKE KOYANAGI



4. 「オートチューンも使ってるし、Aira自身はマイクにこだわりはないんですけど、これはビンテージの何かなんだっていうことをエンジニアさんに自慢されました（笑）」



5. 「癒し系のレコーディングエンジニアさんが、音の波形をチェックしてます」



6. 「牛筋の煮込み」

7. 「とんぺい焼」





8. 「ジャスミンティー」



9. 「これは不意打ちです。意味ないです（笑）」

10. 「まずは、曲を流すところから練習してます。それに加えてパフォーマンスがあるので、どこまでできるんでしょう（笑）」





11. 「これはKORGさんの新機種なんですけど、液晶があって、この曲のここで弾く音とか教えてくれるんですよ。ライヴですごく助かってます」

恋時雨

コイシグレ













カラフルでちょっと切ないイラストが画面を彩り、小説の朗読が始まる。
そして、主人公の揺れ動く感情にそっと寄り添うように流れてくる音楽……。
『恋時雨』は、女性作家×イラストレーター×ミュージシャンがひとつになって織り成す、
6つのショート・ストーリーです。朗読を担当するのは、女優の吉高由里子。
ここでは、そんなシンプルで味わい深い物語たちのご紹介と、
その中のひとつ『失恋のしかた』の主題歌を手がけたコトリンゴへのインタビューで、
身近な6つの恋物語を綴った『恋時雨』ワールドをのぞいてみました。

六つの恋の物語

恋のはじまり、恋の終わり。あるいはその間にある、幸せな時間——。
そんなありふれた日常のひとコマを切り取った6つのラブストーリー。
あなたの心の琴線に触れるのは、どんな瞬間ですか？　テキスト＝小島麻未



タイトルが示唆するとおりの、ドラマチックなストーリー。居酒屋でたわいもない話をして別れるだけの、純粋な友人関係を保っていたふたり。でも実は華織は白石くんが好きでした——たとえ、彼に奥さんがいたとしても。そんなある日、占い師に「友達付き合いをやめれば一緒になれる」ことを告げられ悩んだ彼女は、雨の夜、ついに行動に出ます。傘を捨てて、雨を味方にして——。運命の歯車が動き出すまさにその瞬間を、moumoonの多幸感溢れるサウンド（曲名もまさに“Destiny”）が演出するさまは、とても感動的。そっとあなたの背中を押してくれる物語です。



『されど運命』

story : 橋口いくよ　illustration : MARYCO　music : moumoon

『ゲーム』

story : 佐藤真由美　illustration : sioux　music : 高杉さと美



働く女性にドンピシャなストーリー。新鋭女性アーティスト、高杉さと美とのコラボも絶妙な本作『ゲーム』は、恋人のことが好きなんだけど、本音を言い合う関係になれない——そんなフラストレーションから始まります。主人公は部署の異動による忙しさで、心身ともに疲れきっていました。それでも彼に会いたい。だけど、会っても疲れは癒されるどころか、ますます蓄積されていく……そんな悪循環の日々。そして、やがて主人公は気付くのです。本音を言い合ってこそ、ホンモノの恋愛なのである——そんな当たり前のことに。素直になれない女子、必見。





恋の初期段階は、決して楽しいことばかりではありません。特に、付き合いはじめたばかりの恋人が持つ独特のクセなんかは、一度気になったら最後。主人公の彼女の場合、彼の歩く速度が異様に速いことを少し不満に思っていました。そしてある日のデート中、ついにはぐれてしまったふたり——。そこで彼女は、ふとあることに気付くのです。恋の始まりの段階では、軌道修正はいくらでも図れるはずであるということを。そんなささやかな決意と、新しい一歩を後押しするかのようにさりげなく流れる楽曲、前川紘毅“守るべき人”も、心に残ります。



『きみの隣を』

story : 狗飼恭子　illustration : 諏訪さやか　music : 前川紘毅



インパクト抜群のタイトルですが、主人公は玄関を出た瞬間にカナブンを踏み潰したことがきっかけで登校拒否になったという、一風変わった女の子。そんな彼女が今どうしようもなく惹かれているのは、明るくてほがらかな、“カナブンを踏み潰す可能性のない”男の子なのです。自分にない要素を持つまるで正反対な異性が特別輝いて見えるという体験は、まさに普遍的な片思いのひとコマ。“カナブン”という比喩が使われているのも新鮮です。唯一のモノクロイラストと、添えられる大橋トリオの静かなジャズ・ナンバーの相乗効果もばっちりな一編。



『カナブンはいない』

story : 狗飼恭子　illustration : 岸野真生子　music : 大橋トリオ



『通り雨』

story : 佐藤真由美　illustration : 西淑　music : 持田香織

元恋人との再会を“通り雨”にたとえる主人公、そしてそんな夜を“静かな夜”と表現した持田香織――この組み合わせが、今は別々の道を歩む主人公たちの特別な一夜を演出する一編。今から5年前、七海が彼と別れたきっかけは、彼が年下の女の子に恋をしてしまったこと。七海との婚約を破棄してまで、彼はその子を選び、結婚したのです。やがて時は過ぎ、ともに常連だったお店で再び出会ったふたり――。そこに流れる独特の空気に、きっと誰もが自分の経験を重ね合わせてしまうはず。時の経過は優しくも残酷だなと思わせられる、切ないストーリー。



『失恋のしかた』

story : 橋口いくよ　illustration : ヒラマツケイ　music : コトリンゴ

何気ない一言で、恋をいとも簡単に失う瞬間――。予想外な失恋ほど、痛いものはないかもしれません。璃子は、ふとした言葉で恋人を怒らせ、その場で「別れよう」と告げられてしまいます。突然すぎる失恋に諦めることができず、失意の日々を送る璃子。そしてある雨の日、彼から送り返された忘れ物の傘を手に取った璃子は、思わずある一言を漏らします――そして流れ出すコトリンゴの切ないシュガー・ボイス。その瞬間、恋はついに本当の終わりを迎えるのでした。思わず何度もくちずさんでしまう魅力を持つ楽曲のサビに、とことん酔いしれてみては。





DVD『恋時雨』VOL.1 & VOL.2

VOL.1【73分】 VOL.2【55分】
＜各3,129円（税込）＞ 11月20日同時発売
発売：フジテレビ／メディアファクトリー　©恋時雨





コトリンゴ

「雨がいろんなモヤモヤを洗い流してくれるっていう感じを、曲にできたらいいなって」
シンプルで力強いピアノの旋律にのせて、恋の終わりを歌ったコトリンゴ。主題歌"ame"の制作秘話を伺いました。

撮影＆テキスト＝小島麻未



──『恋時雨』についてまずお訊きしたいんですが、この小説『失恋のしかた』を読んだ感想はいかがでしたか？

「いくつかの小説のなかで、一番共感できたのがこのお話だったんです。恋って、本当にあっけない終わり方をしちゃうときもあると思うので……。初めは優位に立っていた女の子が、終わってみると男の人に逆にすがってしまう気持ちも共感できる気がしましたし。改めて小説って面白いなと思いましたね。私とは表現の仕方は違うけど、本当に身近な出来事が文字になって書かれているので、すごく突き刺さりました」

──そういう共感する部分があって、"ame"がつくられていったんですか？

「そうですね。特にこの話に関しては、本当に似たような思いをしたことがあったので。雨っていうモチーフも自分の曲によく出てきますし、忘れられないっていう思いも共感できるなって。あとは、雨がいろんなふっきれないモヤモヤを洗い流してくれるっていう感じも好きで、そういうところを曲にできたらいいなと思ってましたね」

──コトリンゴさんの音楽の世界は、現実と空想が入り混じった絶妙なバランス感覚がとても素敵だなと思うんですが、ふだん曲を作るときってどんな感じなんですか？

「まったくの思いつきですね。いいアイディアが閃いて、そこから広げていく感じ」

──ピアノに向かって、歌ったりしながら曲が出来るんですか？

「そういうときもあるんですけど、お風呂に入っていたり、電車に乗っていたりするときにふと思いついたアイディアのほうが、割と膨らみ方が速いし、自分の中でも盛り上がりますね。……なんか、脳みその不思議というか、ふっと気が緩んだ瞬間、例えば外の空気が気持ちいいなあって思ったりするときに、そこで何かが繋がるんです。それまで脳みその中のあらゆる引き出しをワーッて探していたけど見つからなかったものが、『あ、ここにあった』って」

──そういう曲の断片が日常のなかで生まれてくると、覚えておくのが大変ですよね。

「そうなんです(笑)。忘れてしまうので、お風呂に入っているときに思いついたときとかは、ワーッと出て、びしょ濡れのまんまピアノに向かうときもあります(笑)」

──(笑)。今回は小説に寄り添う楽曲ということで、ある意味での「枠」があったと思うんです。そういう時って、コトリンゴさんの世界観は、ふだんとはちょっと違う感じで楽曲に現れてくるんでしょうか？

「そこは、揺らぐ部分でもありますね。聴いてくれる人のこととか、色々と考えてしまうこともあるし。できればそれを全部ふまえつつ、忘れて作りたいんですけどね」

──そうなんですね。揺るぎない世界観を持っているという印象が強かったんですが。

「それは、あるようでないようで、あるんじゃないかと思います(笑)。いろんなことを考えて作っていても、結局は私の音になっている気もしますし。でも、まったく自由に作ったものとは違う化学反応が起きているんだなという気もします」

──では、この"ame"という曲を通して、何か変わったな、成長したなと思うことはありましたか？

「今までは、自分の楽曲として出すときはちょっと避けてしまうような、少し大人っぽいテーマだったんですよね。歳相応のテーマではあるんですけど。今までは、現実に起こったことを描くにしても、あえて比喩を使っていたり……人をハリネズミに置き換えてみたりとか(笑)」

──(笑)なるほど。

「あと、今までは歌の主人公は割と"僕"っていう一人称が多かったんですけど、今作では初めて"私"を使っているんです。前は、"私"って使ってしまうと、本当にリアルな自分と繋がってしまう気がしていて……聴く人がそれぞれ自分を投影してくれればいいなって思っていたんですけど。でも、"私"って使っても、みんな投影してくれますよね、きっと(笑)。だからこれからは、こういう曲も書いていきたいなと思います」

3rd アルバム『trick & tweet』発売中。 初のバンドワンマンライブは11月28日(土)、代官山 unit にて。

蒼井優10代最後の写真集『トラベル・サンド』絶賛ロングセラー中!



「それにしても地球って盛り沢山だなー。
私の人生の中で、どれくらいの景色を
見ることが出来るんだろう。
できるだけ多くのものを見たい。」

（本文日記より）

ロス→モハビ→ラスベガス
→デスバレー→タフト→サンタバーバラ
→ロス→サンディエゴ→メキシコ→ロス

蒼井優が、フォトグラファー・高橋ヨーコと二人きりででかけた旅のドキュメント。
日記とともに綴る「すっぴん」プライベート・アルバム。

唯一無二の個性を放つイノセントな存在感と確固たる演技力で、いまや日本映画界を代表する女優へと成長した蒼井優。そんな彼女の透明感溢れる魅力が存分に詰まったスペシャルな写真集が、この『トラベル・サンド』です。撮影は、独特の静けさに満ちた世界観の中に空気や時間の流れまで伝わってくるような瞬間を切り取るフォトグラファー高橋ヨーコ。「他にはない写真集を!」ということで、蒼井さんがはたちを迎えるちょっと前、蒼井さんとヨーコさんの二人っきりでアメリカへ送り出しました。事務所の協力により、マネージャーの同行もなし、トランクと身ひとつのまま車で移動し、宿もその日の気分で決めるという、10代の女優さんにはあるまじき2週間の撮影旅行を決行。毎晩つけてもらった手書きのダイアリーと、誰も見たことのないプライベートな表情が満載の（ほとんどすっぴん!）、誰かにプレゼントしたくなるような写真集です。是非手にとってみてください!

蒼井優写真集『トラベル・サンド』　撮影＝高橋ヨーコ　定価 2,415円（税込）　A4変型　●ISBN 978-4-86052-054-0

※ご注文は、お近くの書店にてお願いします。ご自宅へのお届けは、注文センター（042-944-0451/平日9:30〜17:00）、または弊社ホームページ（http://www.rock-net.jp）にて承っております（送料380円）。

蒼井優、シベリア鉄道でロシアを行く! トラベル写真集第2弾、『ダンデライオン』発売中!

蒼井優が、フォトグラファー・高橋ヨーコとともに、今度は冬のシベリアへ。10日間の旅の記録をとじこめた、スペシャル・トラベローグ。デジカメ旅日記つき。

『ダンデライオン』は、トラベル・シリーズ第2弾となる蒼井優の写真集。10代最後の写真集である前作『トラベル・サンド』ではフォトグラファー高橋ヨーコとふたりきりで夏のアメリカを訪れましたが、今度の旅行先は極寒のロシア。マネージャーの同行もなく、蒼井優×高橋ヨーコ×タンナイミサ（スタイリスト）の女3人旅が実現しました。シベリア鉄道に乗ったり、現地の家を訪問したり、凍った川の上を歩いたり…シベリアの荘厳な風景の中に切り取られた蒼井優は、透明感と芯の強さをあわせもつ彼女の魅力がダイレクトにあらわれ、息を飲むような美しさをみせています（ちなみに、今作も全ページすっぴんです）。旅の思い出を綴ったデジカメ日記も収録し、ちょっぴり大人になった蒼井優の魅力が最大限に詰まった決定版写真集です。



「自分がロシアにいることが
未だに信じられない。
この国では
何が待っているのだろうか。」

（本文日記より）

ハバロフスク→シベリア鉄道
→イルクーツク→ブリヤート共和国
→アルシャン→ウラジオストク

蒼井優写真集『ダンデライオン』　撮影＝高橋ヨーコ　定価 2,520円（税込）　A4変型 ●ISBN978-4-86052-069-4

※ご注文は、お近くの書店にてお願いします。ご自宅へのお届けは、注文センター（042-944-0451/平日9:30〜17:00）、または弊社ホームページ（http://www.rock-net.jp）にて承っております（送料380円）。

Cut



特集：扉を開けた男たち
彼らのネクスト・ステージにはなにが待つのか？
ブラッド・ピット、ウォンビン、相葉雅紀
阿部サダヲのクロニクル・インタビュー、
山田孝之、flumpoolも！

彼らはなぜ、"ブレイク期" を経てもなお次なるチャレンジに挑み続けるのか——。CUT11月号では、今もっとも注目すべき3人の男たちの新境地に迫る!! ●鬼才監督の手がける作品に出演する一方で、最近では映画製作にも携わるなど、敏腕ビジネスマンとしても注目を集めているブラッド・ピット。タランティーノ監督の最新作『イングロリアス・バスターズ』を語った最新インタビューに加え、特別コラムや歴代表紙ギャラリー&語録集で、その輝かしい軌跡を追う！ ●兵役を経て、ポン・ジュノ監督の最新作『母なる証明』にて堂々のカムバックを果たしたウォンビン。少年のような心を持つ青年を演じた彼が、刺激的な撮影現場で掴み取ったものとは？ ●初の単独主演ドラマ『マイガール』で父親役を演じている相葉雅紀。嵐のデビュー10周年を迎え、かつてないほど充実した1年を駆け抜ける彼に迫る！ ●『舞妓Haaaan!!!』のスタッフが再集結した最新作『なくもんか』で主演を務めた阿部サダヲ。クロニクル・インタビューで、その役者魂を解き明かす！ ●昨年の秋のデビュー以来、驚異の快進撃をみせるflumpool。デビューからわずか1年で初の武道館公演2DAYSをソールドアウトさせた彼らの素顔とは？ ●そのほか、山田孝之、伊藤淳史×サンボマスター、ポン・ジュノ、チャーリー・カウフマン、さらに、宮﨑あおい、タナダユキ、浅野いにお、ウィスット・ポンニミットのレギュラー連載陣も絶好調のCUT11月号は、絶賛発売中です！

カット11月号 ●価格：690円（税込） ●雑誌コード02473-11 ●毎月19日発売 ●発売中

Editor's Note

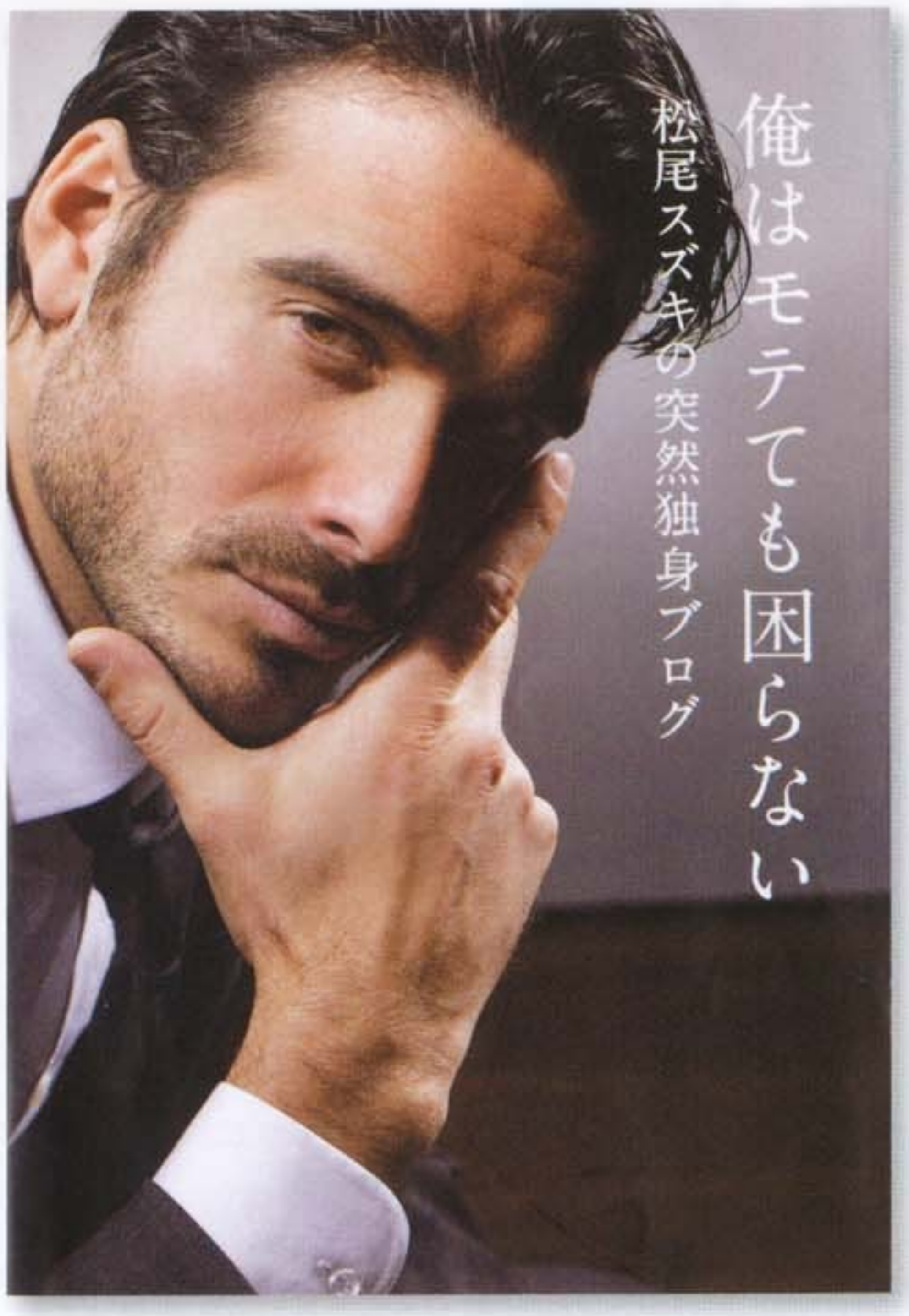
編集後記

今回も、編集長の内田亮と、Hをずっと支えてきた上田智子のクロストークという形でお届けします！

内田（朝、妙にスッキリしている）「よかったね、不定期刊行で」
上田（徹夜明け）「はぁ……？」
内田「Hが不定期刊行になってよかったね」
上田「もう眠いのにうるさいなあ。なに言ってるんですか？　毎年、数回しか出せないんですよ、いいわけないって」
内田「でも不定期刊行になったから、今回みたいに嵐のデビュー記念日にあわせて、10周年アニバーサリー号を出せるわけだよね。最高のタイミングじゃん。普通に発売日が決まっていたら今回みたいなミラクル技は、とてもでないけど無理なわけで。そういう意味で不定期刊行ってすごいよね」
上田「まあ、確かにこの号は不定期というのを最大限にいかした誌面になりましたもんね」
内田「うん。本当に美しいよね。お店とかでもいい感じで展開されそうだよな。本当に祭って感じで」
上田「だといいですね」
内田「にしても、今回、いつにも増して校了間際のボロボロ感がすごいよね」
上田「だって……」
内田「まあ、無理もないよね。今回、嵐のメイン特集はもちろんのこと、宮﨑あおいをフィーチャリングした『ソラニン』特集、阿部サダヲと宮藤官九郎と皆川猿時の『なくもんか』鼎談を担当した上に、わざわざ高知まで行って西原理恵子原作の『パーマネント野ばら』の現場取材もやって、挙句の果てには『のだめカンタービレ』のためにパリにまで行ってるんだもんね。そりゃあ、普通ボロボロになるわ。ご苦労！」
上田「ご苦労って……。本当に今回はまさに身を削る思いで作りましたね。でもキン肉マンじゃないけど、火事場のクソ力って本当にあるんだな、と思いましたよ、マジで。Hのためなら、寝なくてもいいと思えたし、ご飯を食べる時間さえも惜しく思えました」
内田「いや〜、編集者の鑑だね。とか言って、一応、上司として言わせてもらうと、体が資本なんだから……ぼくみたいにテキトーっていう姿勢も大事だよ。正直、この号に関してはほとんどなんもやってないし、ぼく」
上田「っていうか、なんもやらなさすぎですよ！　わたしが必死で原稿を書いているっていうのに、やれビヨンセのライヴだ、やれアークティック・モンキーズのライヴだ、やれクリブズのライヴだって、すぐいなくなるし」
内田「めんご」
上田「めんごって……アメリカ育ちだから五十歩譲っても、寒すぎ。でも、本当に毎日寝てばかりいた10代のわたしに、今の自分の姿を見せてやりたいっすよ。絶対にビックラこくから」
内田「寒さがうつってる」
上田「でも自分にとってこの号の制作は思い出として残ると思うなあ。まあ、Hは毎号思い出深いんですけど」
内田「うん、本当に愛情を感じる雑誌だよね。やっぱり今って出版不況でなかなか雑誌とかが前ほど売れなくなっちゃってるんだけど、Hっていつも雑誌ならではの魅力というか、手軽に持ち運びできるけど永遠に残るという紙媒体の特性が本当にいかされているよね。そして、そこには間違いなく作り手のパッションがある、と。読者の方もみんなそれを感じ取ってくれると思うよ」
上田「だと冥利に尽きますね」
内田「これで安心して死ねる、と」
上田「なんで死ななきゃいけないんですか？」
内田「いや、まだ会社始まったばかりなんだけど、今にも死にそうな顔しているから。なんかさっきからフラフラしているし、焦点も微妙に合ってないようだし」
上田「まあ、顔色がやけにいい編集長とは違い、こっちは死に物狂いで仕事してますからね」
内田「あ、顔色いいのわかる？　昨日、美味しい鍋食べてきたんだよね。そういえば、まだ原稿残ってるの？」
上田「はい」
内田「今からぼくランチしてくるんだけど、なんだったら食いながらチェックしてあげるよ」
上田「……ほんとに死にたくなってきました」

松尾スズキの公式ブログ「ドブロクの唄」単行本第2弾絶賛発売中！

俺はモテても困らない
松尾スズキの突然独身ブログ



天文学的なアクセス数を記録し続けた、そして「松尾スズキ、離婚」「松尾スズキ、松屋を絶賛」などなどしょうもない話題がYahoo!やアメブロのトップになるほど世に波紋を投げかけ続けた、松尾スズキのブログ「ドブロクの唄」が2009年4月をもって終了。に伴い、その後半を書籍化！ 演出家・劇作家として、映画監督として、俳優として、そして文筆家として、とにもかくにも「モテても困らない男」松尾スズキ、40代後半の「魂の記録」です！ 発売後1ヶ月半が経ちましたが、日記と写メールで創作活動の裏側と私生活を惜しげもなくさらし、自慢の手抜き（?）料理レシピまで披露するさまに、読者の皆様から次々と絶賛のお声をいただいております！



＜本書の内容＞

2008年1月から2009年4月までのブログはもちろんのこと、レアすぎる本人手書きによるまえがき、鶏から＆ポテサラからダメ丼や嘘つきリゾットまで、松尾ちゃんが料理指南する「松尾流ひまつぶしレシピ。」、さらには、ブログに書かれた日々をふりかえる「あとがき座談会」、これを読めば松尾通！ な、やたらに詳しすぎる索引、そして、大人計画メンバーも元妻子も愛猫オロチも……初公開のプライベート写メールの数々まで。これでもかと内容てんこ盛りの、お買い得な1冊です。

『俺はモテても困らない　松尾スズキの突然独身ブログ』
定価：1,400円+税　発行：ロッキング・オン　ISBN 978-4-86052-083-0
●お近くの書店にない場合は、店頭にてご注文ください。
●インターネットでのご注文は、http://rock-net.jp/ をご参照ください。

PRESENTS

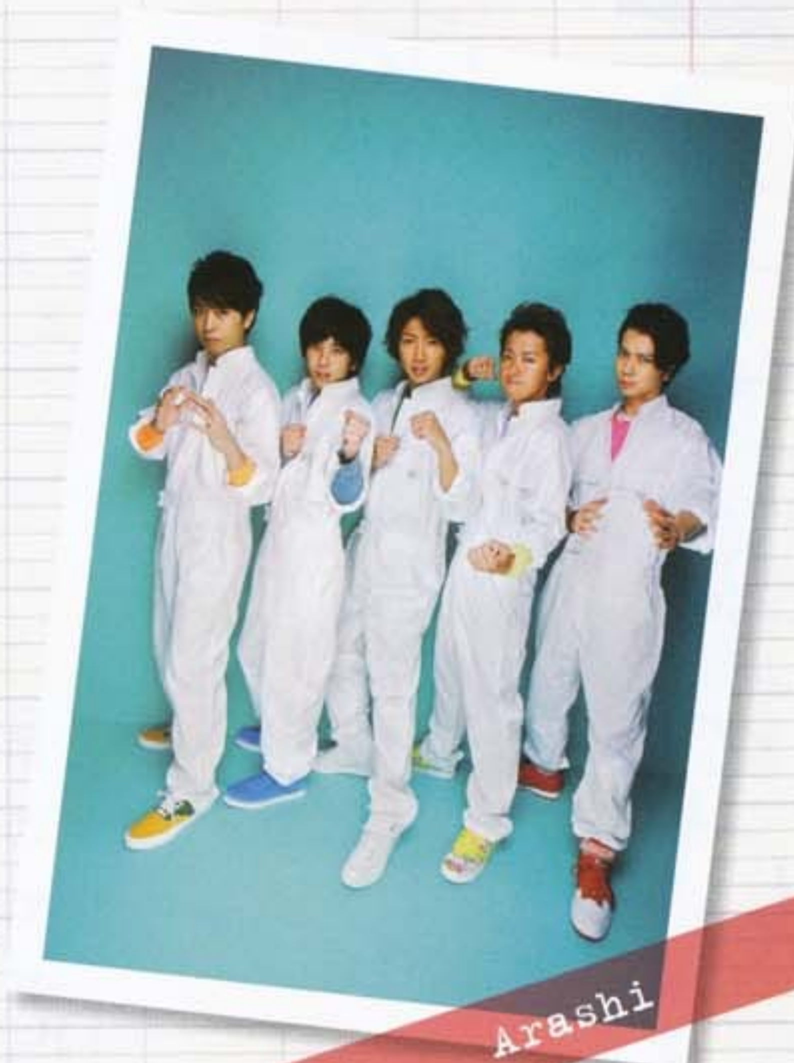


H103号いかがだったでしょうか？　今回も沢山のプレゼントをご用意いたしましたので、巻末にあるハガキのアンケートにお答えいただき、お好みの商品がない場合はZとご記入の上お送りください。抽選で10名の方に図書カード2000円分を差し上げます。当選者の発表は、発送をもってかえさせていただきます。たくさんのご応募お待ちしています！

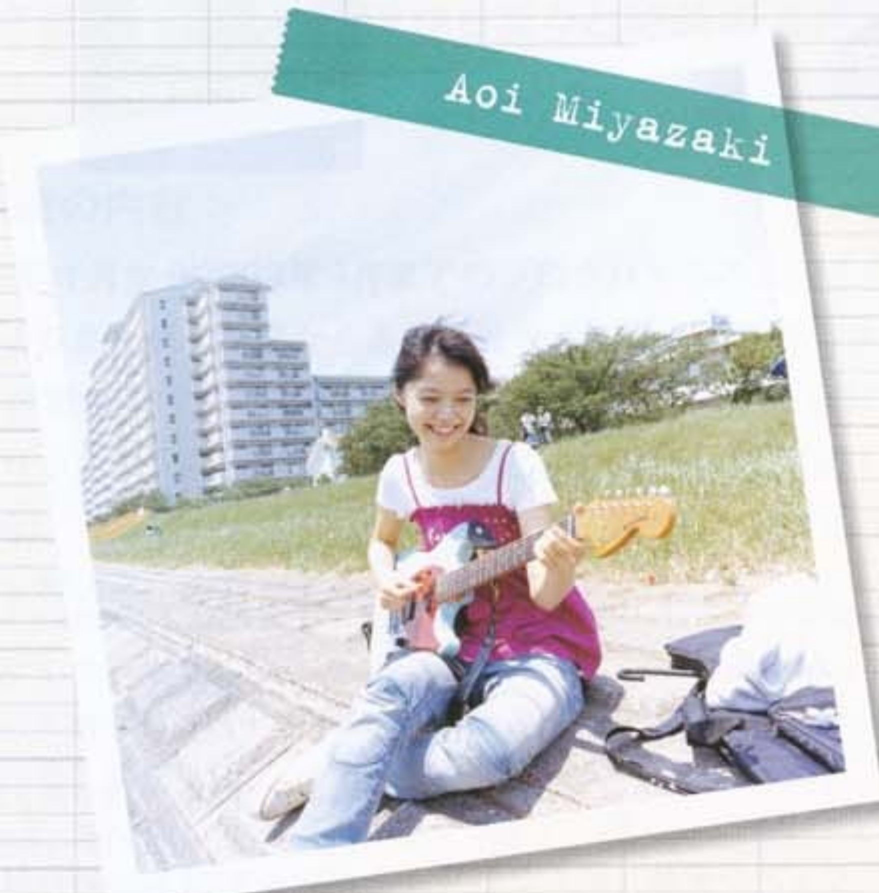
A.今では手に入らない嵐表紙のバックナンバーを特別にお蔵出し！『H』2004年4月号、2005年10月号、2007年4月号を各3名様に（ご希望の号をひとつ明記してください）。B.阿部サダヲ×皆川猿時×宮藤官九郎ポラを１名様に。C.坂本真綾サイン入りポラを1名様に。D.NICO Touches the Wallsサイン入りポラを４名様に。E.臼田あさ美 サイン入りポラを２名様に。F.Aira Mitsukiサイン入りポラを１名様に。G.TOPPER ロンカドール・ブーツ（グリーン、24cm、税込10,290円）を２名様に。H.映画『ティンカー・ベルと月の石』（12月23日公開、ウォルト ディズニー スタジオ モーション ピクチャーズ ジャパン配給、問：フレスコ03-3541-8721）の特別試写会招待券を15名30名様に（12月12日【土】、開場15：00／開映15：30、東商ホール、11月30日必着）。I.DVD『群青』（主演：長澤まさみ、11月25日発売）リリース記念　オリジナル図書カードを５名様に。

H memo

「『ソラニン』があおいちゃん主演で映画化」という話を聞いた瞬間、「あおいちゃんがギターを弾いて歌うなんて楽しみすぎる！」と思った人は私だけではないはず。クライマックスのライヴシーンを見学させていただいたのですが、とにかくもう「最高！」の一言。あおいちゃんの歌声も可愛いし、ビリー役・桐谷健太くんと、加藤役・サンボマスター近藤洋一さんとのバンド感もバッチリで、ギターを一生懸命弾く芽衣子の姿に、ちょっとうるっときてしまいました。一方、『H』の撮り下ろしでお邪魔したのは、原作でも印象深い河原のシーン。緑の景色に映えるキャストの皆さんの姿が印象的でした。（上田智子）



Arashi



Aoi Miyazaki

これまでの嵐の撮影は、いかにアイドルらしくない（かつ嵐っぽい）写真を撮るかをテーマにしてきた『H』。でも今回は、嵐が時代のポップ・アイコンとなった今だからこそできる「アイドルのイメージ写真」をコンセプチュアルに撮り下ろさせていただきました。だから、全員お揃いの衣装に、同じポーズ、メンバーカラーをバックにしたソロショット、なわけです。「ひとりだけエア・キーボードじゃねえか！（笑）」「（かめはめ波のリクエストに）ほんとに出ちゃうけど、いいの？」と大騒ぎの５人の撮影はやっぱり楽しすぎました。撮影終了後にその場で脱ぎ捨ててもらったつなぎの写真もどこかに使われていますので探してみてくださいね。（上田智子）

のだめと千秋のフォトストーリーをフレンチ・シネマのように撮ろう！と意気込んでパリに行ったものの、撮影当日はあいにくの土砂降り。しかし、上野さんと玉木さんの雰囲気のよさがいい方向に働いたのか、途中から天気が味方してくれました。メトロ乗り場、カフェ、エッフェル塔が見える橋、セーヌ川……と、パリの風景にのだめと千秋がいるのは個人的にも大興奮。移動遊園地のメリーゴーラウンドでは、ぬかるみにスライディングしながら撮影してくれたＹＡＭＡさんに上野さんも玉木さんもテンションＭＡＸ。結果とっても素敵な写真になりました！　ちなみにこの写真は、橋のオブジェの顔真似中。役を離れるとお茶目なふたりなのでした。（上田智子）

Juri Ueno× Hiroshi Tamaki



大人計画の舞台『サッちゃんの明日』公演真っ最中の劇場にお邪魔して、まずは鼎談開始。皆川さんがとぼけたことを言って、宮藤さんと阿部さんが冷静に突っ込む、というグルーヴが面白すぎて、その場にいた全員が笑っているという珍しいインタビューになりました。スペースの都合上、全部入れられなかったのが残念。しかし宮藤さんと阿部さんが同い年なのは認識していましたが、皆川さんまで一緒だったとは！　写真ページは「39歳・放課後・青春まっさかり」みたいな光あふれるものになりましたが、撮影中も３人でコソコソ喋りながらゲラゲラ大笑いする姿を見て、「なんか、いいなあ」と思ってしまいました。（上田智子）



Sadawo Abe× Sarutoki Minagawa× Kankuro Kudo

Here Comes…



『I am GHOST』BeeTV、10月20日より毎週木曜・日曜の週2回5分ずつ配信中(全24話)

ソ・ジソブ主演のケータイドラマ、『I am GHOST』が配信中!

ムービーブログこと"ムーログ"をはじめ、ドラマ、ミュージックビデオ、ライブ映像、アニメ、お笑い、といった強力なオリジナルコンテンツが、たった月額315円(税込)でいつでもどこでも好きなだけ楽しめてしまう携帯専用放送局BeeTV。なかでもHオススメなのが、今アジアで一番ホットな俳優ソ・ジソブ主演の本格アクションドラマ『I am GHOST』です! 既に配信はスタートしていますが、今からでも全てのエピソードにキャッチアップできるのでご安心を。

あるアジアの国から日本にひとり密入国し、任務を遂行するとすぐに消える殺し屋"ゴースト"(ソ・ジソブ)。彼は、心に深い傷を抱えた女子高校生"愛"(谷村美月)と出会うことで日本脱出に失敗し、そこからふたりのスリリングで切ない逃避行が始まる——。素性を明かさぬために言葉を一切発することがないゴーストの心が、同じく深い孤独を抱える愛の心と深い部分で共鳴していく様がふたりの繊細でエモーショナルな演技からヒリヒリと伝わってきます。そしてもちろん、映画並みのクオリティを誇る超カッコいいアクションシーンは必見! アクセス方法は、iチャネル>BeeTV もしくは、imenu>動画>BeeTVです。ソ・ジソブのムーログとあわせて、今最も輝く男の最新作を手のひらで目撃せよ!



TOPPERの定番シューズから、ニューモデルが登場!

1975年に誕生し、ワールドカップではセレソン(ブラジル代表)のユニフォームをスポンサードしたことで世界的にも注目を集めてきたサッカーブランド、TOPPER。サッカーで使われるギアを長年作り続けてきたことで培われた個性や品質に定評のある同ブランドから、カジュアルシューズ「SP2009TW」(税込7,140円)が発売中です。TOPPERの顔とも言える定番の人気商品「PRO2000」のニューモデルである「SP2009TW」は、今シーズンのブランドテーマである「ブラジルの暖かさ」を表現するツイードを採用。これからの寒い時季にもマッチする季節感を演出してくれます。カラーリングも写真の鮮やかなピンクをはじめ、冬の装いにも合わせやすいブラウンやパープルと、計3色を展開しています。商品に関する詳細は、カメイ・プロアクト☎03-3514-1231までお問い合わせください。

今回、HではTOPPERが展開するレディースブーツ(24cm)を2名様にプレゼント! 折り返すことでショートブーツとしても楽しめる新シリーズ「roncador」で、冬の足元を楽しく暖かく演出してみてはいかがでしょうか? プレゼントの詳細は121ページに掲載していますので是非チェックしてみてください。





HbGとdocomo「P-10A」のコラボキャンペーン。

10代から20代の女性を中心に熱い支持を受けているファッションブランド「HbG」と、NTTドコモの携帯電話docomo STYLE series™「P-10A」の新色モデルがコラボレーション! HbGのキャラクターである迷彩柄のキャメろんが防水仕様の携帯電話である「P-10A」を持って水玉模様のウォーターキャメろんに変身、PCサイト・携帯サイトに登場します。現在、同サイトにてPC用のオリジナル壁紙や、オリジナル携帯待受Flashなどがダウンロードできるコラボキャンペーンを展開中です。

さらに、「P-10A」を利用中で、パナソニックのモバイルサイト「P-SQUARE」(iメニュー→メニューリスト→ケータイ電話メーカー→P-SQUAREでアクセス)のアンケートに答えていただいた方の中から抽選で50名様に、ここでしか手に入らないオリジナルコラボバッグ(写真:2種類×各25名様)が当たるプレゼントも実施しています。12月20日(日)までの期間限定なので、お見逃しなく!

キャンペーンの詳細は、「HbG」と「P-10A」のコラボコーディネートを見ることもできるスペシャルサイトにアクセスしてご確認ください。PCからはwww.hbg-p10a.jp、携帯からはmb.hbg-p10a.jpまで。





大人の着せ替え人形、「momoko DOLL」の展覧会が開催中。

映画やコスメブランドともコラボレーションするなど、"東京の今を切り取るリアル・ファッションドール"として20代〜30代の女性に人気の「momoko DOLL」。その魅力はなんといっても、細部にまでこだわりが行き届いたディテール。1/6スケールという小さいサイズながら、精巧に作られた顔やアウトフィット、小物などが「こんな女の子になりたい!」という願いとクリエイティブ心を刺激し、大人の女性向けの着せ替え人形としてブームにもなっているのです。

そんなディテールの中でも、「見えないオシャレ」であるインナーウェアにスポットを当て、過去に発売された商品やAutumn/Winterモデルの新作などが一斉に展示される展覧会が、渋谷パルコ PARTI B1Fのロゴスギャラリーにて11月10日(火)まで開催中です。「手のひらランジェリー」の世界がテーマのこの展覧会には、インナー&ウェアブランドの『KID BLUE』も参加。1/6スケールサイズに縮小したこだわりの新作ウェアを展示していたり、シューズブランド「STOC MARKET」のフェアも同時に開催されていたりと、momokoファンの方はもちろん、誰もが楽しめる内容になっています。入場料は無料。お近くにお越しの際は立ち寄ってみてはいかがでしょうか。

株式会社ロッキング・オン
平成22年度4月採用
契約社員デザイナー募集のお知らせ

職種———デザイン業務全般
求人———若干名
給与———月額35万円（当社規定の残業代・諸手当を含む）
待遇———契約社員、契約期間最長2年、
試用期間あり（1年ごとに契約更改）
正社員登用の可能性もあり
交通費支給、各種社会保険完備
勤務時間——10:00～18:00（裁量労働制）
休日・休暇——完全週休2日制、年末年始休暇
有給休暇、慶弔休暇

■応募方法

1）自身のこれまでの作品ファイル

2）課題作品1、課題作品2

課題1）株式会社ロッキング・オンの企業広告を一点以上作成して下さい。これはそのままロッキング・オンに掲載されることを想定してください。サイズはロッキング・オン1ページタテ257ミリ×ヨコ182ミリとなります。株式会社ロッキング・オンの魅力と方向性をより明確にアピールする斬新なアイデアの広告を作ってください

課題2）弊社が主催するROCK IN JAPAN FES.2010のロゴを作成して下さい

3）写真貼付の履歴書

以上3点を同封の上、下記住所「契約社員デザイナー係」宛でお送りください

応募締切——平成21年11月30日（月）必着
通知———作品選考を通過された方には実技試験、面接についてのご案内を平成21年12月上旬までに封書にてお知らせいたします（実技試験、面接の日程は12月中旬を予定しております）
勤務開始——平成22年4月（可能な方は3月からお願いする場合がございます）

宛先は以下の通りです。なお電話やEメールによるお問い合わせ、直接のご訪問は堅くお断り申し上げます

〒150-8569
東京都渋谷区桜丘町20-1 渋谷インフォスタワー19F
（株）ロッキング・オン「契約社員デザイナー係」

※頂いた個人情報は、採用選考にのみ使用いたします

rockin'on

ROCKIN'ON

JAPAN

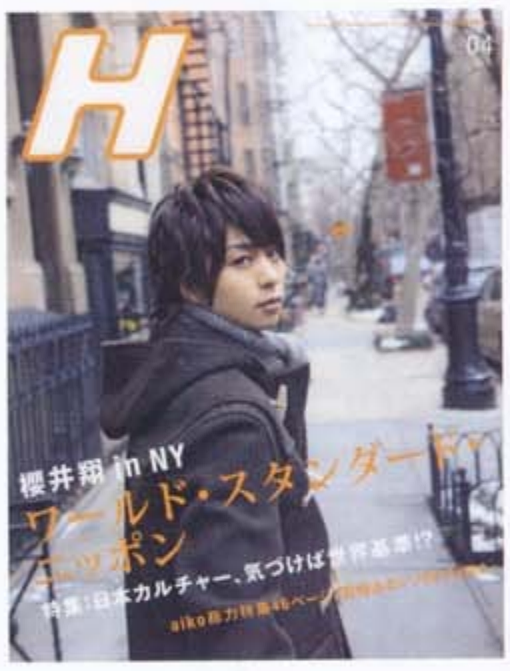


BUMP OF CHICKEN、
待望の新章に迫る4人全員超ロング・インタヴュー!!
the HIATUS・細美武士、独占インタヴュー後編
アジカン、マキシマム ザ ホルモン、Perfume、etc……
JAPAN12月号は11月20日発売です!!

表紙巻頭はBUMP OF CHICKEN！ 両A面シングル『R.I.P./Merry Christmas』を完成させ、既にアルバム一枚分に及ぶ新曲を書き上げているというバンプの今、そしてこれからについて、じっくりと4人に訊く超濃厚インタヴューを敢行！ 全ロック・ファン、必読の巻頭特集です!! ●細美武士、2号連続の独占ロング・インタヴュー後編！ 11月にリリースされる新たなEPで到達したthe HIATUSの新境地に迫る！ ●ASIAN KUNG-FU GENERATIONの約1年2ヶ月ぶりのニュー・シングル、『新世紀のラブソング』。新しい時代に、アジカンが鳴らす新たな音とは!? ●マキシマム ザ ホルモンがV系バンギャ、そしてコスプレ集団と対峙する!! 限定企画「地獄絵図」、阿鼻叫喚のライヴレポート！ ●絶好調のPerfume、「直角二等辺三角形TOUR」の横浜アリーナ公演を徹底レポート！ ●flumpool、大好評の集中連載：個人面談インタヴュー。第3回は寡黙なベーシスト、尼川元気の素顔に迫る！ ●待望の2ndアルバム『オーロラ』をリリースするNICO Touches the Walls。アッパー・チューンからバラードまで網羅する多彩な新作についてメンバー4人に訊く！ ●DIR EN GREY本誌初登場！ 今こそ世界を圧倒するDIR EN GREYの表現の核にJAPANが肉迫する！ ●その他にも、サンボマスター、黒猫チェルシー、安藤裕子などなど、JAPAN12月号は11月20日発売です！

ロッキング・オン・ジャパン12月号 ●予定価格600円（税込） ●雑誌コード09797-12 ●毎月20日発売 ●11月20日発売

H RECOMMEND



VOL.101 2009年4月号

特集『ワールド・スタンダード・ニッポン』
櫻井翔 in NY
aiko46P総力特集／宮崎あおい／ Perfume

☆映画『ヤッターマン』のワールド・プレミアに出席するため、NYを訪れた櫻井翔に独占密着! 街角にたたずむ姿を捉えたフォト、『NEWS ZERO』の取材&コミコン会見&ワールド・プレミア密着レポート、そしてNY行脚を振り返るインタビューで、改めて日本を見つめ直した彼に迫ります。
☆さらに、「日本カルチャー、気づけば世界基準!?」と題し、世界中で密かに人気を誇る意外なアイテムなどの最新レポートをお届け!
☆aiko、祝・デビュー10周年! この10年を振り返る超ロングインタビューのほか、劇団ひとりとの初対面対談、aikoゆかりのアーティストに訊く「私だけが知っているaiko」、さらにaiko自身が撮りおろしたプライベート・オフショット・ダイアリーまで、46Pの特大ボリュームでお届けします。
☆また、宮崎あおいin『少年メリケンサック』バレンタイン・イベントのポラ日記、そしてPerfumeも登場!



VOL.100 2008年12月号

特集『流星の絆』36P!
二宮和也×宮藤官九郎、錦戸亮、戸田恵梨香
蒼井優/宮崎あおい/Perfume
小栗旬『クローズZEROII』現場潜入20P!

☆東野圭吾原作、宮藤官九郎脚本のドラマ『流星の絆』を徹底特集! 有明三兄妹役の、二宮和也、錦戸亮、戸田恵梨香のスペシャル・シューティングと単独インタビューに加え、宮藤官九郎×二宮和也の対談、キャスト&スタッフインタビュー、アリアケ3が撮りおろした現場オフショットでこの話題作に迫ります!
☆蒼井優が大好きな酒井駒子さんの個展、公園、カフェと吉祥寺をお散歩。素顔の優ちゃんが、等身大の今の気持ちを語ってくれました。
☆宮崎あおいがアクアリウムで過ごす休日。くるくると表情を変える彼女を捉えたスペシャルフォトと、『篤姫』の撮影を終えた心境に迫るインタビューをどうぞ!
☆その他、『クローズZEROII』の撮影現場潜入で捉えた小栗旬等キャストのインタビュー、Perfume、細美武士ポラ日記も収録。

BACK NUMBERS



VOL.102
2009年7月号

特集『最強女の子宣言!』/宮崎あおい×木村カエラ/蒼井優/中川翔子×マミタス/『なくもんか』阿部サダヲ、瑛太×塚本高史/川島海荷/たむらぱん/Aira Mitsuki/他



VOL.99
2008年5月号

特集『大野智のすごさを知っていますか?』/『花より男子F』大特集/木村カエラ/宮崎あおい『少年メリケンサック』/aiko/ゆず/YUI/大泉洋×monobright/他



VOL.98
2008年2月号

特集『コミックH08 マンガみたいに生きたい』/L・松山ケンイチ/峯田和伸×浅野いにお/うすた京介×羽海野チカ/若杉公徳/石原まこちん『THE3名様』/DJ OZMA/岡田准一×宮崎あおい/木村カエラ/蒼井優/他



VOL.97
2007年11月号

BUMP OF CHICKEN/藤原基央×山崎貴/『陰日向に咲く』岡田准一、宮崎あおい/塚本高史2万字インタヴュー/木村カエラ/蒼井優『百万円と苦虫女』/小栗旬/他



VOL.96
2007年8月号

特集『HELLO WORLD! 僕らはこうして生まれた』/ミッキーマウス/ミッフィー/ピーターラビット/スティッチ/映画『天然コケッコー』/木村カエラ/松田翔太/宮崎あおい/他



VOL.95
2007年5月号

特集『ふたりのH』/蒼井優/宮崎あおい/木村カエラ/中谷美紀/YUKI/HIROMIX/aiko/YUI/土屋アンナ/Salyu/中川翔子/DJ OZMA/林遣都×岡田将生/小栗旬×小出恵介/他



VOL.94
2007年4月号

特集『嵐の卒業旅行』/レミオロメン/YUI/中川翔子+蜷川実花/『アルゼンチンババア』堀北真希&よしもとばなな/成海璃子×松山ケンイチ/榮倉奈々×谷村美月/他



VOL.77
2005年11月号

特集『Hのあしあと1994〜2005』/吉川ひなの/緒川たまき/CHARA/奈良美智/宮崎あおい/中島美嘉/窪塚洋介/成宮寛貴/ORANGE RANGE/奥田民生×木村カエラ/『パラダイス キス』/YUI/安藤裕子/レミオロメン/他

バックナンバー購入方法のご案内

○バックナンバーの購入をご希望の方は、お近くの書店にてご注文ください。
なお、1〜76、78〜99号、『comic H』は全て売り切れです。
○バックナンバーのご自宅への郵送をご希望の方は、
郵便振替にて代金をお振込みください。
郵便局備え付けの振込み用紙に以下の内容を記入の上、ご入金ください。ご入金の確認後、2週間程度でお届けします。

＊口座番号＝00110-4-59106
＊加入者名＝（株）ロッキング・オン
＊金額＝『H』定価680円（77号は540円）×冊数＋送料1冊につき140円×冊数
＊あなたの住所・氏名・電話番号
＊通信欄＝『H』●号、●冊希望
注:窓口で手数料120円が別途必要となりますので、ご了承ください。

Hバックナンバー取扱店

丸善札幌ビヴォ店011-219-4215/リブロ池袋パルコ店03-5391-8600／HMV渋谷店03-5458-3411／リブロ渋谷店03-3477-8736／（以上『H』『comic H』 取扱店）今井書店出雲店0853-22-8181（『comic H』のみ取扱店）

ジュンク堂書店仙台ロフト店022-726-5660／ヴィレッジヴァンガードブーフ郡山店024-991-8242／ブックマンズアカデミー前橋店027-280-3322／丸善丸の内本店03-5288-8881／書泉ブックタワー 03-5296-0051／書泉ブックマート03-3294-0011／リブロ池袋本店03-5949-2910／リブロ池袋パルコ店 03-5391-8600／紀伊国屋書店新宿南店 03-5361-3301／ブックファーストルミネ新宿1店03-5339-9411／ジュンク堂書店新宿店03-5363-1300／ TOWER RECORDS新宿店03-5360-7811／ブックファースト渋谷文化村通り店03-5459-3531／文教堂渋谷店03-5468-2431／ HMV渋谷店03-5458-3411／リブロ渋谷店03-3477-8736／ブックファーストアトレ大森店03-5767-6831/ブックス ルーエ0422-22-5677/紀伊国屋書店国分寺店042-325-3991／ヴィレッジヴァンガード新百合ヶ丘OPA店044-965-8347／あおい書店川崎駅前店044-233-6518／ヴィレッジヴァンガード新潟WITH店025-227-5395／ TSUTAYA WAY ガーデンパーク和歌山店073-480-5900／リブロ名古屋店052-264-8526／ヴィレッジヴァンガード京都北山店075-707-6523／ブックファースト梅田店06-4796-7188／ジュンク堂書店難波店06-6635-5330／旭屋書店なんばCITY店06-6644-2551／ジュンク堂書店西宮店0798-68-6300／ブックファースト エビスタ西宮店0798-37-1661／ふたば書房つかしん店06-6422-0905／ジュンク堂書店三宮駅前店078-252-0777／リブロ広島店082-542-2261／ジュンク堂福岡店092-738-3322／旭屋書店イオン宮崎店0985-60-3881


わたしライフをアップグレード
SQUIRT® S4
スクォート　ナイフレス
ハサミ
栓抜き
極小ドライバー
大ドライバー
ネイルクリーナー
甘皮とり
裏面·定規
ピンセット
キーリング
+ドライバー
ヤスリ
LEATHERMAN TOOL Profile
1975年、自らの体験から新しいナイフプラスプライヤーのアイデアをまとめたティム·レザーマンは、その後8年の歳月をかけいつも携帯できるポケットサバイバルツールの製品化に成功しました。1983年に「レザーマンツールグループ社」を設立して、その完成体レザーマンツール「PST」の本格的な量産と販売をスタート。携帯性と充実した機能、ポテンシャルの高さを世界中で認められレザーマンツールはさらに進化してきました。アメリカ国内はもちろん世界中をマーケットとした結果、日本では1986年に「レザーマンツールジャパン社」を設立。レザーマン製品の正規輸入、およびそのアフターケア体制を確実なものとしました。現在、世界70ヵ国以上に輸出されているレザーマンツールは、アメリカでは各種の軍隊·警察に採用されて活躍し、その信頼性をゆるぎないものにしています。
原寸大
MADE IN USA
SIZE:オープン·10cm·クロス5.75cm
重さ:54グラム
Professional Quality
レザーマンツールの製品は、高品質な部品が厳格な手順に基づいてそれぞれ１００項目の加工、組み立て過程を経て最高の品質条件で出荷できるように厳しく品質検査を受けています。
squirt™ S4 knifeless
leatherman®
★レザーマン製品の詳しい情報は下記WEBサイトをご覧下さい。
http://www.leatherman-japan.com
レザーマンツールジャパン株式会社 TEL0575-23-5103 FAX0575-22-2347
LEATHERMAN
Now you're ready



NICO Touches the Walls



new album
「オーロラ」（いいニコの日）11月25日リリース

初回限定盤 CD＋DVD KSCL1525-1526 ￥3200(tax in) 特典DVD 日比谷野外大音楽堂ドキュメンタリー＋ライヴ映像2曲フル収録(B.C.G/image training)
通常盤 KSCL1527 ¥2800(tax in)

New Single かけら －総べての想いたちへ－

読売テレビ・日本テレビ系全国ネット連続ドラマ『傍聴マニア09～裁判長！ここは懲役4年でどうすか』主題歌

11月4日リリース シークレットライブ応募券付ステッカー封入 KSCL1469 ¥1,020(tax in)

「NICO Touches the Walls LIVE2009 All, Always, Walls vol.3 ～Turkeyism～」
2009/06/20 日比谷野外大音楽堂

1st LIVE DVD 12月16日リリース KSBL5915 ¥4515(tax in)

シングル・アルバム・DVD連続リリース記念「いいNICO」キャンペーン実施中。詳しくはオフィシャルHPまで！

NICO Touches the Walls TOUR2009~2010「&Auroras」

2009/12/23 Zepp Osaka
2009/12/27 Zepp Tokyo
2010/01/22 千葉LOOK
2010/01/28 京都磔磔
2010/01/30 金沢AZホール
2010/02/05 札幌ペニーレーン24
2010/02/07 仙台darwin
2010/02/11 高松DIME
2010/02/13 広島CLUB QUATTRO
2010/02/14 福岡DRUM LOGOS
2010/02/20 Zepp Nagoya

Ki/oon www.nicotouchesthewalls.net

www.senha.jp/nico

定価680円 本体648円
雑誌コード02474-12 Printed in Japan
Ⓛ-10.02.01
4910024741291
00648